TAMA UNIVERSITY
多摩大学

101教室　配布資料

# 2014年度
# 地域プロジェクト発表祭

日時：2014年12月13日（土）　10:00～17:10

会場：多摩大学　多摩キャンパス　101教室&201教室

主催：多摩大学地域活性化マネジメントセンター

## 2014年度地域プロジェクト発表祭　プログラム

| | 101教室 | | 201教室 | |
|---|---|---|---|---|
| 9:30 | 受付開始 | | | |
| **第1部（95分）** | | | | |
| | 司会：中庭 | | 司会：奥山 | |
| 10:00 | 開会の挨拶<br>教室移動 | | | |
| 10:20 | 葉加瀬太郎チャリティーコンサート報告 | 樋口裕一ゼミ | 志企業の会社案内プロジェクト | 梅澤ゼミ、石川ゼミ、奥山ゼミ、酒井ゼミ、志賀ゼミ、中村そのこゼミ、久恒ゼミ |
| 10:35 | 世代を繋げるみんなの食卓プロジェクト<br>−健康なまちづくりを目指して | 梅澤佳子ゼミ | | |
| 10:50 | コミュニティカフェ「タマラボ」を通じた<br>諏訪名店街での仮説検証プロジェクト | 浜田健史プロジェクトゼミ | 地域中小企業社史製作プロジェクト | 奥山雅之ゼミ |
| 11:05 | 多摩市立諏訪小学校<br>放課後子ども教室「英語であそぼう！」 | 石川晴子ゼミ | インターゼミ　多摩学班 | インターゼミ<br>（荻野、奥山） |
| 11:20 | 多摩市立諏訪小学校と地域の連携づくり | 梅澤佳子ゼミ | 明星大学ボランティアグループとの連合による<br>地域防犯活動 | 中村そのこゼミ |
| 教室移動（10分） | | | | |
| **招待発表：午前の部（15分）** | | | | |
| | 司会：梅澤 | | | |
| 11:45 | 感じよう農業　～喜び，苦労，人～ | 諏訪小学校5年生の皆様<br>（関聡司　先生） | | |
| お昼休み（60分） | | | | |
| **第2部（75分）** | | | | |
| | 司会：石川 | | 司会：杉田 | |
| 13:00 | メディア実践論 | 木村知義プロジェクトゼミ | 東京ヴェルディ応援プロジェクト | 久恒啓一ゼミ |
| 13:15 | 地域密着型店舗のラジオCM制作と関連プロモーション | 中村そのこゼミ | インターゼミ　地域（震災・環境・エネルギー）班 | インターゼミ（出原、木村、中澤、中庭、諸橋） |
| 13:30 | ハイブリッドメディア研究会 | 学長室 | 日の出産業振興プロジェクト | 奥山雅之ゼミ |
| 13:45 | 「天下の台所で「くいだおれ」<br>～様々な食べ物が食べられる街、大阪～ | 梅澤佳子ゼミ | 多摩手みやげプロジェクト | 久恒啓一ゼミ |
| 14:00 | 京王移動販売プロジェクト | 酒井麻衣子ゼミ | 横浜FCイベント | 江頭満正プロジェクトゼミ |
| 教室移動（10分） | | | | |
| **招待発表：午後の部（40分）** | | | | |
| | 司会：梅澤・諸橋 | | | |
| 14:25～<br>14:45 | 障がい者の就労支援とネットワーク | 東京経済大学　経営学部<br>山本聡ゼミ　の皆様 | | |
| | 世代間交流を長期的に行うシステム | | | |
| 14:45～<br>15:05 | 大阪地区観光まちづくりプロジェクト | 帝塚山大学　経済学部の皆様 | | |
| | 地域と連携して大学生が取り組むネットパトロール | 帝塚山大学　経営学部の皆様 | | |
| 休憩（15分） | | | | |
| **第3部（110分）** | | | | |
| | 司会：酒井 | | 司会：梅澤 | |
| 15:20 | スポーツゴミ拾いプロジェクト | 久恒啓一ゼミ | 公共政策研究会の取組 | 公共政策研究会 |
| 15:35 | 近隣交流七輪プロジェクト2014 | 梅澤佳子ゼミ | インターゼミ　アジアダイナミズム班 | インターゼミ<br>（金、小林、バートル） |
| 15:50 | インターゼミ　サービス・エンターテインメント班 | インターゼミ<br>（市岡、久保田、安田） | 企業インタビューによるシティプロモーション提案<br>ー町田市編ー | 中庭光彦ゼミ |
| 16:05 | 永山駅前まちびらき40周年プロジェクト | 松本祐一（多摩大総研） | 多摩・キャンパスフェスタ | 梅澤佳子ゼミ |
| 16:20 | 地域ビジネス構想プロジェクト | 奥山雅之ゼミ | BOPビジネス入門講座 | 見山謙一郎ゼミ |
| 16:35 | サンリオピューロランドの課題解決プロジェクト | 松本祐一プロジェクトゼミ | 多摩大学の非公認マスコットキャラクターをつくろう | 梅澤佳子ゼミ |
| 教室移動（5分） | | | | |
| 16:55 | 来賓ご挨拶 | | | |
| 17:05 | 閉会の挨拶 | | | |

# 葉加瀬太郎が多摩大学にやってくる!!!

大人気の
若手ヴァイオリニスト
松田理奈と共演!!

樋口ゼミ主催

## 葉加瀬太郎 チャリティコンサート

**2014年4月22日(火)** 18：30開演 (60分程度)

**多摩大学 多摩キャンパス 001教室**

**入場料：無料** 東日本大震災のチャリティコンサートの一環ですので金額は問いませんがお気持ち程度の募金をお願い致します。

**参加資格：多摩大学に関わっている方、関わったことのある方**

大学や付属校・系列校の在学生・保護者・OBOG・多摩大学との関連で仕事や学習・作業をなさっている方・なさった方など。ご家族やご友人と同行してくださるのは歓迎です。

**※未就学児のご来場はご遠慮ください。**

**出演者：ヴァイオリン 葉加瀬太郎・松田理奈**
**ピアノ マチェックヤナス**

**曲目：クラシックの名曲・葉加瀬太郎オリジナル曲**

入場をご希望の方は下記のアドレスにお名前・大学とのご関係・人数をご連絡ください。
なお、事前にご連絡いただかなくても当日の入場を歓迎いたします。
専用アドレス y.higuchisemi@gmail.com(樋口ゼミ 葉加瀬太郎チャリティコンサート係)

**当日は公共交通機関を利用してご来場ください。**

葉加瀬太郎コンサート分担表　　最終版

１４時３０分　　全員アゴラ前集合　アゴラ前、コンビニ前などでチラシをまいて勧誘
（１４時４０分　いったん解散）
１５時５０分　　４時限の授業のない４年生集合　アゴラ前
１６時３０分　　全員集合　００１教室
２０時　　解散予定

★ウラ
●演奏者対応
・演奏者到着　ゼミ長とともに挨拶、案内。近くにいて、聞かれたら答える。
・リハーサル中　　脇で見守る　時間があれば舞台わきのほかのメンバーと打ち合わせ
・本番中　　脇で演奏を聴く。客からの花束・プレゼントなどあったら預かっておく。
・花束贈呈　　それぞれの担当者に
・本番後　　演奏者の後片付けを手伝う。

●ステージ手伝い
・演奏者到着前　持ち物確認（テープ、譜面台）
・演奏者到着　ゼミ長とともに挨拶
・リハーサル中　　本番の演出などについて打ち合わせ（ゼミ長とともに）
椅子・譜面台・立ち位置・マイクの場所の変化を確認・ノートをとる。
マネージャーの指示に従う
・本番中　　わきに待機して、椅子・譜面台・マイクなどの移動
・本番後　　ステージの片づけ

●影アナ
・演奏者到着前　　全員の仕事の確認
・演奏者到着　　演奏者に挨拶・ゼミ生紹介
・リハーサル前後　　本番での出入りなどについて打ち合わせ。
影アナの練習　全体をコントロール
・本番前１５分・５分・直前・終了　　アナウンス
・本番後　　演奏者見送り

●挨拶
・演奏者到着　演奏者に挨拶
・リハーサル前後　　リハーサルに参加して、あいさつする場所など確認
・本番　　最初と最後に挨拶

★オモテ
●配布
・１６時３０分集合　　待機場所・仕事内容の確認
・１６時４０分　　配布物の整理　（アンケートなどをたたんでそろえる）
・リハーサル中　　リハーサルを聞く
・１７時５５分　持ち場に移動　（それ以前に中に入ろうとする客がいたら、とどめる）

・開場時間　チラシなどの配布　アンケートは入口の前に立ち４人で配布。
正面の大きい入口のみ開放する。開場：下扉のみ開放。演奏中：上扉のみ開放
出演者への花束などあれば、責任者が管理。
・本番中　２名は入口に待機それ以外は会場へ
・本番後　　アンケート回収。最終責任者がアンケートをすべて集めて樋口へ。

●ドアの前(誘導)
・１６時３０分集合　　待機場所・仕事内容の確認
・１６時４０分　　配布物の整理　（アンケートなどをたたんでそろえる）
・リハーサル中　　リハーサルを聞く
・開場時間　　入場者が早く来た時は、001 教室前の椅子に座ってもらう
・本番中　　演奏中に客を入れない。曲と曲の間に入れる。
演奏前は１階のドアから客を入れる。演奏はドア係りは１階に立つ。
入場者が来たら２階に案内する（１貸ドアは使わない)。
・終了後　　ドアを開けて、帰りを促す
　　バスを目指して走る人がいたら「ごゆっくりお歩きください」などという。

●撮影
・１６時３０分集合　腕章をもらう
・１６時４０分　　機材の確認　充電に気をつける
・リハーサル中　　ゼミ生の活動、リハーサルの様子を撮影
・本番中　　ビデオは据えっぱなし　充電に気をつける　カメラについては腕章

●外の案内
・１６時３０分集合　　待機場所・仕事内容の確認　　チラシを持つ。
・１６時４０分　　配布物の整理　（アンケートなどをたたんでそろえる）
・リハーサル中　　リハーサルを聞く
・１７時５０分～１９時　　外部で立て札を持つ　１９時を過ぎたら教室内へ

●席案内
・１６時３０分集合　　待機場所・仕事内容の確認
・１６時４０分　　配布物の整理　（アンケートなどをたたんでそろえる）
・リハーサル中　　リハーサルを聞く
・17 時４５～　　見学者の確認
・１８時　開場後　席案内　あいている席に導く　（学生は２階席へ誘導？）
・忘れ物の確認　　アンケート回収の呼びかけ

曲目解説

（演奏者の都合により、演奏曲目、演奏順が変更になることがあります）

●葉加瀬太郎　　Ｅｔｕｐｉｒｋａ　　（エトピリカ）

エトピリカとは絶滅寸前の海鳥の名前で、アイヌ語でくちばしが美しいという意味です。それをモチーフとしたためか、曲自体が雄大な自然を思い起こさせると同時に、美しさと寂しさがミックスして、どこか懐かしい気持をかきたてます。目をつむると自然にあふれた故郷を思い出すような優しい気持ちになれます。

●葉加瀬太郎　　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｓｋｙ　（アナザー・スカイ）

2002 年に全日空創立 50 周年を記念して葉加瀬太郎によって作曲され、10 年以上にわたり ANA のイメージソングとして親しまれ続けました。ヴァイオリンの心揺さぶる情熱的な音とピアノの心地よいメロディーが、機内のお客様を癒すかのような美しいハーモニーを演出しています。広い空を感じさせるような、音の高鳴りとともに快適な空の旅をお楽しみください。

●葉加瀬太郎　　流転の王妃～メインテーマ

「流転の王妃・最後の皇弟」は、2003 年にテレビ朝日にて放送された清朝最後の皇帝である愛新覚羅溥儀の弟、溥傑と、その妻となった嵯峨侯爵家の浩の生涯を描いたドラマです。日中の交流を描くストーリーとともに、葉加瀬太郎の音楽も大きな話題になりました。この曲は切なさや悲しさ、悔しさを感じさせるような暗いメロディーから始まります。後半になるにつれ、その気持ちがどんどん深く強くなっていくかのように力強いメロディへと変わっていきます。最後には、その感情が怒りに変わったかのように雰囲気が一気に変わります。まるで人間の黒い部分を表しているかのような、そんな曲になっています。

●フリッツ・クライスラー　　序奏とアレグロ

フリッツ・クライスラーは２０世紀に活躍したヴァイオリンの名手です。演奏家としても活躍しましたが、自分でも多くのヴァイオリン曲を作曲しました。「序奏とアレグロ」は、正確には、「プニャーニの様式による序奏とアレグロ」と題された曲です。プニャーニという１８世紀の作曲家のスタイルをまねてクライスラーが作曲したもので、現代でもしばしば演奏されるヴァイオリンの名曲です。ドラマティックに始まり、華麗で技巧的な音楽が続きます。

●ジュール・マスネ　　タイースの瞑想曲　　（オペラ「タイース」より）
フランスの作曲家マスネーのオペラ「タイース」の中で演奏される曲です。これまで堕落した生活を送ってきた娼婦タイースが神の道を説く修道士の言葉に心を動かされ、自分の人生を振り返る場面で演奏されます。本来はオーケストラ曲ですが、甘美で親しみやすいメロディのために、しばしばヴァイオリン独奏曲として演奏され、名曲中の名曲として親しまれています。

●葉加瀬太郎　　冷静と情熱のあいだ
江國香織と辻仁成のベストセラー小説「冷静と情熱のあいだ」のイメージ・トラックとして葉加瀬太郎が書き下ろした曲です。曲の中で静かな演奏と盛り上がる演奏があり、曲名の通り冷静と情熱のあいだというイメージを連想させられます。特に中盤の間奏での非常におとなしい演奏から展開される激しいラストは、情熱という表現が最も相応しい表現です。この葉加瀬太郎の「冷静と情熱のあいだ」を聴くだけでベストセラー小説「冷静と情熱のあいだ」の内容を想像することができるでしょう。

●葉加瀬太郎　　ひまわり
「ひまわり」は、2010 年から 11 年にかけて NHK で放送された連続テレビ小説『てっぱん』のテーマ曲として葉加瀬太郎が手がけた曲です。葉加瀬太郎が幼い頃に何度も訪れた瀬戸内海をイメージして作曲されています。一面に広がるひまわり畑を連想させるような、明るく、優しくて太陽のような暖かい癒やしを与えてくれる音楽ですが、どこか切ないような曲です。それぞれの思い出や景色を思い浮かべて聞いてみてはいかがでしょうか。

●葉加瀬太郎　　情熱大陸
1994 年 TBS 系列局で放送されて現在も続いているドキュメンタリー番組「情熱大陸」のオープニングテーマとして知られている葉加瀬太郎の代表作です。番組開始から間もないころに葉加瀬太郎がゲスト出演した際にオープニング曲を作ってほしいとプロデューサーから依頼があり作曲されました。最初は、オープニングの 30 秒間だけの曲でしたが、後にレコード会社の担当者からの要望によってフルバージョンを制作し、ヒットし、世に知れ渡っていきました。

（チラシ作成時は、ヴァイオリニスト松田理奈さんの出演が予定されていましたが、多摩大学ホームページなどでも告知しました通り、プログラムが変更されました）

解説担当ゼミ生
有城孝賢・大岩邦充・鹿住零・川崎優華・松瀬慶徳・松下亜樹・宮下翔・森澤佳介・吉越千紘・和田夏帆・池田陽香・江川知秀

多摩大学樋口ゼミ主催・葉加瀬太郎チャリティコンサート　アンケート

多摩大学樋口ゼミではこれからもこのようなコンサートを企画したいと考えています。そのための参考にいたしますので、お手数ですが、アンケートにご協力ください。

１　今回の特別コンサート全体について、どうお考えですか。

Ａ　大変満足　　Ｂ　満足　　Ｃ　ふつう　　Ｄ　やや不満　　Ｅ　大変不満

２　大変感動した曲◎　感動した曲〇をお知らせください（複数回答）。

Ａ　Etupirka　　Ｂ　Another Sky　　Ｃ　流転の王妃　　Ｄ　序奏とアレグロ

Ｅ　タイースの瞑想曲　　Ｆ冷静と情熱のあいだ　Ｇひまわり　Ｈ　情熱大陸

Ｉ　その他の曲

３　今回のコンサートの出演者、曲目、進行、運営などについてご意見、ご感想を自由にお書きください。

４　不満に思われたこと、改善するべきことなどがありましたら、率直にお書きください。

５　このコンサートを何でお知りになりましたか。

Ａ　ポスター・ちらし　（目にした場所　　）

Ｂ　多摩大学からの案内（HP　ＳＮＳ　その他）

Ｃ　多摩大学樋口ゼミ関係者からの案内

Ｄ　出演者からの案内

Ｅ　先生・友人・知人からの紹介

Ｆ　その他

７　メールアドレスなどをお知らせいただいた方には、今後、多摩大学でコンサートなどの活動を行う場合に、案内を差し上げます。よろしかったら、アドレスをお教えください。なお、この情報はほかの目的には使いません。

アドレス　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました

# 世代をつなげるみんなの食卓　- 健康なまちづくりを目指して -

多摩大学経営情報学部　梅澤ゼミナール 4 年
○瀧沢佑汰　庄子峻浩　谷屋夏樹
担当教員　梅澤佳子

## はじめに

本プロジェクトを立ち上げたきっかけは、私たちが大学二年から関わってきた「諏訪小学校と地域の連携づくり」活動である。地域での活動を通じて子どもたちを中心とした組織の連携（青少年問題協議会等）はしっかり機能しているが、住民同士の関係性が希薄であると実感した。

また、プロジェクトを通じて農園活動に関わっていく内に、食の大切さについても気づくことになった。

2 年間､ゼミの仲間が行っている他プロジェクトのイベントを手伝っていく中で､多くの高齢者の方々と接し、話しをしたことから多摩市の高齢化問題も実感した。

そこで私たちは、これまでの地域活動で得た「地域におけるつながりの希薄化」､「高齢者の問題」､「食の大切さ」という気づきと学びを活かし、食を通して高齢者の方や子どもの交流をはかりさらに健康を守れるような仕組みづくりができないかと考えた。

## 1 多摩市聖ヶ丘地区の特色

梅澤ゼミが連携している「聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会」の本部である”聖ヶ丘コミュニティセンター”通称「ひじり館」が立地する聖ヶ丘地区は、1984 年に多摩ニュータウンの第 4 住区として造成され入居を開始した新住宅市街地開発事業区域である。旧住宅･都市整備公団で集合住宅と戸建住宅双方で構成されており、聖ヶ丘一丁目には都営住宅や土地区画整理事業区域であるが、聖ヶ丘 2 丁目から 5 丁目も用地の用途面積比では戸建住宅主体の計画がなされた。特徴としては、集合住宅に加え戸建住宅が多く立ち並んでいる。聖ヶ丘の世帯数は約 2，965 世帯、人口数は約 7，065 人で構成されている。

ここに居を構え都心に通勤するサラリーマン住む戸建て住宅が多いことから、近年は、様々な事情により地方から呼び寄せられた高齢者(呼び寄せ老人)が多く、高齢になってから自分の知らない土地に移り住んでいることから、地域に溶け込めず、引きこもりがちなになっている高齢者が多いという特徴が聖ヶ丘地区にある。

## 2 本プロジェクトの経緯・目的

### （1）経緯

ひじり館及び聖ヶ丘地区との関わりは、梅澤ゼミとして 2010 年度から続いている。2010～2013 年度まで活動を行っていた「多摩うどんぽんぽこ・聖ヶ丘商店街の課題解決プロジェクト」に始まり、2012 年度から連携をはじめた｢近隣交流七輪横丁プロジェクト｣が、ひじり館及び聖ヶ丘地区との関わりを深めている。

2 年前、活動を続けていた｢多摩うどんぽんぽこ・聖ヶ丘商店街の課題解決プロジェクト｣のメンバーが、多摩ニュータウンの歴史や聖ヶ丘商店街の歴史について、聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会会長にインタビューを実施した。

インタビューを実施した際、聖ヶ丘商店街とひじり館で問題となっているのは子供達と高齢者との交流｢世代間交流｣が少ないことであった。当時の会長からは｢梅澤ゼミで何か世代間での交流企画を考えてくれないか｣との依頼を受けて、活動を行っていた「多摩うどんぽんぽこ・聖ヶ丘商店街の課題解決プロジェクト」のメンバーがひじり館で 2013 年度、世代間交流企画「習字で交流を図ろう！」を実施した。これらの活動が聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会の総務部長であり、多摩市食育ネットワーク委員会委員としても活動を行っている山

本さんの目に留まり「食育の問題、食を通じての世代間交流を考えてくれないか」との依頼を受けた。

諏訪小ＰＪのメンバーであった瀧沢は「食を通じた世代間交流の仕組みづくり」を卒業論文のテーマとして構想をまとめている段階で、両者の思いが春に一致し、本プロジェクトが発足したのである。

目的

近年は、高齢者が自宅に引きこもりがちであることから外出する機会が減少傾向にある。そこで我々は、自宅に引きこもりがちな高齢者と、核家族化で多世代交流の機会が少なく少子化で兄弟も少ない子ども達が、共に食事をすることで世代間での交流が図れるのではないかと考えた。近年、共働き世帯も増えており、子どもたちがひとりまたは、兄妹だけで食事をする機会も多いのではないかと考えた。

高齢者にとって交流・情報共有の場になり、子どもにとっては普段接することがない多世代間コミュニケーションが取れる場が提供できる。子どもたちは学校での出来事を、親の代わりに高齢者に話すことによって子ども達の自発的コミュニケーション能力が交流を通じて養うことが出来ると考えられる。共に食事をすること「共食」ができ、食に対する関心と理解を深め、高齢者と子ども達の「孤食化」を防ぐことができ、皆が心も身体も社会的にも健康であり続けることが本プロジェクトの目的である。

## 3 みんなの食卓プロジェクトとは

上記の経緯から 2014 年 6 月、聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会、多摩市青少年問題協議会「連光寺・聖ヶ丘地区委員会」、多摩大学梅澤ゼミの 3 者が連携し発足したプロジェクトである。近隣に住む高齢者の方と、子どもを中心に近隣に住んでいる方々が一同で集まり一緒になって食事をする場を提供する。これにより世代間交流を促進し、お年寄りの孤立化、双方の孤食化を防ぐことができると考えられる。

活動拠点は聖ヶ丘コミュニティセンター”通称”「ひじり館」である。ここは、我々の地域活動では様々なプロジェクトがお世話になっている地域の拠点である。「多摩うどんぽんぽこ・聖ヶ丘エリア課題解決プロジェクト」「近隣交流七輪横丁プロジェクト」そして我々「みんなの食卓プロジェクト」である。今回、プロジェクト結成にあたり多摩市青少年問題協議会連光寺・聖ヶ丘地区委員会も連携して下さることになった。聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会が発足されて 20 年、協議会と青少協が初めて連携して活動することになった。

## 4 本プロジェクトの社会的意義

コミセン運営協議会福祉部の事業には「ミニミニデイサービス」がある。この事業は、引きこもりがちな高齢者の外出を促し孤食の緩和をするために、定期的に地域のお年寄りを対象とした会を開き、皆で食事を行うものである。本プロジェクトは、「ミニミニデイサービス」の内容に加え、学生を含め、子どもたち、その親も含め、多世代が食卓を通じて交流することに意味がある。みんなの食卓は、高齢者はコミュニケーションの場の減少・孤食の問題を改善。また、将来的には子ども達は両親が共働きで寂しい食卓を皆で話しをしながら心豊かな食卓にして栄養管理・親の心配の解消を行うという方向性もあるのではないかと考える。上記の目的に記載したような多くの機能を果たすことができる。

## 5 本プロジェクトの活動内容

本プロジェクトの活動内容は主に 2 つある。1 つ目は、みんなの食卓プロジェクトの活動であり、2 つ目が子どもの食生活現状をアンケートを通じて調査することである。

（1）「みんなの食卓プロジェクト」開催に向けての活動スケジュール

■第 1 回目みんなの食卓プロジェクト打ち合わせ 8 月 19 日（火）10 時 30 分～12 時 00 分

連携する三者が顔合わせ(聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会、青少年問題協議会、多摩大学梅澤ゼミ)

■第 2 回目みんなの食卓プロジェクト打ち合わせ 9 月 22 日（月）10 時 00 分～11 時 30 分

第 1 回おにぎりの会の参加者とプログラムの確認、当日の進行について

■第 3 回目みんなの食卓プロジェクト打ち合わせ 10 月 7 日（火）14 時 30 分～16 時 00 分
プログラムの作成について
■第 4 回目みんなの食卓プロジェクト打ち合わせ 10 月 12 日（日）反省会　12 時 30 分～14 時
第 1 回おにぎりの会の振り返りと第 2 回おにぎりの会開催に向けて
■第 5 回目みんなの食卓プロジェクト打ち合わせ 11 月 24 日（月）10 時 30 分～11 時 30 分
第 2 回おにぎりの会のプログラム確認、当日の進行について

**第 1 回みんなの食卓プロジェクト「おにぎりの会」活動報告**

開催日時　10 月 12 日（日）
参加大人 26 名（男性 11 名女性 15 名）　小学生 9 名　計 35 名
開催時間　10 時～13 時

子ども達がおにぎりを自分たちで握ることで親は、自分の子どもが三角におにぎりを握ることができないことを知り、子ども達は自分で料理をすることの楽しさを知ることができた。高齢者の方は、普段はなかなか交流をする機会の少ない子ども達と触れ合いまた子ども達の握ってくれたおにぎりを食べて笑顔になっていた。また、青少年問題協議会の会長からお米の出来るまでや稲や苗の話しをしていただいた。

反省会の中で準備の段階から共に活動していた方が買い物の際に高齢者の男性が何を買えばいいのかわからない、店員ではなく近くのお客さんに場所を聞くなどの情報を得ることができた。

**[今後の予定]**

第 2 回みんなの食卓プロジェクト「おにぎりの会」が 12 月 7 日(日)に開催予定である。当日の地域プロジェクト発表祭では、「おにぎりの会」の活動報告が可能である。

**当日の風景**

**6 みんなの食卓プロジェクトの活動成果・課題点**

**[成果]**

みんなの食卓プロジェクトは、聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会と青少年問題協議会連光寺・聖ヶ丘地区委員会が共同で行うプロジェクトであり、聖ヶ丘コミュニティセンターができてから 2014 年で 20 年が経つが何かを共同で行うことは初めてのことで、この連携は大きな成果である。

おにぎりの会では「お米のおいしさに気づいた」「継続してやって欲しいなどの感想をいただき料理の楽しさ、普段関わることの少ない子どもとの時間を楽しんでもらえたと思う」などの賞賛をもらった。また、子どもたちはおにぎりが熱いのでハンカチに包んで工夫していた、手を洗うときに水を出しっぱなしにしていなかったなど高齢者からの子どもの印象が良くなった。

**[課題点]**

子どもの数が少なく、高齢者の方々の方が多かったが高齢者の方も女性の方が多く男性が少なかった。高齢者の方が一人で住んでいる場合女性の方よりも男性の方の方が自分で料理を作ることが少ないと思うので次回の

開催では、男性の方にも参加してもらえるように呼びかける。また、当日参加して下さった男性は、全員見学者となってしまい、出来たおむすびを食べる側に回ってしまった。次回は、新たな仕組みを検討しなければならない。

今回、座る場所が自由になっていたため知り合い同志で固まってしまっていた。次回は、席の場所を指定し、高齢者と子どもが交互に座れるようにするなどの工夫を行う。

## 7 食のアンケート調査の概要・目的

今回、近隣小学校の児童を対象にアンケート調査を行った。目的は児童が現状どのような食生活を送っているのか、食事の際何に楽しさを感じているかを理解することである。アンケートの内容については以下の 13 項目のとおりである。

### (1)アンケートの調査内容（以下の 13 の質問項目）

☆ 食のアンケート調査 ☆

あてはまるものやことに ○をつけてください。よろしくおねがいします。

学年　1・2・3・4・5・6　　性別　男　・　女

1. 誰と一緒に住んでいますか。（あてはまる人、全部に○をつけてください）
   1. おとうさん　2. おかあさん　3. 兄妹　4. おじいちゃん　5. おばあちゃん
   6. その他（　　）
2. 朝ごはんを食べますか。
   1. 毎日食べている　2. 週に2～3回食べる　3. 食べない　4. その他（　　）
   ↓食べている人はこたえてください。
3. 朝ごはんは、何時ごろに食べていますか。
   1. 5時ごろ　2. 6時ごろ　3. 7時ごろ　4. 8時ごろ　5. その他（　　時）
4. 朝ごはんは、だれと食べていますか。（あてはまる人、全部につけてください）
   1. おとうさん　2. おかあさん　3. 兄妹　4. おじいちゃん　5. おばあちゃん
   6. ひとりで　7. その他（　　）
5. 朝ごはんの時に何をしていますか。（あてはまるもの全部につけてください）
   1. 話しながら　2. ゲームをしながら　3. テレビをみながら　4. 何もしない
   5. その他（　　）
6. 学校がある時、おやつを食べますか。
   1. 毎日食べている　2. 週に2～3回食べる　3. 食べない　4. その他（　　）
   ↓食べている人はこたえてください。
7. おやつは、何時ごろに食べていますか。
   1. 2時ごろ　2. 3時ごろ　3. 4時ごろ　4. 5時ごろ　5. その他（　　時）
8. 放課後は、どこですごしますか。
   1. 家　2. 学童保育　3. 学校　4. その他（　　）
8. 夜ごはんを食べますか。
   1. 毎日食べる　2. 週に2～3回食べる　3. 食べていない　4. その他（　　）
   ↓ 食べている人はこたえてください。
9. 夜ごはんは何時ごろ食べていますか。
   1. 5時ごろ　2. 6時ごろ　3. 7時ごろ　4. 8時ごろ　5. 9時ごろ　6. その他（　　時）
10. 夜ごはんは、誰と食べますか。（あてはまる人、全部につけてください）
   1. おとうさん　2. おかあさん　3. 兄妹　4. おじいちゃん　5. おばあちゃん
   6. ひとり　7. その他（　　）
11. 夜ごはんの時に何をしていますか。（あてはまること、全部につけてください）
   1. 話しながら　2. ゲームをしながら　3. テレビを見ながら　4. 何もしない
   5. その他（　　）
12. あなたは、どこで、だれと、なにを食べるときが一番すきですか。
   どこで（　　）、
   だれと（　　）と、
   なに（　　）を食べるときが一番すきです。

しつもんはおわりです。ありがとうございました。

### （2）調査対象者

多摩市内小学校 2 校の小学 2 年生～6 年生（426 名）

A 小学校（5 学年）※1 年生は、不参加

| 学年/性別 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 15名 | 21名 | 35名 | 41名 | 12名 | 124名 |
| 女 | 19名 | 38名 | 35名 | 28名 | 19名 | 129名 |
| | 34名 | 59名 | 70名 | 59名 | 31名 | 253名 |

B 小学校（5 学年）※1 年生は、不参加

| 学生/性別 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 16名 | 22名 | 15名 | 19名 | 24名 | 96名 |
| 女 | 15名 | 13名 | 16名 | 14名 | 19名 | 77名 |
| | 31名 | 35名 | 31名 | 33名 | 33名 | 173名 |

（3）調査方法

質問紙によるアンケート調査

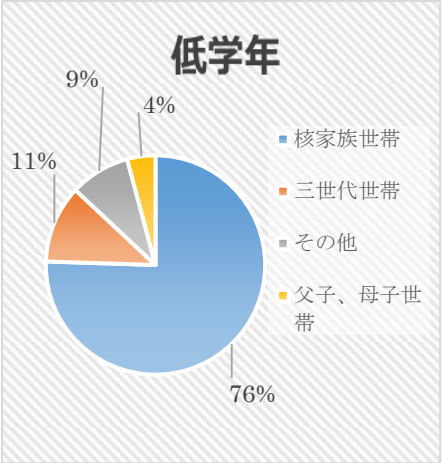
（4）調査期間

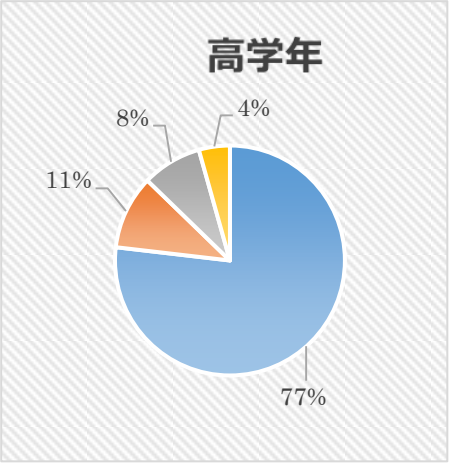
2014 年 9 月中旬～10 月中旬

アンケートの分析結果

問 1　誰と一緒に住んでいますか。

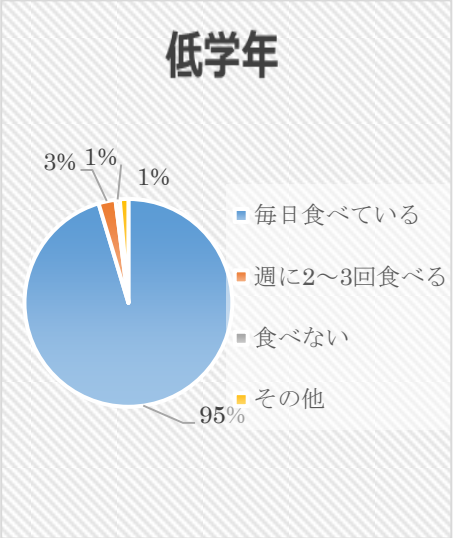
低学年、高学年ともに核家族が多く見られる。父子・母子世帯は低学年、高学年ともに 4%である。三世代で住んでいる家庭もそれぞれ 10%程度であり多くの子どもたちが高齢者の方と接する機会が少ないのではないかと考えられる。

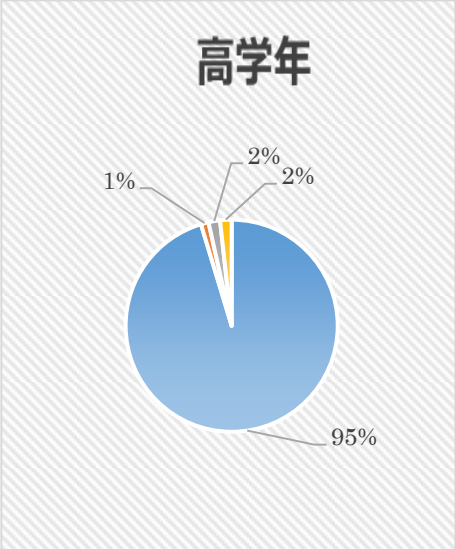



問 2　朝ご飯は食べますか

低学年、高学年ともに 90%以上の子どもが朝ごはんを毎日食べているが少数ではあるがあまり食べない、全く食べないといった子どももいることも事実である。



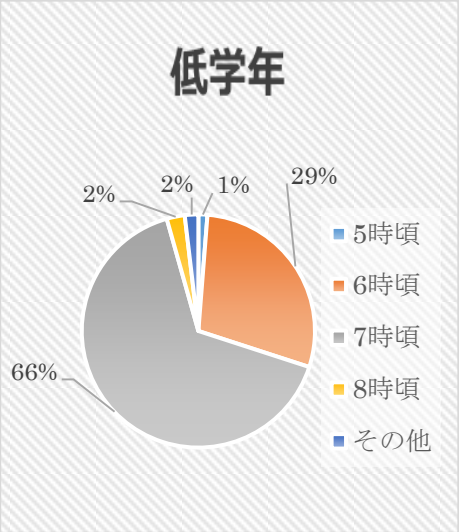



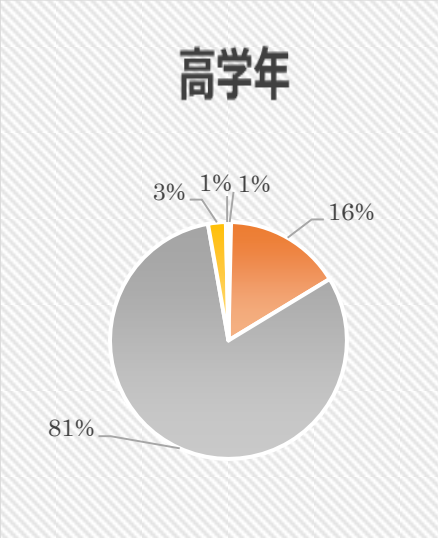

問 3　朝ごはんは、何時ごろ食べていますか。

低学年、高学年ともに小学校に登校する前の 6、7 時頃に朝ごはんを食べている。

一方で低学年、高学年で 1%が 5 時頃に朝ご飯を食べていることがわかる。朝早くに起きて、規則正しく生活を送れているのではないかと推測する。

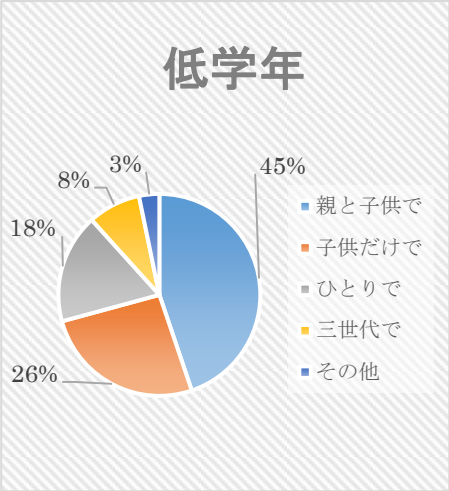
また 8 時頃と答えた児童が全体で 5%と多く見受けられた。

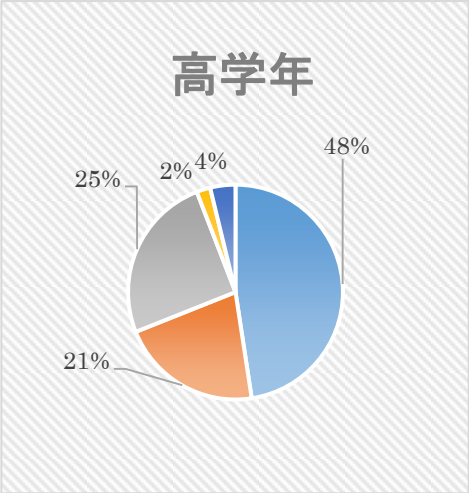


**問 4　朝ご飯は誰と食べていますか。**

低学年、高学年ともに親と一緒に朝ごはんを食べている子どもは 50%以下であった。ひとりで朝ご飯を食べている子どもは、低学年、高学年共に 30%以下であり、共働きの家庭が全体の 30%ほどあると推定される。

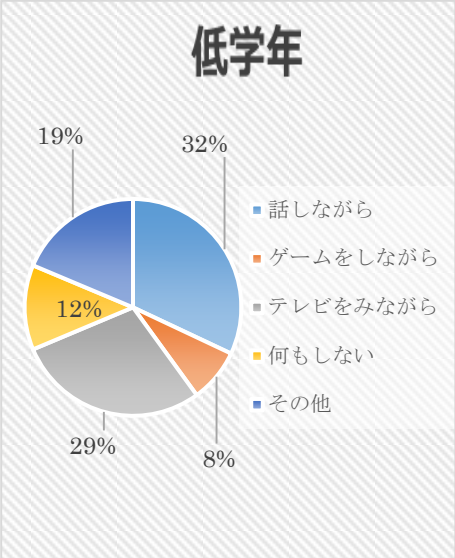


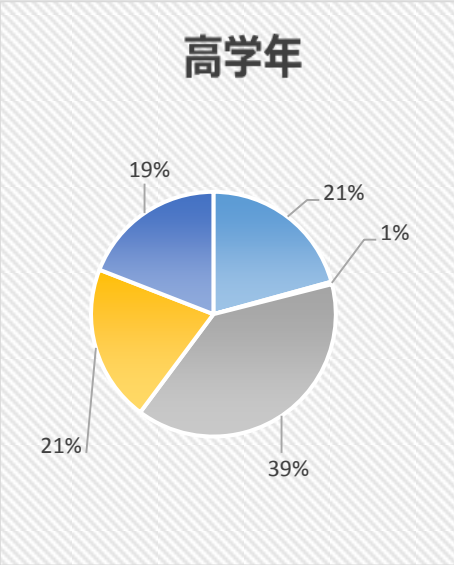




**問 5　朝ごはんの時何をしていますか。**

低学年、高学年共に何もしないという回答結果が低学年、高学年合わせて 33%いた。

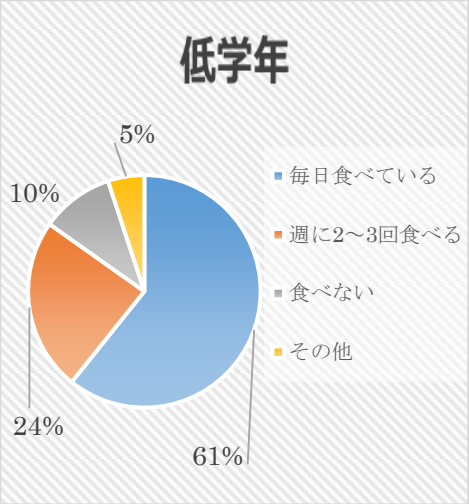
これは問 4 での食事を一人または兄弟だけで食べていることが関係しているのかもしれない。

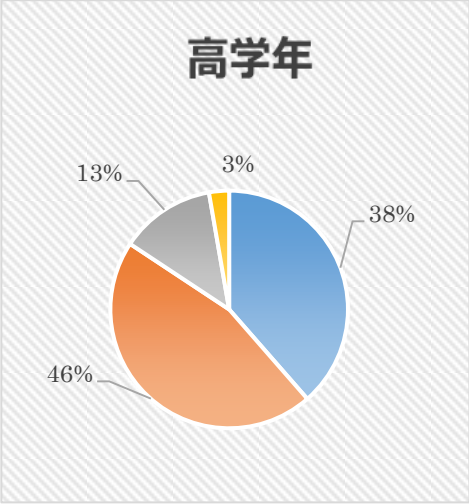



**問 6　学校がある時、おやつは食べますか。**

毎日食べている子どもは低学年で 50%以上を占めている。低学年の場合、問 8「放課後はどこで過ごしますか」の問について「学童保育」と答えたのが 30%いたこともあり、学童保育内でおやつを食べていると考えられる。高学年になると、その割合が減っていくことがわかる。毎日食べている子どもは全体の半分以下であり、週に 2～3 回食べる子どもが半数以下であり、46%を記録した。

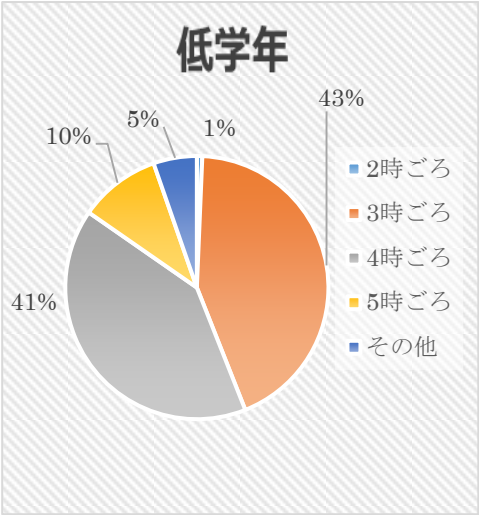


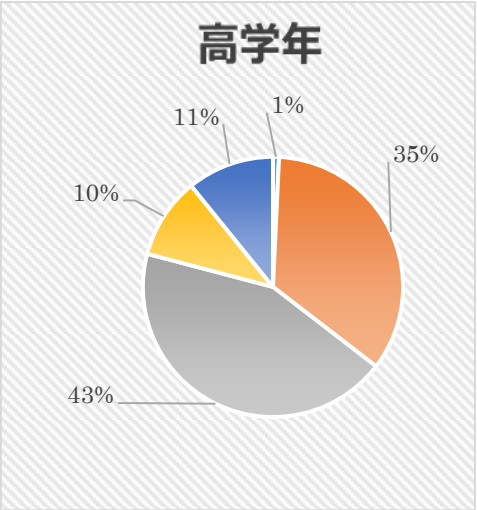




**問 7　おやつは、何時頃に食べていますか。**

低学年、高学年共に 4 時ごろにおやつを食べていることが多い。

放課後に家、学童保育などで一人または友達と食べていると考えられ、室内での活動が多いと考えられる。

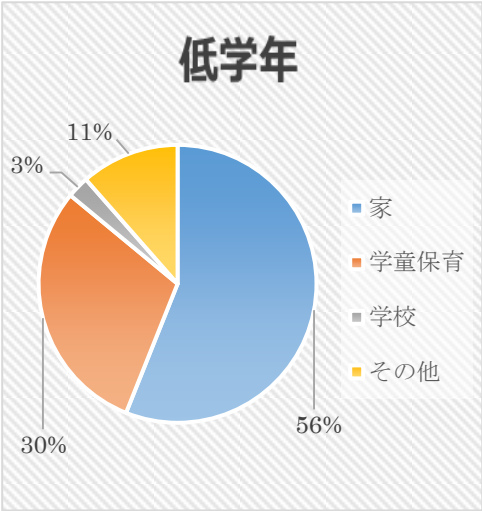


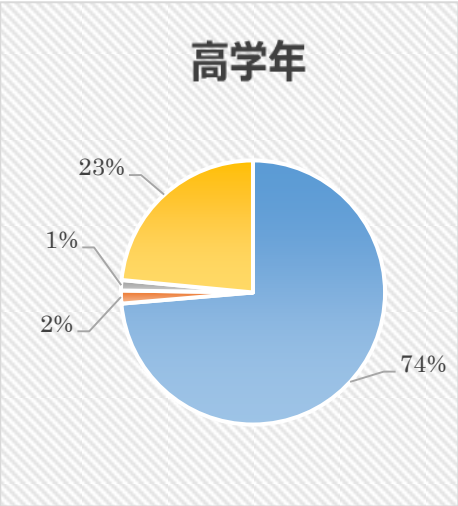




**問 8　放課後はどこですごしますか。**

低学年では、家が 56%おり学童保育で過ごすこどもが 30%いることから放課後家または学童保育で友達と過ごしており、高学年では、74%が家で過ごしそのほかのものが低いことから家でゲームなどを行っているか塾などに通っているのではないだろうか。

低学年、高学年共に家で過ごす子どもが 50%以上を占めていることからほとんどの子どもが学校内での体育、休み時間以外では体を動かしていないのではないかと考えられる。

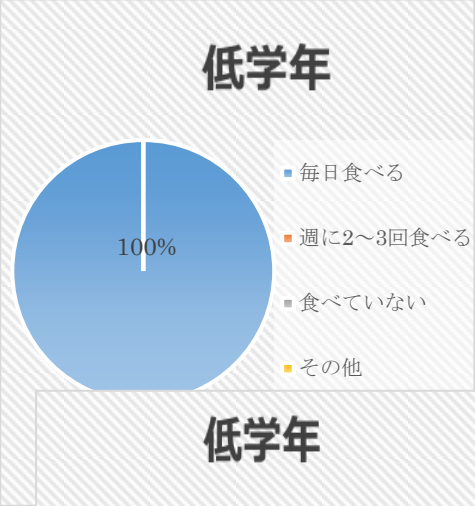


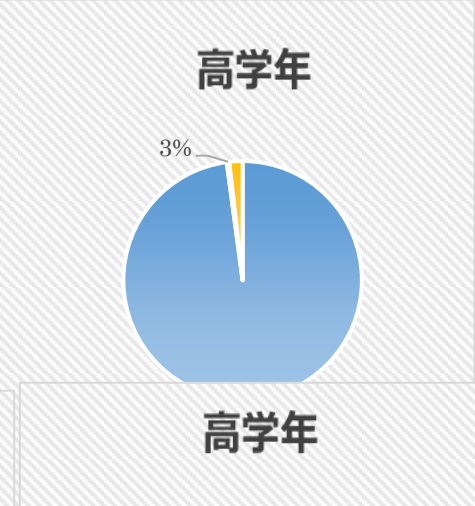




**問 9　夜ご飯は食べますか。**

2%と少ない数値ではあるが食べていないと回答している。

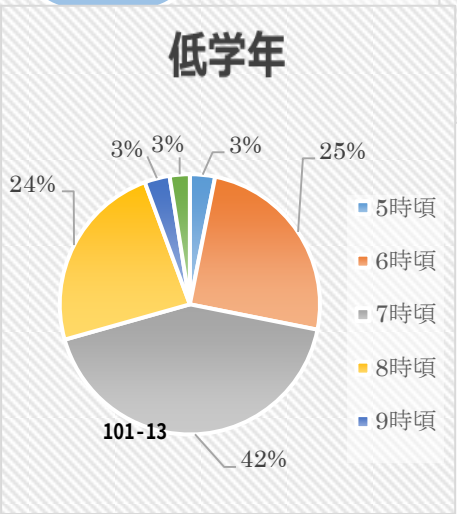
このような子どもたちにどのような対策を立てていくべきか考える必要がある。

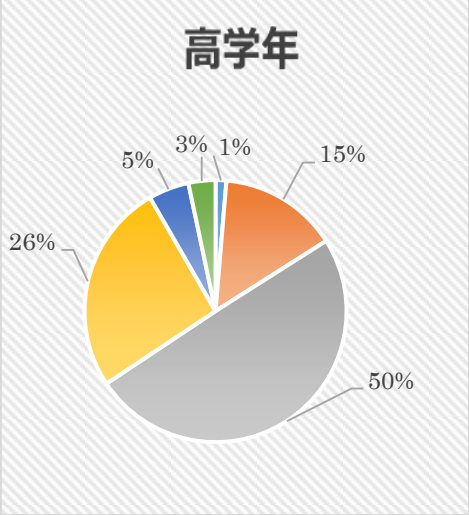



**問 10　夜ご飯は何時頃食べていますか。**

低学年、高学年ともに 6～8 時の間で夜ご飯を食べておりあまり遅い時間まで遊んでいるということはなく、8 時からの食事は少々遅い気もするが親と食べる子どもが多



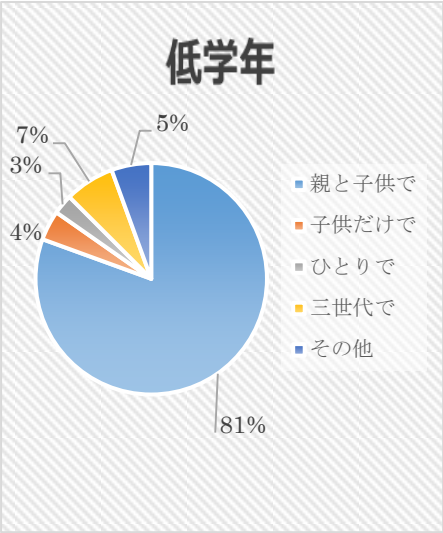



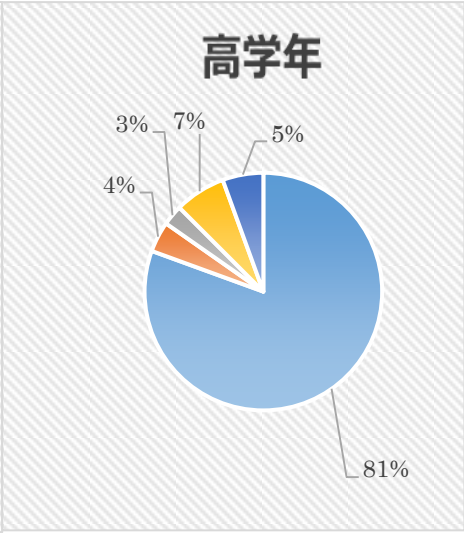
いため、親の都合上８時からの食事なのだと考えられる。
その他と答えた子どもの中には、高学年で学習塾がある場合８時頃に食べるなどが多く見受けられた。

**問 11　夜ご飯は誰と食べていますか。**

過半数が親と食べているが、子どもだけで食事をしている子どもが低学年、高学年合わせ 14%もおり 14%という数字は決して低い数字ではない。

これらの子どもたちに対して何らかの対策を立てていくべきではないであろうか。

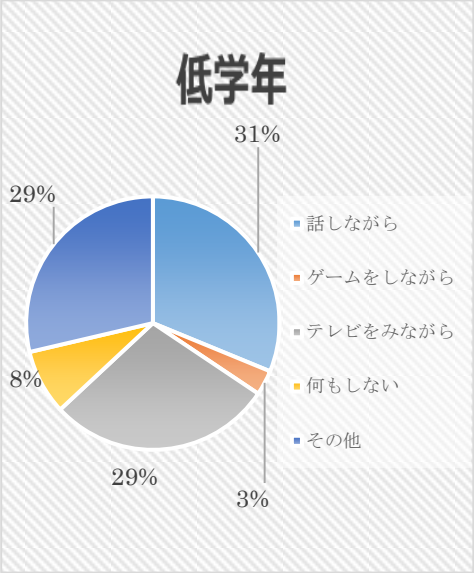


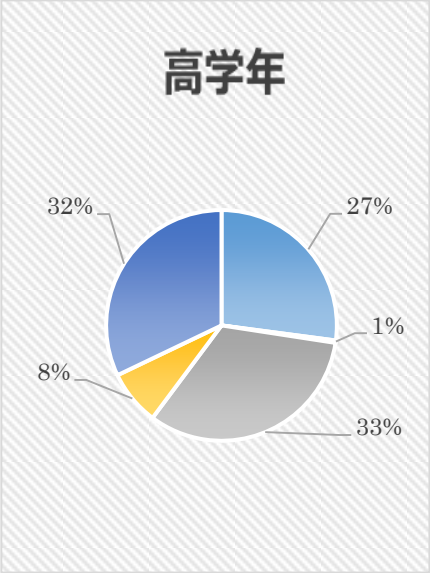




**問 12　夜ご飯の時何をしていますか。**

何もしないという回答が低学年、高学年合わせ 16%ゲームをしている子どもが 4%いた。

低学年、高学年共に話しながら食事をしている子どもたちは全体の 3 割程度しかおらず夜ご飯という場は子どもたちが学校であった話しをして家族内でのコミュニケーションをとることの出来る場であるにもかかわらずコミュニケーションを取れていない子どもたちが多くいる。

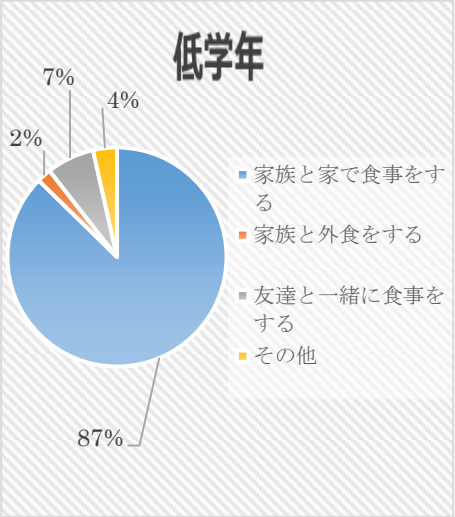


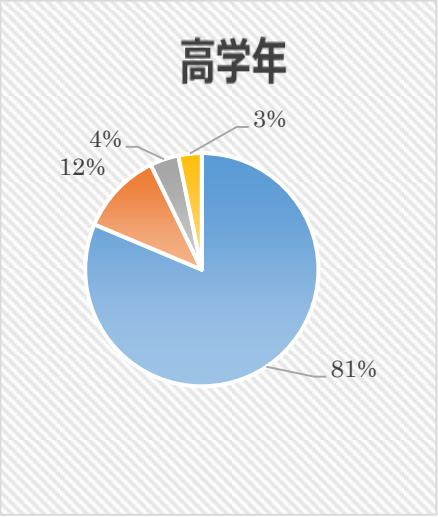




**問 13　あなたは、どこで、だれと、なにを食べるのが一番すきですか。**

１位に家族でという答えが多く見られた。子どもたちにとって親と過ごす時間が楽しい、大切だと感じている証拠ではないだろうか。

一部の回答で「家で、ひとりでカップラーメンを食べる」ことが好きな児童や「お母さんと一緒にみかんを食べる」「友達と公園でおやつを食べるのが好き」など、様々な回答が寄せられた。




## 8 アンケート結果分析のまとめ

放課後、家や学童保育で過ごす子どもが多く、外で遊んでいる子どもは少ないことがわかった。「家で食事をする際に何をしていますか」という質問に対して、「会話をしている」と回答した子どもが低学年、高学年共に全体の三割程度しかいなかった。子どもたちは親と会話をすることをとても楽しみにしていることが自由回答覧の記述からわかるので、食事の際の会話は重要であることが分かった。しかし、実際は子どもだけで食事をしているのが多く、子どもが一番大切にしているものが中々実現されていない。

集計をしていく中で子どもたちの普段の食生活、食事をする際に一番大切なことなど「みんなの食卓」という場が孤食の問題を抱えている高齢者、子どもたちの栄養管理だけでなく会話のある食事の楽しさなど毎日の生活の中に＋αの楽しみを作ってあげることが出来るのではないかと感じた。その＋αが子どもたちの「心」を育てる手助けになるのではないかと考えている。

## 9 今後の展望

短期的展望としては、みんなの食卓プロジェクトの土台作り、幅広く活動を知ってもらう。中期的展望は、家にこもりがちの高齢者の方に毎回参加してもらえる仕組みづくりの完成。そして最終的には、地域住民の多世代交流の場となり、高齢者、子どもを中心に多くの方に食の喜びを感じてもらうような「みんなの食卓」が完成し、日常的な交流の場として根付くことである。

## 10 千里ニュータウン(豊中市)と多摩ニュータウン(多摩市)の食育推進比較

本プロジェクトでは多摩市の食育現状について調べている。そこで多摩ニュータウンと千里ニュータウンの特徴が似ているので双方の食育推進計画を比較することにした。

### ・少年期

共通の内容は健康管理ができるような食事を心がけ食生活の大切さを学ぶ食習慣を身につける時である。また、それぞれ豊中市では身体や身の回りの清潔の必要性を理解し、進んで手洗いや、うがいなどを実践する姿勢を身につけることで、望ましい食生活を実現することができると記載されており、多摩市では体験活動や地域との交流を通して感謝の気持ちを育み、心を豊かにする。持続発展教育に取り組むことにより、食の視点から世界や社会、また多摩市を見つめ、持続可能なものとするためにどのように考え、行動するか学んでいくとある。

### ・青年期

ここは共通の内容であり一人暮らしを始めて生活環境が変わる人が多く、朝食の欠食などで栄養の偏りが出てしまう。食生活が乱れやすくなりがちと記載されている。

### ・壮年期

どちらも生活習慣の乱れが生じやすいため規則正しい食生活を送るよう心がけると記載されている。

### ・中年期

共通の内容は心豊かな生活を営むために地域や家族での共食の機会を増やし生活習慣病に気をつけるとあり、豊中市では食に関する知識や技術をさまざまなかたちで積極的に地域に発信し、次世代に伝えるとともに、地域活動の担い手として中心的な存在になると記載されている。

## その他の気づいた点

その他の気づいた点は３つ上げられた。１つ目は豊中市の食育推進計画ページでは年代における具体的な問題点と目標が振り分けられているため子供たちでも理解しやすいものになっている。

2 つ目は双方の食育推進計画の内容を見ると大体の内容が合致する。このことから違う地域であっても課題点はほぼ共通していることが見られる。しかし課題点が共通していても推進内容が違うこともある。例えば少年期の食生活を課題点としてあげているが豊中市では手洗いやうがいなどの身の回りの清潔を保つことが推進とされているが、多摩市では体験活動や地域と交流し、感謝の気持ちを育み、心を豊かにするとある。この 2 つ目の点においては1つ目の点であげたような問題点と目標点を振り分けている豊中市の方が市民に浸透しやすいのではないかと思う。

3 つ目は多摩市の食育推進計画は市が市民に対して支援を行うことを記載しているのに対して豊中市の食育推進計画はどちらかというと市民に対して「～をやってみよう」という目標設定をしているのが中心だと感じた。よって多摩市の食育推進計画には新たな目標点（市民に対して「～をやってみよう」など）を設定することを、豊中市には多摩市のように地域と交流するタイミングをはやくすることを食育推進計画に盛り込むことにより両者ともに更に発展した食育推進計画ができるのではないかと感じた。

## 11 まとめ

第 1 回みんなの食卓プロジェクトおにぎりの会では、高齢者と子どもが一緒になることで世代間での交流が図れた。ひじり館の課題となっていた世代間交流が食を通じて行うプロジェクトとしての新たな一歩を踏み出すことが出来た。

我々は、高齢者の抱える孤食問題の現状、子ども達の普段どのような食生活を送っているのかを児童を対象にして実施した「食のアンケート調査」を通じて把握できた。アンケート調査の結果では、子どもは豪華な食事や自分の好物を食べていることに楽しみがあると予想していたが、子ども達は家族と食卓を囲みながら食事をすることを好んでいた。また、外食をする子どもは少なく、自宅で家族と過ごすことを好む子どもが多く見受けられた。この情報を活かして第 2 回、第 3 回と継続的にみんなの食卓プロジェクトとして活動を実施していきたいと考えている。

## 参考文献

衛藤久美 武見ゆかり 中西明美 足立己幸『小学５年生の児童における家族との共食頻度及び食事中の自発的コミュニケーションと食態度、食行動、ＱＯＬとの関連』日本健康教育学会誌 2012 年

後藤紀子・矢澤九史・大澤香織 『小児・児童期おける家庭の食事環境がその後の親子関係に及ぼす影響』東海学院紀要 2009 年

田中純子 『子どもの食生活を考える一食生活と心身の健康に関する調査を通して一』情緒障害教育研究紀要 1998 年

谷野英和 植村弘 橋本加代 横溝佐衣子 福尾恵介『地域独居高齢者の食生活状況に関する調査研究』武庫川女子紀要 2007 年

外山紀子『発達としての共食 社会的な食のはじまり』新曜社 2008 年

## 引用文献

大阪府 豊中市『第 2 期食育推進計画』 概要版 2013 年
https://www.city.toyonaka.osaka.jp/joho/keikaku/houkoku/keikaku_housin/kenko/dai2kisyokuikukeikak.files/0syokuikugaiyou.pdf

3 月多摩市平成 26 年 11 月 1 日人口データ
https://www.city.tama.lg.jp/dbps_data/_material_/_files/000/000/020/686/popu2611.pdf..pdf

聖ヶ丘 - Wikipedia http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%81%96%E3%83%B6%E4%B8%98

**謝辞**

本プロジェクトにご協力いただきました、聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会総務部長様、青少年問題協議会連光寺・聖ヶ丘地区委員会会長様そして、私達のアンケート調査にご協力してくださいました多摩市の小学校校長先生、教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

# Project Seminar K.Hamada
# First-time activities

## 浜田ゼミ　初年度の取組み

コミュニティカフェ「タマラボ」を通じた諏訪名店街
での仮説検証プロジェクト

**MEMBER**

伊藤捺夢　井上こうだい

伊藤公亮　木原彩香　加藤あさの



# Out Line

## Introduction


― 浜田ゼミとは ― P.3
― 浜田ゼミのスタイル ― P.4
― 今年度の取組み概要 ― P.5


## Research


― 商店街会長へのインタビュー調査から得た知見 ― P.6
― プレイベントから得た知見― P.7
― 小括 ― P.8


## EVENT!


― イベント本番 ― P.9
― イベントを終えて ― P.10


## Outlook for next year


― 次年度に向けて ― P.11

# 浜田ゼミとは

## 多摩市

「オールドタウン」「高齢者の最先端地域」と形容されることが多い。

ワークショップ型
コミュニケーションカフェ

テーマ
「地域との共栄」
「イベント企画」
「創業支援」

✖

多摩大学プロジェクトゼミ
浜田健史ゼミナール

【浜田ゼミの指針】

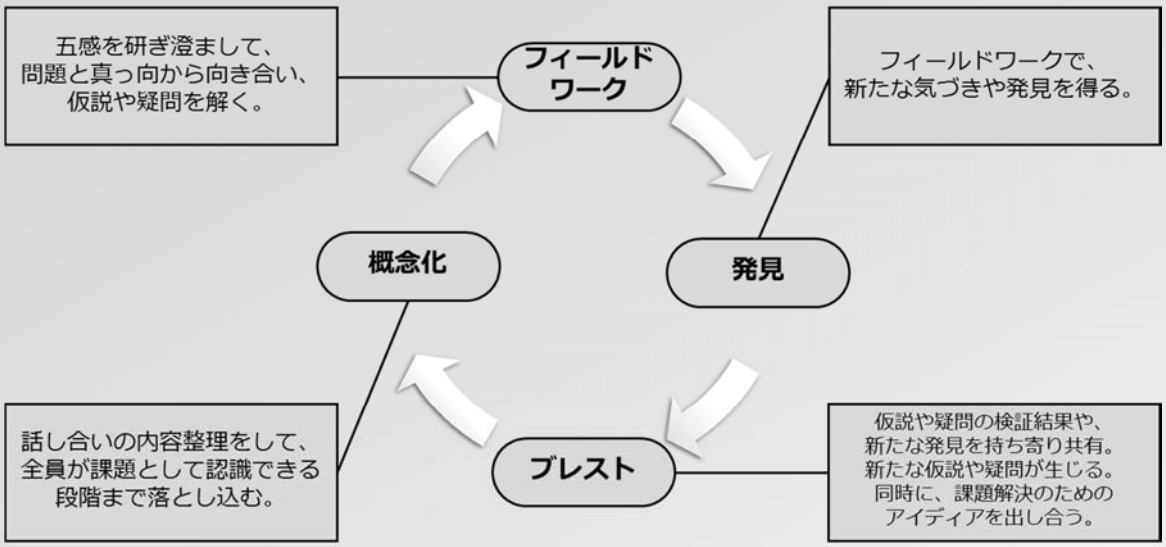
地域コミュニティと接点の多い
タマラボをゼミの活動拠点とし、
諏訪名店街をモデルケースとして、
地域コミュニティの観点から
多摩市のシティセールスを考える。

イベント等を通じて、コミュニティ(人)と向き合い、
地域学やプロジェクトマネジメントの手法について学ぶゼミナール。



# 浜田ゼミのスタイル

一人ひとりの個性や強みを尊重することで、
協調性を磨き、やる気を引き出す。




プロジェクトを遂行する過程で、知見を深めるのみならず、
「実　践　力」が身に付く。

# 今年度の取組み概要

今年度のテーマ①

## 「諏訪名店街の現状把握」

検証を行う必要がある。

諏訪名店街のイメージは、
**「利用者が少ない」**
**「活気がない」「若者は利用しない」**
といった、悲観的な意見が挙げられた。

課題1
**諏訪名店街の実情を探り、悲観的なイメージをどのように払拭していくかを検討する。**

今年度のテーマ②

## 「イベント開催による新規コミュニティ創出」

諏訪名店街では、
**「諏訪名店街サマーセール」**と呼ばれる
お祭りが、年に1度開催される。

課題2
**沢山の集客が見込めると予想される諏訪名店街サマーセールで、コミュニティ創設を目的としたイベントを開催する。**

モデルケースから、地域課題を考察。
コミュニティ増進を目的としたイベントを実施し、
シティセールスにつなげていくための切り口を見つけ出す。



# 商店街のインタビューから得た知見

## 目的

商店街会長の生の声を聞き、課題を明らかにするとともに、
コミュニティ増進に向けた施策を検討していくためのヒントを得る。

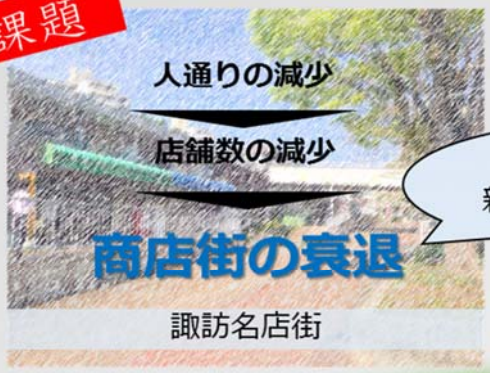
## インタビューより

顧客流動がおこった

原因

| 社会的背景 |
| --- |
| 買い物インフラの発展 |
| 各家庭の経済力↑ |

課題




知名度が低いため新規来店機会が皆無

## 商店街の内部課題

名店街**店舗間での連携**できていない。
**地域住民と繋がる場所がなかった。**

商店街間や地域住民との
連携が活性化のカギになる

# プレイベントから得た知見

## 商店街会長インタビューを終えての気づき

団地の建て替えにより、子連れ世代も多く越してきた
諏訪2丁目団地に住む主婦層を引き込むことで、商店街の活気を取り戻し、
商店街間および地域連携について考え直す機会に繋がるかもしれない。

**プレイベントを開催　～ Health Tea Time ～**

昼下がりの時間帯を商店街で優雅に楽しむ

目的①

諏訪2丁目団地に住む主婦層を商店街に、呼び込むために、商店街に対して抱く本音を聞く。

**会話に華を咲かせながら、貴重な意見をいただいた。**
意見をまとめると、
「**商店街に来る目的がない**」ということが分かった。

目的②

本イベントに向けて、提供予定のスイーツなどの評価調査を行う。

**アンケート調査を実施**
オーガニックなど、**健康志向のニーズ**が高く、
スイーツやコーヒーの味に対する感触も良かった。
**学生の手作り**である点が評価された。　etc…

ゼミ生の持つ個性・強みを発揮！



# 小括

**商店街会長へのインタビューまとめ**

近年、諏訪名店街の活気が薄れてきている。

内部課題

名店街店舗間での連携できていない。
地域住民と繋がる場所がなかった。

商店街間や地域住民との
連携が活性化のカギになる

**プレイベントまとめ**

主婦層は、商店街に来る目的がない。

本イベントに向けた評価調査の結果

スイーツやドリンクなど、健康志向のニーズが高いことが分かった。
学生の手作りである点が評価された。

来てもらうために

繋がる場所を提供　×　断続的なコミュニケーション　➡　目的づくり

商店街に来てもらう目的をつくるため、主婦層のコミュニティを
創出するための動機付けの機会となるようなイベントを開催する。

# EVENT!

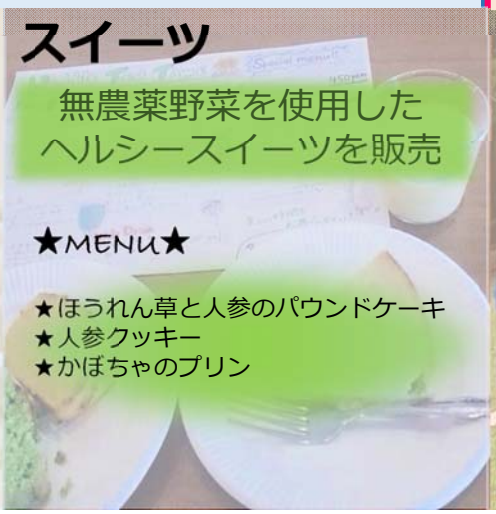
目標！～前スライドより～

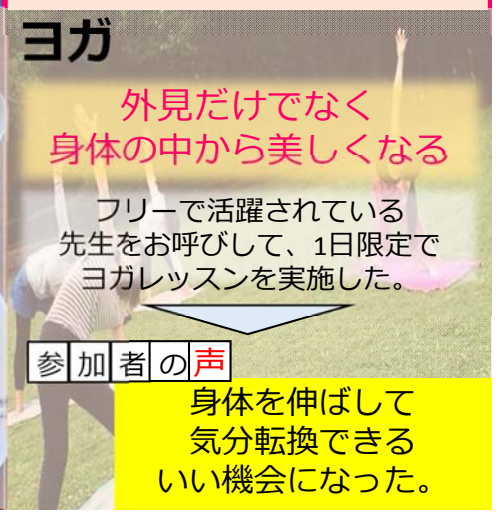
商店街に来てもらう目的をつくるため、主婦層のコミュニティを創出するための動機付けの機会となるようなイベントを開催する。

当日の内容！

断続的なコミュニケーション機会の提供に向けて。

主婦層が商店街に来る目的をつくる最初の動機付けとして。






# イベントを終えて

## 反省と課題

サマーセール終了後、出展店舗全体で反省会をおこなった。

### イベントの反省

○諏訪2丁目住宅の建て替えによって、引っ越してきた**子連れ層を、諏訪名店街に呼びこむことが出来なかった**。

○名店街に訪れる客層に偏りがあり、**僕らの想定したコンセプトとは合致しなかった。**

○サマーセールや、僕らのイベントの**広報が不十分であった。**　etc…

### 商店街の反省

○出店する店舗全体で打ち合わせがなく、**名店街と学生間の情報共有ができていなかった。**　etc…

たくさんの集客があるイベントと事前に聞いていたが、ターゲットとした客層の来場数は少なかった。イベントコンセプトにあわせた、集客のための戦略を、緻密に検討する必要があった。

# Outlook for next year - 次年度に向けて -

地域コミュニティ増進による商店街活性化をテーマに、
多摩市のシティセールスを考えていく。

## 今年度の気づき

**商店街の賑わいは少なくても、商店街をよりよくしたいという想いを強く感じた。**

**学生と地域の距離は思ったより遠く、短期間で結びつくのが難しい。**

## 次年度の課題

課題1
**商店街との連携強化！**

課題2
**情報発信の基盤づくり！**

浜田ゼミは地域と真剣に向き合い、
今後も、目標に向かって活動に励んでいきます。

ご清聴ありがとうございました

# 2014 年度　多摩大学石川晴子ゼミ
# 多摩市立諏訪小学校　放課後子ども教室「諏訪小ふれんず」
# 「英語であそぼう！」プロジェクト

参加メンバー：　石川ゼミ 2，3 年生（計 17 名）

I. 諏訪小ふれんずとは

放課後の児童の安全な居場所を提供する場として、東京都多摩市がサポートする、諏訪小学校の放課後子ども教室のことです。多摩市教育連携コーディネーターが中心となり、大学生（現在は多摩大学石川ゼミと法政大学ボランティアサークルの学生）、教員、地域住民、児童館職員が連携し、協同で運営しています。参加する大人は全員、安全管理員として市に登録します。

児童の参加は、保護者の承諾を要するため、登録制となっています。対象学年は、３～６年生で、開催日は、火曜日（自由遊びの日）、金曜日（学習の日）、土曜日（イベントの日）の週 3 日です。責任者として地域住民 2 名の参加が必要なため、日にちによっては開催できないことがあります。

開催日の候補は、月 1 回の定例会議で決まり、各団体の代表者が、参加したい日にちを申請する仕組みとなっています。連絡は、代表者はメーリングリストを通して、全体では TOWNTIP という SNS を通して行います。TOWNTIP への登録は、参加者全員必須となっています。

諏訪児童館、諏訪小 PTA、おはなしの会、おやじの会と共催で「流しそうめん＆スイカ割り」、「ハロウィンのかぼちゃランタンづくり」、「すわっこまつり」、「こどもまつり」、「どんど焼き」などのイベントも実施しています。

II. 石川ゼミ「英語であそぼう！」プロジェクトとは

上記「諏訪小ふれんず」の金曜日（学習の日）に行っている今年 4 年目となるプロジェクトです。具体的な内容は、ゲームや遊びを中心とした英語授業（フルーツバスケット、英語カルタ、神経衰弱、数字すごろく、など）で、学生が教材作成を含め準備から実施まですべて行います。

「諏訪小ふれんず」の登録児童は 50 名程度（Brillia 多摩ニュータウンの建て替えにより今後増える見込み）ですが、1 回の平均参加人数は 10～12 名程度です。英語授業のあとに遊

びの時間があり、大学生はバトミントン、フリスビー、大縄跳びなどを使って子どもたちと自由に遊びます。終了後は、地域の安全管理員と大学生で反省会をします。

今年度はゼミのプロジェクト参加メンバーを 4 グループに分け、ローテーションで実施しています。定例会や「諏訪小ふれんず」のイベントにも参加しています。

（昨年度実績 :「英語であそぼう！」12 回、流しそうめんとスイカ割りへの参加、国際コミュニケーションデーへの参加）

III. 「英語であそぼう！」プロジェクトのねらい

１．小学生に外国語を学ぶ楽しさを伝える。

２．小学生に英語の授業をすることにより、伝えたい内容をしっかり相手に伝えること、伝え方に工夫すること、相手の気持ちを読み取ること、いろいろな出来事に適切に対処することを学び、自らの成長につなげる。

３．仲間と協力してプロジェクトに取り組むことで、よい人間関係を築く方法を学ぶ。また、グループワークのやり方について体験的に学ぶ。

４．地域・社会の中の自分の位置と役割、社会貢献について、理解と考えを深める。

2014 年度多摩大学経営情報学部地域プロジェクト発表祭配布資料　　2014/12/13

# 諏訪小学校と地域の連携づくり

多摩大学経営情報学部梅澤ゼミナール
◎若林拓実　石井湧大（３年）
斎藤宣明　西山光希　後藤勇紀（２年）

## １．プロジェクトの目的と経緯

多摩市は学校・保護者・地域のそれぞれの強化を図り、三者連携をすることによって子どもたちの育成を目指し取り組みを行っている。2011 年度、私たちは三者連携の発展を促進し学校と近隣地域の交流を目指すこと、地域と児童や保護者が世代間交流するためにはどのような仕組みが望ましいのかを考えた。多摩市内の小学校は、他市では考えられない広々とした敷地を持ち、学内に農園や学校林（豊ヶ丘小）を持っている。このような豊かな環境を活かし、地域と学校の連携を深めることができないかと考えたのである。しかし、児童の教育活動の場を地域に開放することは軽率にはできない。慎重な取り組みが必要であることがわかった。

2011 年、我々は先ず、小学校の農園活動等を手伝いながら学び、今後の方向性を模索していくことにし、「特色のある教育活動」として農業活動が盛んであり、文科省が推進する小学校長期自然体験活動の開発事業「多摩の自然学校」を行っている多摩市立諏訪小学校に企画書を持参して連携のお願いにあがり、活動がスタートした。本プロジェクトは今年度が 3 年目になる。

豊かな自然環境にある多摩市内小学校の環境学習を地域に繋げたい、児童が地域と交流する機会を増やしたいという思いで取り組んでいる。

## ２．諏訪地区の特色

諏訪小学校の立地する諏訪地区は、1971 年、「諏訪・永山地区」として多摩ニュータウンで最も早く第一次入居が開始した。第 5 住区及び多摩土地区画整理事業区域である。開発から 40 年以上が経過し、現在は建物の老朽化が課題となっている。マンモス団地が立ち並び、古い都営団地も多い。

その一方、昨年度、再開発「Brillia 多摩ニュータウン」が完成し、入居が始まった。高齢化、少子化が進む中で、今年度、諏訪小学校の児童数は微増している。

諏訪小学校周辺の地図

３．諏訪小学校の特色

諏訪小学校正門

以前の野菜バザー開催場所

諏訪小学校は、かつては多くの児童が通っていたが、地域住民の高齢化や少子化により、現在の児童数は通常学級は 133 名、特別支援学級は 54 名の計 187 名となっている。

1年生を除く通常学級は1クラスで15名前後である。

諏訪小学校の特色として、第一に、ブラスバンドの活動を通して、豊かな情操、望ましい人間関係を築くこと、第二に、通常学級と特別支援学級との交流活動、共同学習を、更に充実、推進。第三に、農園、花壇などでの栽培活動を計画的に行い、自然とのかかわり、調理、農作物の販売等、キャリア教育につながる指導を重視した教育活動を推進している。我々の活動は、第三の特色ある教育活動に関わるものである。

４．プロジェクト活動の経過

〔2012 年〕

第１回野菜バザー(諏訪名店街)

2012 年度は、農はじめのお手伝いや夏休みのラジオ体操への参加、地域清掃を行いながら、諏訪小学校の農園活動を学ばせていただいた。その中で、我々は、キャリア教育の一環とした 6 年生の野菜バザーが諏訪小正門で実施されていること、しかし、町外れという場所柄、主に保護者が購買者であるということを知り、野菜バザーを学外で開催することを諏訪小学校の農園担当の先生に企画提案した。その後、小学校側のご了承を得て、冬の野菜バザーを諏訪名店街で実施した。

〔2013 年〕

第２回野菜バザー

(諏訪名店街サマーセール)

2013 年度は、年度はじめに 6 年生担任の先生より「永山駅周辺で野菜バザーを実施したい。」という希望をいただいた。これこそ我々PJ 活動であると思い企画書を作成し、小田急電鉄（株)、京王電鉄（株)、多摩中央警察、新都市センター開発（株)、多摩市立永山公民　、諏訪名店街等交渉に歩いた。しかしながら、金銭の受け渡しがあることから、諏訪名店街、永山公民館以外は協力をえることはできなかった。そこで前回同様、諏訪名店街で実施することとしたが、少しで

も良いものにしたい思い、諏訪名店街サマーセールで一般の事業者がマーケットを出店するなかでの実施を提案し６年生と行った。しかし、駅前での野菜バザーを諦め切れず、その後も交渉を続け、冬は、多摩信用金庫多摩センター支店に相談にあがりご協力いただけることになったが小学生にとって遠いということで諦めた。

野菜バザーの準備：学生は黒子

その内に、色々な所から新都市センター開発(株)に我々の活動が伝わり、永山公民館のご協力により遂にグリナード永山広場での野菜バザーを実現した。

〔2014 年〕

本年度は昨年の野菜バザー担当の６年生の先生が代わり、例年通り開催できるか懸念されていたが、私達の活動が評価され無事開催することができた。「夏の野菜バザー」もグリナード広場で実施し、学校側の希望があれば「外部での野菜バザーの開催」を実施することができる仕組みづくりを完成させた。

第３回野菜バザー(グリナード永山広場)

また、その他、小学校の体育の授業での体力テストの補佐、運動会の準備・当日の手伝いや、プール清掃、夏休みの国語算数教室など幅広く参加をしている。運動会では地域、保護者、児童、来賓の方に本プロジェクト活動をＰＲする機会を与えていただき、諏訪小学校おやじの会の皆様との連携や、青少年問題協議会諏訪地区委員会の月１度行われる会議に参加し、活動の幅を広げている。

その結果 11 月 23 日に青少年問題協議会諏訪地区委員会主催の地域清掃と 11 月 29 日に「すわっこまつり」に参加させていただいた。自ら地域に出て、地域が小学校や中学校の PTA とどのように連携を行っているのか理解することができた。

５．小学校側からいただいた活動成果

・農園の規模が拡大され、今まで農園を使っていなかった先生方も教育活動に農園を使うようになった。収穫量が増え、地域で野菜を売ることで児童に自分たちで作ったものを売るという経験ができた。

・以前までは１年に１度だった野菜バザーを夏・冬２回行うことで子供たちは１回目で雰囲気をつかみ、２回目で計画を立て、商売としての観点を持たせることができている。

６．新都市センター開発株式会社からのアドバイス

野菜バザー開催へ良い返事ができなかった原因が企画書にあり、読んだ瞬間にどのよう

な内容か理解できる企画書作ることが大切。なぜなら、企画書は、一人歩きする物なので誰もが説明なしに理解できる企画書を作らなければならない。

７．活動成果

・野菜バザーを通して地域と小学校がお互いを知るきっかけを作ることが出来た。

・野菜バザーの活動が「多摩市公民館通信」や多摩市農産物応援サイト「アグリアグリ」に児童の野菜バザーに関する記事を掲載していただき、広く情報が発信された。

・野菜を買っていただいたお客様から激励の絵手紙いただいた。

・児童の職業教育・キャリア教育「野菜バザー」の仕組みを完成させた。

・諏訪小学校との「つながり」により、多摩大学地域プロジェクト発表祭で諏訪小学校６年生が「野菜バザー」の発表を行った。さらに、諏訪小学校の要請により、大学内でキャリア教育の講義を実施した。

・新都市センター開発株式会社より、「野菜バザー」がこれからの「住民共生事業」の参考になる活動であった。これからも協力していきたいと言っていただいた。

・多摩市教育委員会作成「ESD　Tama Consortium」でゼミ活動を紹介していただいた。

地域の方からの激励の絵手紙

大学内で講義を受ける

諏訪小の児童たち（キャリア教育）

「ESD Tama Consortium」

８．　小学校との連携にみえた課題

活動を通じて、先生方が多忙であることがわかった。それでも我々の活動に協力してくれ、打ち合わせに多くの時間を割いて下さった。本プロジェクトは、農園担当教員や学校長、副校長先生等との出会いによるものである。担当する先生の目指す教育内容が異なれば、学生との連携を望まなければ活動することはできない。

また、小学校と連携は、地域連携以上に真剣に取り組まなければ小学校側の教育活動に支障をきたしてしまう。報告、連絡、相談を迅速に行わなければならない。当事者意識を持つということを後輩たちに引き継いでいきたい。

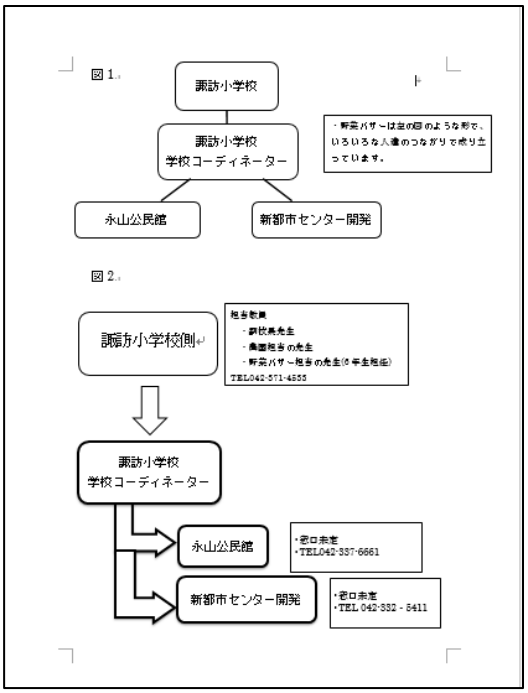
９．今後の活動

2014 年度の今後の活動と今年度のまとめは、以下の 3 点である。

(1)毎年行っている春の農はじめの雑草抜きを PTA の中にあるお父さんたちで組織された「おやじの会」の方々と行うことができないか企画提案中である。お父さんたちが綺麗にした農園で子供たちが野菜を作り、その野菜が野菜バザーなどで地域に出ることでさらに三者連携を深めることができるのではないかと考えている。

(2)「野菜バザー」の仕組みを完成させる。

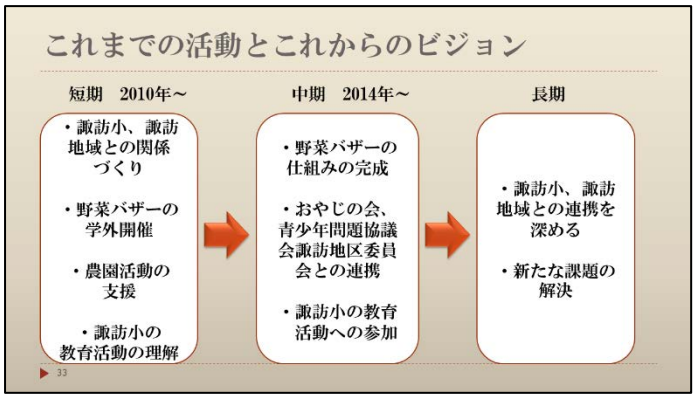
(3)1 月 24 日諏訪小学校行事「こどもまつり」でのイベント主催。3 種のエスニックスポーツを紹介、体験することでそれぞれの文化に根差したスポーツがあることに興味と関心を持ってもらう取り組みを準備中である。




「野菜バザー」仕組み図

謝辞

本プロジェクトは、多摩市立諏訪小学校農園等環境担当先生、教職員の皆様、諏訪小学校教育連携コーディネーター様にご指導ご協力をいただいています。また、野菜バザーの開催にご協力を頂き、開催場所を提供していただいた諏訪名店街会長や名店街の皆様、新都市センター開発株式会社様、永山公民館職員の皆様等、諏訪小学校おやじの会の皆様、青少年問題協議会諏訪地区委員会の皆様、本プロジェクトにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



# メディアを創る「メディア実践論」2014

## めざすもの

ICTのめざましい進化⇒誰もが情報の発信者になれる時代：しっかりしたメディアリテラシー必要
⇒企画の発想、取材から構成、編集、表現まで一連の制作活動を体験し、実践的に学ぶ。
・大学発の情報発信、メディアの創造。
・世界と地域、人間を見つめ、ものの見方、考え方を鍛える ⇒ 時代への問題意識を深める。
・問題発見・解決能力、社会で通用する実務的能力、時代を生きる「人間力」の育成、練磨。

## 何と、どう取り組む

4つのプロジェクト
Ⅰ 映像番組の企画・制作
Ⅱ 音声番組の企画・制作
Ⅲ 多摩地域のコミュニティメディアの調査、研究とプランニング（FM多摩復活プロジェクト構想へ）
Ⅳ 「学生ジャーナル」の取材、編集
「ハイブリッド報道（複合メディア）」という時代
コロンビア大学ジャーナリストスクール、シグ・ギスラー教授の問題提起：NYT「Snow Fall」の衝撃、大治朋子記者（毎日新聞エルサレム支局長）のチャレンジなど

## 2014年のコンセプト

### 発見！“多摩”・・・

私たちが学ぶ多摩地域に目を向けて、地域の魅力や課題を発見し、番組（作品）化する。
⇒ 地域の記録者、情報発信者をめざす。

### 「大学」を記録する

勉学や学内行事など、身近な大学生活を見つめ、記録し、伝えることを通じて、いま大学で学ぶ意味や課題について考える。

**Something New!**
誰も見たことがないものから、誰もが見ているのに見えていなかったものの発見へ。
**Investigative Reporting**
事実をもとに見えていなかったものを掘り起こして伝える。

**感じる心、見る力、考える脳力 想像力そして創造力へ！！**

**ドキュメンタリーは時代を映す鏡**

**メディアを創る「伝え人」へ**

# 「メディア実践論 2.0」への飛翔を！

## 3つの強化

1. 動く！現場に立って考える、フットワークの強化。
2. 時代の記録者として、企画力、制作力の強化。
3. 他のゼミやメディアにかかわる諸活動との連携の強化。

# 「メディア実践論」2014
## メディア実践論「11人衆」の企画＆プロジェクト

### 1. 発見！多摩　企画

1.「多摩織、美と伝統の世界へ～美しいものを紡ぐ人々を訪ねて～　」　2年　井上路華
2.「白石一偉が行く！多摩、自然探訪～紅葉の多摩、感動の秋を歩く」　2年　白石一偉
3.「発見！多摩の山には“橋”がある～人と暮らしを繋ぐ“橋物語”～」　3年　鈴木　舜
4.「アポロ広場再生その後～百草団地、子ども広場の夢と現在～」　4年　江間宏路
5.「多摩・出会い、ふれあい各駅停車～小さな乗換駅にふれあいを求めて～」　4年 古西政樹
6.「着ぐるみにかける夢人生～元祖、着ぐるみ学校は多摩にあり～」　4年　渡辺　光

### 2. 大学を記録する

1.「絶景！紅葉に染まる高尾山へ～English Expression登山で見た山の秋」　1年　杉浦那由他
2.「福岡へ、働くカタチを探しに～安藤冬美ゼミ2014年秋の記録から～」　2年　私市洋人
3.「僕らの目線～多摩大・大学生活探訪記～」　4年　大串定之

### 3. 継続テーマ

.「再訪、ふるさと大曲の大花火～88回続く花火に息づく地域のこころ～」　3年　佐々木晨

### 4. 多摩・コミュニティメディアの調査研究

①ホームゼミの活動、FM西東京での放送体験の際、関係者からコミュニティFMについてヒアリング。
②多摩で地域活動に取り組む人々、女川災害FMやFM稲城の関係者らからコミュニティFM立ち上げの苦労などについて話を聞く。地域へのよほどの愛着がなければ人を動かせない、現時点では、実現への道は険しいのではとのアドバイスを受ける。
③段階的アプローチとして、プロジェクトゼミスタートの原点に立ち戻って、大学発Webラジオの構築から始めることも検討。
④映像番組とともに音声番組の企画・制作にも積極的に取り組み、企画から放送までの制作力、放送スキル（アナウンスメント）のレベルアップもめざしていく。　3年　吉野　翔

**ハイブリッド（複合）メディアへ**

### 5.「学生ジャーナル」取材・執筆

No.4（2014.3.30発行）
・プロジェクトゼミ「メディア実践論」で得たこと　4年　下村耕介
・“伝える”にトコトン向き合った～地域プロジェクト発表祭～　3年　渡辺　光
No.5（2014.6.30発行）
・企画、企画、企画、ああ企画、それが問題だ！　2年　私市洋人
・「撮りたいものを撮る」とは～信頼という熱い壁に立ち向かう～　3年　吉野翔
No.6（2014.9.30発行）
・多摩織、美と伝統の世界へ！～ゼミの“熱き魂”を胸に、美しいものを探しに～　2年　井上路華
・発見！多摩の山には“橋”がある～人と暮らしを繋ぐ「橋」を訪ねて～　3年鈴木　舜
No.7（2014.12.30発行・予定）
2年　白石一偉　、4年　古西正樹

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

# メディア実践論の制作現場から

## プロジェクトゼミ「メディア実践論」で得たこと

経営情報学部４年　下村 耕介

大学４年の秋学期、私は初めてこの授業を履修した。後期からこのゼミを履修しようとしたきっかけは、メディアの制作現場に興味を持ったからだ。

初めてプロジェクトゼミ「メディアを創る－メディア実践論」という授業に加わり私が感じたことは、メディアの制作とは小さな作業の積み重ねであるということだ。たった数分、数秒の情報発信の裏側、制作現場は非常に泥臭い。

まず、編集にたどり着くまでが大変だ。やらなければならない地味な作業がとても多く、計画を立ててもスムーズに行くことは滅多にない。小さな作業を積み重ねていく根気がなければメディアは制作できないと言うことがこの授業でよくわかった。

授業で実際制作の現場、制作の手法を学び私が得たものは二つある。

一つ目は、情報収集するクセだ。「メディア実践論」では下調べの大切さを思い知った。思いつきではメディア制作はできないからだ。前に述べた通り、メディア制作は小さな作業の積み重ねで出来ている。各段階を一つ一つ踏まなければメディア制作は成り立たない。その初めの一歩が情報を事前に下調べをすることである。下調べ（リサーチ）のやり方、方法を学んだ結果、どんなことにでも万全の準備をして物事に取り組めるようになった。準備不足で失敗したり、恥をかいたりすることが少なくなった。

二つ目は、どんどん自分から率先して物事に取り組む「挑戦していく意識」が高くなったことだ。この「メディア実践論」はメディア制作の手法を学び、実際に成果物をつくり上げて評価されるまでが授業である。授業は一週間に一度しかないため、90 分ではゼミ生の活動の進捗の報告と確認をする程度しかできない。だから、自ら率先して活動していかなければそこから前には進まないし、アドバイスも指導も受けられない。大げさだが、自ら動かなければ何も変わらないのだ。そして行動すれば何かが必ず変わるということを知る良い機会になった。

私は４年生で３月には多摩大学を卒業することになる。４年の秋から履修した「メディア実践論」で過ごした時間はあっという間に過ぎてしまったが、とてもかけがえのないものだった。なぜなら、このゼミを履修したことによって、改めて気づかされることがたくさんあったからだ。今までの学生は事前の準備不足でよく失敗していたが下調べ、事前準備の大切さを、授業を通して実感し間違いが減ってきた。そして、自ら率先して行動することの大切さを再認識できたことだ。主体性を持つということがどういうことなのか、卒業する前に最終確認できて良かった。

プロジェクトゼミ「メディア実践論」が“メディアを創る”ということを掲げている意味がよくわかった。また、それが同時に、ゼミの活動を通して私自身を拓き、創っていくことに通じることも学んだ。私が獲得したことは新社会人としてあらたなフィールドで活躍していくための土台となっていくだろうと信じている。

プロジェクトゼミ「メディア実践論」の教室から

## “伝える”にトコトン向きあった地域プロジェクト発表祭

経営情報学部３年　渡辺　光

「ボクの名前、翔のように、メディア実践論は来年さらに翔びます！」

昨年末開催された「地域プロジェクト発表祭」で、我がプロジェクトゼミ「メディア実践論」のプレゼンターをつとめた吉野翔君は力強くこう締めくくった。現在のゼミメンバーだけでなく以前在籍して映像制作に取り組んだ学生たちも会場に駆けつけ、熱い視線を注いだ。これまで制作した映像作品を活用したプレゼンテーションは、嬉しいことに学内外の参加者の好評を得ることができた。プレゼンテーションの構成、制作を担当した私としてはホッと胸をなでおろした瞬間だった。

「地域プロジェクト発表祭」にむけての準備を教室で言われた時、どういう切り口で発表すればいいのか思い悩んだ。しかし「大学発、情報発信への挑戦」を掲げて音声・映像作品の企画、制作と取り組む「メディア実践論」の活動を、ここでせき止めてみることは、ビデオジャーナリズムのアクティビストに関心を持って参加することになった自分自身の歩みと問題意識を見つめ直すことにほかならないと思って取り組むことにした。

まず考えたのは、６年間にわたるプロジェクトゼミの活動を、それは木村先生に言わせると試行錯誤と悪戦苦闘の連続ということになるのだがどう見せるかということだった。また昨年からは「多摩大学学生ジャーナル」の取材・寄稿という“活字メディア”への参画や、多摩地域の“コミュニティメディア”の調査・研究など、活動のフィールドを広げるチャレンジも重ねてきている。全てを平板に並べただけでは視点が定まらず、何を伝えたかったのかがぼやけてしまう。結局、それぞれが今までに制作した映像のダイジェストをベースに、コミュニティメディアの調査・研究の取り組みを新たに盛り込むことにした。素材が揃って、あとはつくり上げるだけというところにたどりついた。しかし、「過去の活動をつなぐだけでいいの？」と先生から厳しいダメ出し。どうすればいいのか頭を抱えた。その時、毎度々々、教室で言われてきた先生のことばがよみがえった。

「キミのメッセージは何だ？！」

そうだ、参加者は「思い出話」を聴きに来ているわけではないのだ。これまでの活動の意義を明確にし、何を学び、次に何をめざすのか、ここが重要なのだ！ふたたび構成の練り直しへ。映像の要素を再検討し、構成も組み替え、今後の展望を盛り込み、コンセプトをくっきりさせた内容となった。

発表当日、プレゼンターの吉野君と直前までコメント合わせと手直しを行っていたため、一時はどうなることかとヒヤヒヤしたが、先生は横で「サァー出来上がるでしょうか？間に合わなかったら画面が白味でザァーだネ」などと、まるでテレビの制作現場にいるかのように涼しい顔。編集の細部を整えて、すべてが上がったのは発表 15 分前だった。発表後の質疑応答でもう一歩踏み込めればというところもあったが、学部長の講評でも取り上げていただき、発表は大成功となった。

外部の目を意識しての構成はとても大変だったが、「見る側・聴く側」からの視点を常に意識しての制作はとても貴重な経験だった。なるほど番組制作とはこういうことなのかと、「メディア実践論」の真髄というか、作品をつくり上げる難しさと充実感についてかみしめる機会となった。

来年度は私にとって最後の１年となる。私自身どこまで飛躍できるかチャレンジの１年だ。

発表のクライマックス「夢にむけて翔ぶ」

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

# メディア実践論の制作現場から

## 企画、企画、企画、ああ企画、それが問題だ！

経営情報学部２年　私市 洋人

「企画なき者は去れ！」と教室のスライドに映し出されている。「と言っても本当に去ってはダメ。あきらめて逃げてはいけない・・・」と笑いながら話す木村先生。今年度は、大学がある多摩地域に根差した企画を掘り起こすという設定だ。

「メディア実践論」は、映像制作をはじめとするメディア表現を、それに関する知識を学びながら、学生自らの手で実践して形にすることが目標だ。下調べ、企画立案、企画書作成、取材、これら全てを学生自らの手で行い一つの作品を完成させなければならない。資料を調べインターネットで情報を集めたり、カメラを持って取材に行ったりすることも大変だが、「企画立案」は最も骨が折れる作業だ。

私が取り組んでいる「ドキュメンタリー」という手法を用いたメディア表現は、いまそこにある「事実」をカメラに収め、編集して、公に発信するものだ。映像によって、制作者が切実に世間に訴えたい「真実」を描く営みだ。だから企画が「命」だ。

私は一年生の秋学期からこのゼミを履修した。右も左も分からないまま「まず、何か一つ、企画を考えてみなさい」という先生の指示で、苦し紛れに出したのが「昨今の若者と車」という企画だった。若者の車離れが言われるが、それでも一部には車を趣味としている若者もいる。そうした若者を通して「現代の若者と車の付き合い方は、昔と比べてどう変化しているのかを見る」というものだった。しかしこの企画は取材に入る前に頓挫した。原因は「自分が何を伝えたいのか」をはっきりさせないまま動きはじめたことにあった。ドキュメンタリーは「疑問に始まり、信念に終わる」と言われるが、今になって思えば、自分には「なぜ」という問題意識が明確ではなかった。

「発想は分かるが、結局君は何を伝えたいの？」という指摘を先生から受けた。私はその指摘について考えるよりも先に「まずは取材をしよう！」と意気込んでいた。しかし、取材相手に想定していた車好きの先輩と話し合った際、要領を得ない質問ばかりをして、結局企画のコンセプトも伝えらず、制作を進める手掛かりを見失ってしまった。その時は、若者の車離れが自動車産業や社会に与える影響という問題意識や、では若者は今後どのような車を求めていくのかというマーケティングの分野の意識もあまりなかったように思う。

こうした失敗を経験して、私は企画の難しさを学んだ。

「自分が何を伝えたいのか」「何をしたいのか」。これらを疎かにしたまま進むと、後々とんでもないしっぺ返しを受けることになるという、貴重な教訓となった。これは映像制作の現場だけではなく、すべてに当てはまることではないだろうか。

私は、これからも、様々な企画を提出するだろう。そしてその度に「それで、君は何が伝えたいの？」と問われるのだと思う。その時に胸を張って語ることのできる「答え」を持って制作に挑んでいきたい。

企画、企画、企画・・・。いま懸命に企画を考える毎日だ。

企画を練る！ここがスタート

今年度の「メディア実践論」十人衆

## 「撮りたいものを撮る」とは
### ～信頼という厚い壁に立ち向かう～

経営情報学部３年　吉野　翔

「撮りたいものを撮れ」と言われたら、あなたなら何を撮るだろうか。

私が選んだのは「特別支援学級」だ。

特別支援学級とは、学校生活を送る中で「特別な支援」が必要な子供が通う学級である。一般的には「障がい」がある児童、生徒が集まっていると思われているが、実際には様々な子供がいる。繊細で人見知りが激しい子や学校の勉強に興味を持てなくなった子、なにかしらの理由で不登校になった児童、生徒もいる。これらの子どもたちは通常の学級で学んでいても不思議ではないのだ。

私が通っていた多摩中学校にも特別支援学級がある。私自身も特別支援学級の卒業生だ。何事もなく生活していれば目にすることのない、学校教育の中で「見えないもの」とされてきた世界を見てきた。いまも友人との会話で、その事実を話すことは少なく、できることなら話さないですむようにもしている。特別支援学級という過去で受け入れてもらえないかもしれないという恐怖心からの行動だろうと思う。

私は多摩中学校で特別支援学級をテーマに映像を撮りたいと考えた。

これを「撮りたい」というのは、安直に教育や社会を批判しようというのではない。ただ、通っている子供たちが今後の人生で負目を感じることを少なくできるのではないか、少しでも「特別」を特別でなくすることができればと思うのだ。

だが、その過程で大きな壁に突き当たった。それは「信頼関係」だ。

特別支援学級の児童、生徒の親に撮らせてほしいと頼み、すぐに良い返事をもらうことは、まずないだろう。映像を撮られること、それは大きなリスクを負うことになる。その映像によって自分の子供が偏見の対象になるかもしれない。子供が特別支援学級に通っていることで、私たちには想像できない苦しみを親たちは味わっていることもある。どんなに私が撮りたいと思っても、撮る対象が「No」といえば取材できない。

ここであきらめるという選択もある。しかし、反対に、「信頼関係」を築くことも選択肢の一つだ。ひたすら学校に通って顔と名前を覚えてもらうこともできる。自分の過去の体験、現在の状況を話すこともできる。私の選択で制作を続行するかが決まる。私が行動できるかできないかで未来が変わる。だからこそ、映像制作は面白い。だからこそ、映像制作は難しい。

「撮りたいものを撮れ」というひと言。簡単そうで一番難しい。「撮りたいもの」から、その人の生き方が見えてくる。

現在、「メディア実践論」では、多摩をキーワードに、「撮りたいもの」は何かを懸命に考えている。自分の人生や社会と向き合い、そこにある問題や課題、魅力を伝えるために映像作品を創ることと取り組んでいる。

長い時間がかかるかもしれないが、私は、これからも「特別支援学級」を追い続けていく。私の、この選択が、支援学級で学ぶ生徒たちのため、親のため、社会のために少しでも役立つことを、そして、私自身にとっても意味のあるものになることを信じて、私の葛藤と格闘が続く。

撮影プラン、構成を練る

多摩中学校特別支援学級にて

101-34

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

# メディア実践論の制作現場から

## 多摩織、美と伝統の世界へ！
### ～ゼミの“熱き魂”を胸に、美しいものを探しに～

経営情報学部２年　井上 路華

「このプロジェクトゼミは何をするんだろう・・・」

これは科目一覧を目にした時、私がまず抱いた思いだった。事情があって２回目までは授業に出られず、Webの画面上で履修を決めたのだった。他の先生にも勧められ、いってみれば興味本位で受けてみようかと思っただけで、授業内容もシラバスを一瞥しただけ。「番組制作をするらしい?」という友達からの情報だけで決めた。知った顔の人もいるし、まあなんとかなるだろうと、正直軽い気持ちで教室に行ってみたのだった。

しかし、先生が熱い！

この印象は凄まじかった。最初は様子をうかがうように授業に参加していたが、そこで渡された資料、なんとも分厚い。なんだこれは…と本当に戸惑ったことを覚えている。木村先生の授業への力の入れ方が半端じゃないことが分かった。また先生は授業 90 分間ほとんどの時間、学生に何かを話される。取っ掛かりは学生それぞれの取り組みや作業の進捗報告なのだが、先生はどんな小さな話も拾っていくといった感じだ。「何もしていないです」じゃ済まされないような勢いにつられ、ちょっとしたことでも話すようになっていった。毎回この調子なので、先生に応えなくては！と意識が変わるのは、もはや自然なことだった気がする。この流れに乗れないのなら、このゼミでやっていくことはできないだろうと思った。

そんな覚悟を胸に今、私が取り組んでいるテーマは「多摩織」だ。

大好きな「ものづくり」の世界で、多摩に根差すものを探したいと思い立った。何か面白いネタはないだろうかと探すこと数週間。この間、いくつか良さそうなものが見つかったが、これだ！とツボに入るものは最後の最後にやってきた。リサーチに苦労してこそ企画への道はひらけるという、まさにこのゼミのセオリーその一だ。

多摩織とは、その名の通り多摩でつくられている織物である。この地の伝統工芸品として、蚕によって生み出される絹の糸を宝石のように大事にして、ひとつひとつ丁寧に織られてきた。絹独特の光沢を出す「練り」（精錬）といわれる工程や染色、織の技法などの違いで５種の織物が登録されている。また、意匠紋紙、糸染め、糊付、整経、絣、捺染、撚糸、機拵、整理加工など細かい工程に分かれていて、それぞれに職人の技が重ねられ一枚の多摩織ができ上がっていく。まさに伝統の手仕事の世界なのだ。こうした美しいものを生み出す技を極めた人たちがいることも私が多摩織に魅かれた大きな理由だった。

遡れば、多摩織は、多摩という地名が生まれるよりずっと前からこの地域にあった伝統の織りだという。その歴史だけで一本の番組を組めそうなのだが、今私が着目しているのは、なぜ多摩の地でこの織りが連綿と続いてきたのかということだ。生糸で知られる八王子など、昔は糸からこの地でつくっていたそうだが、最近では安い輸入糸を使うことがほとんどになったという。現在ではマルベリーシティーというブランドも生まれ、ネクタイやストールなども造られている。このような時代の変化の中で、多摩織を守るとはどういうことなのか、伝統の技を守る人たちは何を見つめ、どんなことを考えているのか。私はそれを知りたい！そしてそれを作品化して多摩に住む人々に伝えたい。

「こんな美しいものを生み出す歴史と風土が、そして人びとが多摩には息づいているのだ」と。

さらに、この企画は、多摩で学ぶ私が、多摩という地にどんな思いを抱いて生きているのか、多摩という土地へのこだわりはどんなものなのかを、あらためて問いかけてくるものとなっている。

これから秋に向けて、いよいよロケ本番を迎えることになる。

経糸と緯糸が美を紡ぐ

多様な魅力を見せる多摩織

## 発見！多摩の山には“橋”がある
### ～人と暮しを繋ぐ「橋」を訪ねて～

経営情報学部３年　鈴木　舜

多摩市には数多くの“橋”がある。

“橋”というと、川をイメージするかもしれないが、ここでいう“橋”は川に架かる橋ではない。山に架かる橋である。

今年の「メディア実践論」では、多摩をテーマとした企画を立てることになった。そこで、私は以前から興味を持っていた多摩市の不思議な「風景」を企画として取り上げることにした。私は趣味で幾つかの多摩市の公園を散歩したことがあったが、その時によく見掛けるのが“橋”である。ただし、これは私の歩いた公園が川に面していたということではない。つまり、この“橋”は川に架かっているのではないのだ。この“橋”は公園や団地の敷地を相互に繋いでいる。これが山に架かる橋である。

この“橋”が実に面白い。公園を散歩しているうちに“橋”に出会い、そこを渡り次の場所をしばらく歩くとまた新たな“橋”に出会う。これを繰り返してどこまでも歩いていけるのではないかと思えてくる。まるでまだ見たことのない「謎の世界」に繋がる“橋”のようでもある。しかし、車に遮られることなくまるで探検気分で、気持ちよく公園を散歩しながら私は疑問に思った。

なぜ多摩にはこんなにも“橋”が多いのか、と。

この“橋”の建設は多摩ニュータウン開発の一環である。多摩丘陵の高低差を活用して“橋”と車道を立体交差させることで、歩行者が車道の上に架かる橋を利用して安全かつ自由な移動を実現することが“橋”の目的だったのだろう。私は、特に、自由に移動できるというところにこの“橋”の魅力を感じる。歩いている際に車が来ないことが保障されることで、その場所において歩行者の自由度が大きく広がる。また、見方によっては“橋”で繋がり自由に移動できるのであれば、その“橋”の両側には境界が無いとも言え、橋で繋がった場所は一つの土地と見なすこともできる。これは、大きな「価値」に繋がる可能性を秘めているのではないかと思う。

ここで、この“橋”の意義について考えてみる。すでに述べたように、この“橋”は安全かつ自由な移動を実現しており、利便性が高い。しかし、“橋”は人に使われることにこそ最も意義がある。現在、多摩ニュータウンでは団地など建造物の老朽化、住人の高齢化、空き店舗の増加といったいくつもの問題を抱えている。このままでは活気が衰え“橋”の利用が減る。つまり、“橋”の価値が下がってしまうということである。これはこの“橋”に魅力を感じる私にとって見過ごせることではない。そのため、“橋”の魅力を主張するために、“橋”の価値を高める有効な利用方法を模索してみたいと思うようになった。

多摩市と“橋”がテーマである私の企画は、まだ私のイメージのなかにある“橋”の魅力にとどまっているというべきだろう。先生からは「鈴木君は詩人だね、この感性は面白いよ」といわれることもある。しかし、これではまだ人に何かのメッセージを伝えるには不十分かもしれない。ゆえに、今後は、自分の感じる“橋”の魅力についてもっともっと考え、人と暮しにとって“橋”とは一体どんな意味を持っているのかを掘り下げてみなければと思う。そして、多摩の、山に架かる“橋”についての考察をさらに深め、多摩市における“橋”の存在価値やその可能性を発掘していきたいと考えている。

う～ん、「詩人・鈴木」の想像力と創造性が試される秋だ・・・。

山に架かる不思議な橋

土地と暮しを繋ぐ橋

101-35

3つの強化！

# メディア実践論 2.0へ

発見！多摩を深める

大学の記録者として

多摩へ！
地域に目を向け
地域に根ざす
問題意識

さらに、深化と進化をめざす！

日常化
大学内の記録者
としての自覚
臨機応変に機能

## 地域に軸足、目は世界へ

動く！現場に立つ!

取材力のレベルアップ
発想力、企画力の練磨

メディアにかかわる他の
ゼミや自主的な活動との
コラボレーションを可能
にする力を育て、鍛える

伝える意志
＋
心に響く表現力

制作スキルの向上

大学発・情報発信
プラットフォーム
（放送局）構築へ！

# 地域密着型店舗のラジオCM作成と関連プロモーション

中村その子ゼミ【森、山口、吉野、米倉】

## クライアント

【たまうどん　ぽんぽこ】

〇社会福祉法人「時の会」

→2010年春に開業

〇高齢者の多い聖ケ丘商店街

→飲食店がなかった

〇多摩伝統の味を伝える

→地産地消

## ○ポスター①

こだわりのクッキー
多摩の杜
任 仁介
ゴボーン伯爵
野菜キャラ
全員集合！
薩摩 妹子
やさいでげんきに！
カボチャの茶々
大賀 タケオ

## ○ポスター②

多摩うどん
ぽんぽこ
○営業時間：11:00～19:00
（ラストオーダー18:30）
○定休日：日曜日・木曜日
○住所多摩市聖ヶ丘2-21-3-7
○Tel・Fax　042-319-6441
イメージ
今食べたいうどんを
想像してみよう。
多摩うどん　ぽんぽこ
検索

## ○ポスター③

## ○ラジオCM原稿

SE:学校のチャイム
子ども：起立　礼　おはようございます！
先生：はい、おはよう。
　　それでは、今日の授業を始めます。
　　皆さん、多摩の名物といえば？
先生：はい、山口さん！
子ども①：はい！
　　多摩うどん　ぽんぽこの　コシの強いうどん！
先生：すばらしい！吉野くん聞いてた～？
子ども②：はい！
　　多摩うどん　ぽんぽこの　関西風のだし！
先生：米倉さん起きなさい！
子ども③：はい！
　　多摩うどん　ぽんぽこの　特製揚げ玉！

先生：じゃあ、次は、多摩うどん　ぽんぽこといえば？

先生：はい、山口さん！
子ども①：はい！
　　開業して4年！
　　地産地消！
　　多摩市の聖ヶ丘商店街にある！
先生：はい、次、吉野くん！他には？
子ども②：はい！
　　明るい店員さんがいる！
　　和風でお洒落な店内！
　　のれんは紺に白い丸
先生：米倉さん聞いてた～？
子ども③：はい！
　　持ち帰りのうどん！
　　持ち帰りのあげ玉！
　　持ち帰りの佃煮とふりかけ！
先生：はーい　よくできました。
　　これテストに出るよ～～～

NA：その美味しさは学校ではとても教えられません。
　　一度お店に行って彩り豊かなその味を体験してください！
　　多摩うどん　ぽんぽこ

# 今後の展望

①制作したポスターやシールを活かして
多摩の杜のクッキーの売り上げアップ

②ぽんぽこのPRと共にゼミのPRも行う

③今後販売予定「はらみねの香り」などの
セールスプロモーション

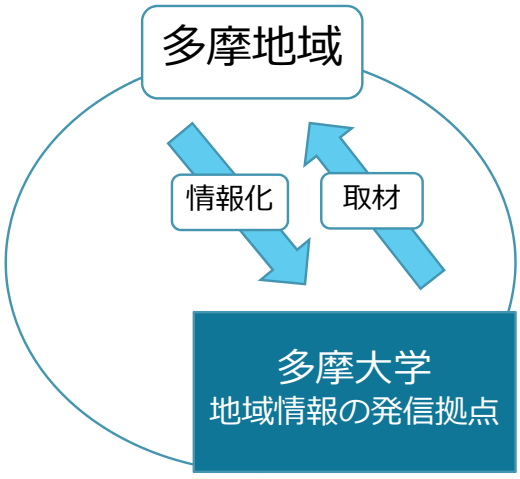
# ご清聴ありがとうございました

# ハイブリッドメディア研究会

3年 勝山 義弘
3年 三好 瑛大
3年 土方 亜紀
1年 青木 耀樹
1年 佐藤 朱音
1年 田邉 大輝
1年 水野　匠
1年 山﨑 啓道
1年 山本 圭佑
監修：学長室

# ハイブリッドメディア研究会とは

多摩大生の力によって多摩地域のプロモーションを行う



ウェブサイト
T-each
全国へ情報配信

# T-eachとは

## ハイブリッドメディアとは

伝えたい
テーマ

多摩地域

特産物
歴史・人物
イベントなど

取材・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ
信頼関係

写真・動画・
レポートなど
様々な手法で

Webサイト
ページ制作

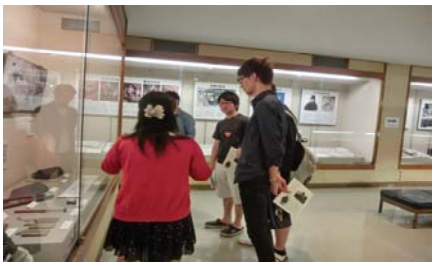
T-each
インターネット配信

**地域貢献**

ハイブリッド
メディアで

# これまでの主な取材紹介

農をもっと手元に　株式会社FIO
東京都八王子市堀之内由木



八王子郷土資料館
東京都八王子市上野町

パルテノン多摩
歴史ミュージアム
東京都多摩市多摩センター

ワークショップ型コミュニケーションカフェ
タマラボ
東京都多摩市諏訪

# 八王子市郷土資料館（八王子千人同心①）

2014年7月5日（土）
八王子市郷土資料館　八王子千人同心の資料見学・レクチャー
取材：経営情報学部3年 勝山 義弘
経営情報学部1年 青木 耀樹　水野 匠
山﨑 啓道

多摩地域の歴史を深めたいと思い、江戸時代に農民の身分でありながら、武士としても生きた「八王子千人同心」について調べるため八王子市郷土資料を訪問した。学芸員の加藤典子様の説明によると・・・・

町奉行の下に千人頭があり、その部下に10人またその部下に10人またその部下に10人でそれを合わせて千人同心と呼ばれた。今の西八王子の千人町。いろいろなところに住んでいた。連絡網みたいなもので連携を図っていた。三鷹、入間、あきる野、淵野辺、千葉にも住んでいた。
千人頭が八王子にいたから八王子千人同心と呼ばれた。武田の遺臣（八王子にやってきた）。始まりは、1600年～、なぜ八王子に？いろいろな説がある。八王子代官がいたから、治安のため、また軍事に活用。日光の火の番を担っていた。家康の遺骨を運ぶ際に護衛をした。

レポート：山﨑 啓道

多摩の地で幕府を支えた八王子千人同心、1800年～、蝦夷地の開拓に出向いた歴史がある。今後も取材を重ねていきたい。

# 若者が農業で町を魅力的に「FIO」

2014年7月26日（土）
八王子市堀之内由木　株式会社FIO
代表取締役　舩木翔平 氏インタビュー
取材：経営情報学部3年　勝山義弘
経営情報学部1年　青木耀樹

八王子市堀之内にあるFIOにお邪魔して、代表の船木翔平さんにお話を聞くことができた。
FIOとは多くの人たちに身近にある「農」にふれてほしいという想いから2013年に設立された。平成に入り一から農家を始めるのは八王子市ではFIOであり、その目的、想い、志を伺った。
畑は八王子市で農家をやっている鈴木亨さんから、見込まれ借りている。
船木さんは農業者、身内だけでなく、顧客・他業界を巻き込むことで様々な意見の中から、解決策を模索することがキーワードであるといっていた。父の時代は、他業界を巻き込んで話し合いをした。現在はあまり行われてないような気がすると。
FIOは個々でやりたいことがある人が集まっている。目標までの過程はあまり重要じゃなくて、やりたいように個々が動けばいい。目標がずれてなければいいと考えている。
FIO式農業はつながりを大事にし、個々がやりたいことを行う、今までない農業法式ではないだろうか？

レポート：勝山義弘

## 今後の展望

地域の信頼を得て
プロモーションを行うためには
責任感のある活動の継続が必要

**多摩地域の企業・団体と協力連携**

NPO活動も視野に入れて

2014 年度地域プロジェクト発表祭配布資料　　2014 年 12 月 13 日

# みどりを通じて世代をつなぐグリーンライフ・プロジェクト

PJ メンバー　：◎高橋草太・酒井駿・菅寛貴・中村郁也・松田祐貴（4 年）
小野元寛・常田恭右（3 年）
氏家侑也・井上滉大（2 年）
指導教員 ： 梅澤佳子

## 1.梅澤ゼミの活動内容

梅澤ゼミは、2、3、4 年生の 3 学年、計 30 名が所属しており、社会学を学びながら、地域での活動を行っている。活動目的は「社会的な課題の解決と同時に、新たな価値を創出する画期的な仕組みをつくること」である。今年度は、本 PJ(グリーンライフ・プロジェクト)の他に「近隣交流七輪プロジェクト」や「小学校と地域の連携プロジェクト」、「みんなの食卓プロジェクト」、「多摩大学のマスコットキャラクターをつくろうプロジェクト」、「多摩・キャンパスフェスタ」、「志企業プロジェクト」などの 7 つの PJ 活動を行なっており、多摩地域の自治体・自治会・行政・企業・NPO 法人・公民館・他大学の学生など 20 以上の団体と連携している。

## 2. コミュニティ再構築の意味

我々が活動している多摩ニュータウンは、戦後の一極集中に伴う住宅不足という課題解決のため開発されたベッドタウンであり、開発から既に 40 年以上が経過している。現在、多摩市が抱える問題は 【高齢化】と【交流の希薄化によるコミュニティの弱体化】である。

多摩ニュータウンは、集合住宅が多いという性質上、子どもが大人になった時、2世帯以上で暮らすことが難しいため、子どもは独立し、別世帯とならざるを得なくなる。結果、ひとり暮らしのお年寄りが増えている。　多摩ニュータウンは全国から繋がりのない人々が集まって形成された街である。まち開き当初、移住者は若く、コミュニティの必要性を感じていなかった。しかし、現代になり上記のような問題に直面しコミュニティの重要性が高まっている。

共助・互助しなければ生きていけなかった農業中心社会と異なり、工業中心社会は地域コミュニティが生産活動に直結しない。農業中心の社会の息苦しさから解放され、人々は都市の開放感を味わった。

現在は、昔のような結束が強い農村型のコミュニティを求めているわけではない。「コミュニティが弱体化は地域の大問題だが、かと言って、しがらみの多いコミュニティも嫌だ」ということであろう。今、時代の変化に合わせた新しいコミュニティのあり方が求められている。

「世代間交流がコミュニティに果たす役目は、単なる可逆的な再生（ここでは近隣の助け合いの再活性化）ではなく、コミュニティの崩壊（ここでは近隣での助け合いの弱体化）を食い止めるということであるといえる。」
※築山（2010）引用

左図は、PJメンバー作成。

## 3.活動の目的

本プロジェクトは多摩市の特徴とも言えるみどり豊かな自然を活用し、以下 3 つの目的を活動の指針にしてきた。

1. 「世代を超えた世代間交流（3 世代交流)」
2. 「人と人を結びつける仕組みづくり」
3. 「多くの方がみどりと関わる仕組みづくり」

## 4.多摩市のみどりの特徴

多摩市には 2 種類のみどりがある。

「多摩ニュータウン開発時に新たに創出されたみどり」

「昔ながらの多摩丘陵の里山的風景を感じさせるみどり」

多摩市民のみどりに対する満足度（平成 23 年度調査）は、27 年連続 90%以上と他市に例を見ない非常に高い数値である。(※多摩市ホームページ調べ)

また、多摩市以外の方々にとっても、遠出をしなくてもみどりに触れることができる場所として重要な価値を持っている。

（1）みどりの持つ機能

都市環境の改善機能、景観形成、健康やレクリエーション、コミュニティの場の提供、都市の安全性や防災性の向上。微気候緩和の機能、低炭素まちづくり、防災まちづくり、生物多様性への対応など。

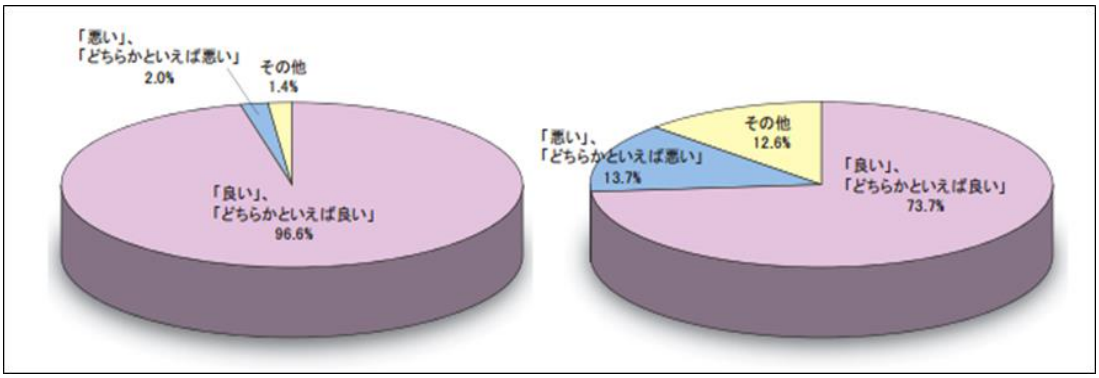
・多摩市のみどり率は 53.9%（1135.9ha）市全域の半分以上。
・公園以外の樹林地 24.9%（525.2ha）
・公園の占める割合が 15.4%（324.4ha）となっている。 (※多摩市みどりの基本計画より)

（2）みどりに関するアンケートの結果からみえること

・生活環境における「みどりの豊かさ」の総合評価

「良い」、「どちらかといえば良い」と評価した市民の割合は 96.6%であり、生活環境の総

合評価の中で、**「みどりの豊かさ」は最も高く評価**されている。




平成 23 年度多摩市政世論調査における、生活環境に関する総合評価の結果

（出典：平成 23 年度の多摩市政世論調査 - H23（多摩市））

・多摩市グリーンボランティアの認知度

「詳しくは知らない」と「知らない」をあわせると 79.4%（図 1）と**多摩市グリーンボランティアの存在及び活動内容の認知度が低い。**

・グリーンボランティアへの興味

「興味がある」、「興味はあるが時間的な余裕がない」をあわせると 82.4%（図 2）となっており、**みどりに関わるボランティアに興味のある人が多い**ことが分かった。

・緑地管理の今後

「市と市民ボランティアの両方で管理すべきである」と回答回答した市民が 77.9%（図 3）となっており、**約 8 割の市民が今後の緑地の管理に対し協働が重要だと考えている。**

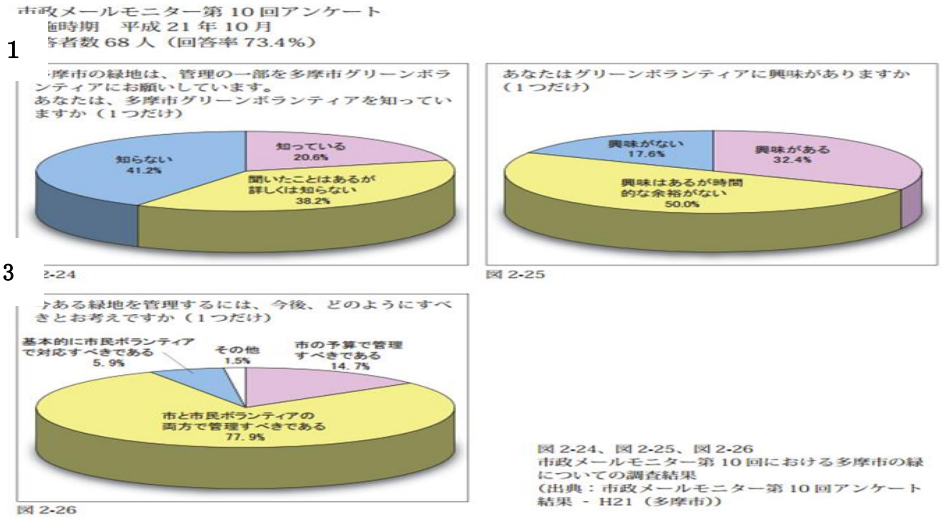



図 1　　図 2

図 3

図 2-24、図 2-25、図 2-26
市政メールモニター第 10 回における多摩市の緑についての調査結果
（出典：市政メールモニター第 10 回アンケート結果 - H21（多摩市））

アンケート結果から、市民のみどりに関する満足度は高く、自らもみどりの管理に関わりたいと思っている住民が多いことがわかる。残念なことに、グリーンボランティアの認知度が低い。グリーンボランティアの活動を広く多くの市民に知ってもらい、関わってもらえる仕組みづくりを早急に検討しなければならない。我々の今後の活動の検討材料とし

ていきたい。

## 5.多摩市立グリーンライブセンター

多摩市立グリーンライブセンター(以下 GLC)は、元々「みどり豊かで快適なまちづくり」を目指し、都市の緑化を推進していくための拠点施設としての役割を期待され 1990 年 4 月に開設された。施設のコンセプトは、「集い憩い学びのガーデン」であり、ＧＬＣでは花とみどりを通して、人が集い、憩い、学びに繋がる場を市民の方に提供している。ＧＬＣでは開園以来、みどりに関する講座(年間平均 120 項目※①)や、みどりに関する相談(年間平均 3,200 件※①)が行われ、年間平均で 36,000 人※①を超える来園者があった。しかし近年の財政状況で市民の多様なニーズ、趣味嗜好に合わせた講座運営が難しくなってきていた。

その一方で、多摩市内のみどり率は 2010 年において、53.9%※②であり、都全域 2013 年：50.5%※②と、他市と比べてみても非常に豊富である。多摩市は、「みどりの基本計画の基本方針」の中でも、市民とともにみどりの保全とその管理に取り組むテーマは、パートナーシップによるみどりの保全、育成、創出を進めるものとして非常に重要な政策であると位置づけている。

そのような状況から、2004 年「行財政再構築プラン※④」に基づき、ＧＬＣの民間委託を含めた、財政負担を削減する新たな運営方式が検討された。2007 年からは、多摩市にある恵泉女学園大学との運営に関する協議が始まり、その後、多摩市グリーンボランティア連絡会[1] が設立され、多様な団体、組織との協議が進められてきた。その結果、2011 年 4 月１日から、多摩市と恵泉女学園大学と多摩市グリーンボランティア連絡会の三者により市民協働指定事業として、「多摩市立グリーンライブセンター連携推進協議会」を組織し、ＧＬＣを管理運営していくこととなった。その結果、当初 8,000 万円かかっていた予算を５分の１に削減することができ、来場者も増えた。(「多摩市立グリーンライブセンターの運営管理業務委託」の締結。)

我々は、三者による市民協働指定事業となった 2011 年度より参加させていただくことになった。

※①・・・多摩市立グリーンライブセンターHP 調べ：http://www.keisen.ac.jp/tglc/about/gv/

※②・・・TOKYOMETROPOLITANGOVERNMENT 調べ：

http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2014/09/60o9t300.htm

※③・・・多摩市 HP：http://www.city.tama.lg.jp/plan/14946/saikouchiku/

## 6.これまでの活動

（１）初年度の活動内容

2011 年度までのグリーンライフ・プロジェクト(旧近隣交流ベルブ永山グリーン・プロジ

[1] 多摩市立グリーンライブセンターの市民利用促進を目的に、多摩市内で多摩市と協働して環境保全等の活動を行っている 13 の団体が集まり結成した会。

ェクト)は、永山公民館の屋上でハーブや花を育て、手付かずとなっていた屋上を活性化させ、ベルブ永山をみどり溢れる市民の交流の場にすることを目的として活動していた。

具体的には、永山公民館3階のテラススペースを借りて、花の苗やハーブ、寄せ植えを育て、その花で夏の「保育室プール遊び」を彩ったり、公民館入口やイベントの飾り付けなどを行った。また、育てた朝顔の苗を配布し、各ご家庭での生育状況をメール等で報告してもらい、情報を共有することで交流を図るという方法を模索した。

しかしながら、公民館のテラスは通常施錠されており、立ち入る事が出来ないスペースであるため、当初計画しいたような活動、我々が育てた花やハーブで地域の人々の交流の輪を広げていく事は出来なかった。

（２）2012年度の活動内容

そのため2012年度は活動を大きく見直し、“地域の活動を知る”ことをテーマとして掲げた。地域の行事や活動に参加し、他の団体がどの様な活動をしているのか、また、何が必要とされているのかを探ることにした。そこで、以前からお世話にもなっていた、みどりの拠点である「多摩市立グリーンライブセンター」や、市民団体「一本杉公園みどりの会[2]」の活動に実際に参加し、連携を深めていった。

① GLC、一本杉公園みどりの会との連携活動「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり」

2012年からは、ＧＬＣのイベントのお手伝いとして、多摩大学梅澤ゼミで「グリーンライブセンタープロジェクト」を発足させた。

最初の連携として「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり-親子で竹馬作り-2012」に参加し、一本杉公園みどりの会の方々の教えの元、竹細工作りの補助と列整理などを行った。

同イベントには2013,14年も参加させて頂き、2013年からは梅澤ゼミ「グリーンライフ・プロジェクト」として新たに活動を始め、手伝いだけでなく準備段階から企画・運営を行っていった。従来の竹細工(竹馬・竹ポックリ・竹笛)に加え、竹水鉄砲の作製と、竹水鉄砲を用いた射的を自作した。このイベントにおいての目指すべき姿は、講師・親・子どもによる三世代交流である。

[2] 一本杉公園を中心に活動しているNPO法人

② GLC、恵泉女学園大学との連携活動「多摩センターハロウィン」

「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり-親子で竹馬作り-2012」を行なった同年に、多摩センター ハロウィンイベントの催しの一つとして行われている「多摩センターハロウィン in 2012-グリーンライフ・プロジェクト-」にも参加させて頂いた。ＧＬＣの知名度を上げることと、イベント以外でも足を運んで頂き、日常的にＧＬＣを使用してもらえるようになることを目的として発足した。恵泉女学園の恵話会サークル[3]とＧＬＣの職員が中心となって活動し、お菓子配布やハロウィンにちなんだゲームや演劇を行った。「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり-親子で竹馬作り-2012」と同様に、2013, 14 年も準備段階から参加し、スタッフの活動予定作成や記念撮影コーナーを新たに設置した。

今後は、「ＧＬＣに日常的に足を運んでもらう」という目的を三者で共有すると共に、目的に適した企画を展開する。

（３）2013 年度の新規事業「ウッドクラフト講座」

この年、梅澤ゼミ「グリーンライフ・プロジェクト」が 2011 年度までＧＬＣ内で一本杉公園みどりの会の方を講師として行われていたウッドクラフト講座を再開させた。この講座は人気の講座であったが、講師の方々の高齢化により資料の作成や運営が難しくなったため、やむなく中止となっていた。ＧＬＣ職員の方から「君たちで講座を運営してみないか」というお話を頂き、新たに運営することを決めた。その後同ゼミのプロジェクトの祭事に賑やかしの一種として「ミニ・ウッドクラフト講座」という名で簡単な木のクリップなどを作製や配布を行なっていった。実際の講座運営にあたっては、まだ学生の知識だけでは作品の知識や種類に限界があり、一本杉公園みどりの会の方に再び講師をお願いした。資料の作成やアシスタントを条件に、将来的には我々学生がウッドクラフトの技術を継承し、講座を梅澤ゼミ生が単独で行えるようになることを視野に入れ、講座を再開させた。

この講座では、世代間交流、市民のみどりの保全に対する興味関心を軸として行っており、一本杉公園みどりの会の皆様や講師による竹細工などの技術の継承を目的に置いてきた。現在は、講座の企画・運営を通し、高齢の方々の技術を我々学生が吸収している。今後は、技術を継承した我々学生が、子どもたちや親世代に対し講座を行い、みどりへの興

[3] 恵泉地域言語活動研究会の内の一つ。恵泉お話を語る会

味関心を持って頂けるための場を提供していく。また現在では、ウッドクラフトの作製のみを参加者に楽しんで頂いていたが、将来的にはウッドクラフトの材料集めから作製までを一つの講座として扱う。材料を集めるだけでなく、公園のゴミ拾いや落ち葉拾いなどを通じて身近なみどりに触れて頂ける講座を目指す。例として、落ち葉や枝などの資源を用いた焼き芋イベント、リースづくり、近隣小学生の夏休みの自由工作教室などを考えている。

**7. 我々の活動に対する地域の方々の声**

ヒアリング対象者：**多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局長 赤羽誠様**
**恵泉女学園大学 職員 長谷川陽子様**
**ウッドクラフト講座 講師 佐藤堅太郎様**

**多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局長 赤羽誠様**

**＊多摩大生が GLC に関わって変わったこと**

①多摩市行財政構築プランに基づき三者連携により企画運営しているが初期段階から梅澤ゼミが関わってくれたのでいっしょにやってきたという感覚だ。

②市民団体は梅澤ゼミの活動を非常に気にかけている。

③来場者数は確実に増えている。

**＊プロジェクト活動の貢献について**

①年齢の高い職員が多いので力仕事などでとても助けてもらっている。ゼミの人員が多いので、その分職員に余裕ができ、イベントに厚みがでた。

②世代間交流の幅が広がった。

＊これから期待すること

「木」は 10 年 20 年と長く時間をかけて育てていくものなので、次の学年への継続性を意識して、長く関わり続けてほしい。

＊学生全体へ

①一緒に活動できるだけでも嬉しいので、もっと積極的に参加してほしい。

②コミュニティ・デザインは学生にしかできないのかもしれない。

会社というものは利益を目的として動くため、自分たちに対して利益が出ないものには動かない。そのため、利益を求めない学生というのは貴重であり、利益を求めないからこそできる事がある。また学生は学びの一環として、行政など様々な場所に入ることができるため、様々な団体の架け橋になれる。

恵泉女学園大学 職員 長谷川陽子様

＊梅澤ゼミが GLC に関わって変わったこと

様々な視点や気付きも与えてもらっている。それぞれの大学に特徴があるから、多摩大学のようなアプローチの仕方があるのだと恵泉女学園大学にとって、とても良い刺激になった。

＊プロジェクト活動の貢献について

①梅澤ゼミが「なんでもやります！」という姿勢でお手伝いに入ってきてくれたので、お願いしやすかっし、おかげで余裕ができた。

②一本杉公園みどりの会の方々が変わるきっかけをつくった。

＊こうするべきだったこと

①恵泉女学園大学との交流が普段からできるような体制ができれば良い。

②もっと GLC の活動を知る必要があり、ハロウィンや GW 以外のイベントにも顔を出すことが重要。

＊これからのアドバイス

①第一ステップは踏めたので、これからの活動に期待する。

②企画をしたいときは、その地域の活動や思いを知ること。

③ただやりたいだけではなく、相手の気持ちを理解することが大事。

＊学生に求めること

①様々なとこに入って学ぶ。

③ 企業や行政、大学間のつなぎ役になれる。

④ 利益を求めないからこそできることがある。

ウッドクラフト講座 講師 佐藤堅太郎様

＊多摩市について

①多摩市は田舎でもなく、都市でもない中間的な場所。
②多摩市は将来、お年寄りが暮らしやすい医療・福祉や地域ネットワークの創出など、今より福祉的な社会を目指す必要がある。
③多摩市での生産年齢人口を増やすためにも、若い人がここに住みたいと思える様な環境にすることが重要。梅澤ゼミの頑張りに期待する。

**＊多摩市のみどりについて**

①多摩市の緑は非常に豊富。
②多摩市に人を呼び込むにあたって、ただ観光地やテーマパークを増やせば良い訳ではない。多摩市には豊富な緑があるが、緑を植えて管理しようとすると非常に資金がかかる。また、無造作に植え続ければ良い訳ではなく、イギリス式の風景式庭園のようにすれば良いと考えている。

**＊学生に対して**

①GLP はまだ出発点だから、「こうしてほしかった」「今後こうしてほしい」などといったことは現段階では言えない。とにかく継続性が重要。
②年の総括を GLC などで行いたい。顔を突き合わせて言い合えることで、より良い関係が築ける。
③学生が入ってきて変化したことは新しい繋がりができたこと。
④一本杉公園みどりの会からすれば、孫や子供と話しているような感覚だし、学生にとっても普段の生活の中で 70 代の人間と話すような機会はないと思う。そういった意味でお互いにとって新しい繋がりができたのは非常に良いこと。社会に出る前の勉強として、歳の離れた人に対してそういった態度をとれば良いか、どうコミュニケーションをとれば良いかなど沢山勉強してほしい。

**8.活動を通して明らかになった学生の役割と可能性**

我々は企業の地域貢献活動やプロのデザイナーと比べると知識も少なく、資金面や継続性を考えても活動の限界がある。だが、学生ならではの強みがあることがわかった。
学生というニュートラルな立場は、利益を求めない為、学びの一環として行政などをはじめとする、様々な場所に入ることができ、地域の方々から信頼され、人と人との架け橋になれる。実際に我々が作業をおこなったことで、当初はあまり積極的に話しかけてこなかった方々が、回を重ねることで「学生のおかげでこういった良い関係が続けていくことが出来ている。」「我々職員は日々の活動に追われて手一杯だから学生が入ってくれると助かる。」などとおっしゃって下さるようになった。そのことから、学生は大人の本気を引き出すことが出来るのと考えた。

**「コミュニティ・デザインは学生にしかできないものなのかもしれない。」**

という大変ありがたい言葉を頂いた。

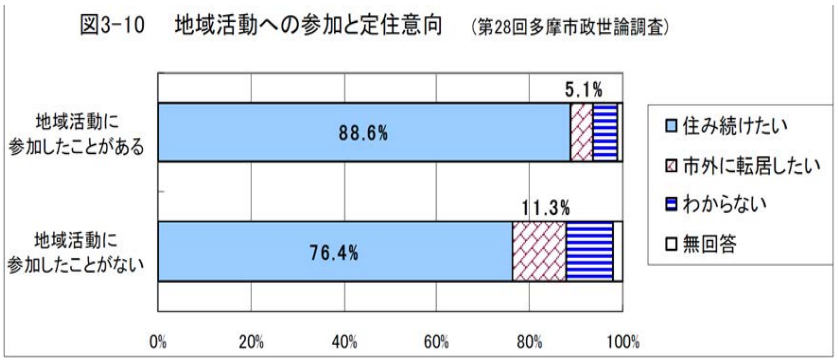
## 9.今後期待できる効果とは

学生が地域活動に参画することにより、地域に対して関わってみたいという意識のある住人と、地域の保全を目的とする NPO 団体とをつなぐ架け橋の役割を果たすことができる。

その結果として、行政に頼りすぎない多摩のみどりの保全と、地域への積極的参画人口の増加が期待されるのではないか。

また、我々学生とイベントに参加する子ども達が共に活動することで、イベントに参加した子どもたち、参加した親たちが地域の活動に参加しやすい土台をつくることができ、地域の活動への参加者を増やすことが期待できる。イベントに参加した人たちだけではなく、我々大学生の立場としても、NPO や地域の住民と関わることは、学びの部分で非常に重要な要素となる。また、多摩のみどりの良さを理解し、郷土意識が高待ったと感じている。「地域の活動に参加した人たちほど、郷土意識が高まり、その土地で職を求める傾向がある。」ということは、図１でもわかる。

イベントの参加者だけではなく、多摩地域の大学に通う大学生が積極的に多摩の地域活動に参加し、多摩の魅力を知ることで、大学生が多摩地域で職を求めることにつながるなど、将来の多摩の活動人口としての成長も期待できる。他にも、団地などに暮らす老人達に対して、外へ出るための機会(活動の場)を設けることで、地域に暮らす老人が日常的な会話を当たり前のように行い、身体を動かすことができるので、痴呆などに対する防止にもなる。




（図１　多摩市公式 HP・第四次多摩市総合計画　基本構想・基本計画より引用）

## 10.活動計画

今後、グリーンライフ・プロジェクトは、従来の「みどりの大切さを参加者に伝え、楽しんで頂くイベント」から、「みどりの保全や管理を地域の方と連携して行い、地域の方と共に地域を盛り上げるイベント」へと移行する。先述したとおり、多摩のみどりは豊かではあるが、管理が重要な課題となっている。今後、市民がみどりにどの様に関わっていくかが重要であり、その仕組みづくりをしなければならない。私たちグリーンライフ・プロジェクトは、今後ウッドクラフトや竹細工をはじめとしたみどりを通じて、世代間交流を行い、環境の保全・郷土意識を高めることに貢献したいと考ええいる。我々大学生が積極

的に地域の活動に参加し、NPO などで活躍する地域活動家を探し出し、今後の地域の担い手となる若者とつなげる役目を果たす新しい仕組みを考えていきたい。

既に多摩市で活動を行った結果、我々大学生と、行政・NPO・地域住民の方々との地域交流の輪が広がった。今後は我々大学生が地域活動におけるファシリテーターとなり、多摩地域の学校に通う小・中学生を中心に、保護者を巻き込んで活動を行う。来年度はグリーンライブセンター開館 25 周年記念であり、三者連携も 3 年目となる。多摩市、グリーンボランティア連絡協議会、恵泉女学園大学のみなさんにお世話になりながら、期待される存在として継続的活動を行なって行きたい。

我々梅澤ゼミの活動が多摩市教育委員会発行

「ESD Tama Consortium　DATA BOOK」に掲載されました。

## 参考文献・参考資料

山崎亮『コミュニティ・デザインの時代　自分たちで「まち」をつくる』
中公新書 2012 年
山崎亮『コミュニティ・デザイン　人がつながるしくみをつくる』学芸出版 2012 年
紫牟田伸子＋編集部『クリエイティブ・コミュニティ・デザイン』ﾌｨﾙﾑｱｰﾄ出版 2012 年
藻谷浩介 『藻谷浩介対話集　しなやかな日本列島のつくりかた 』新潮社 2014 年
多摩市「みどりのルネッサンス」多摩市役所 2013 年
朝日新聞「認知症 300 万人時代を生きる」（2013 年 1 月 1 日 12 版 朝刊）

## 参考ホームページ

平成 25 年「みどり率」の調査結果
http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2014/09/60o9t300.html
多摩市のみどりの基本計画
https://www.city.tama.lg.jp/plan/946/017327.html
多摩市公式ホームページ：姿勢情報、多摩市行財政再構築プラン
http://www.city.tama.lg.jp/shisei.html
http://www.city.tama.lg.jp/plan/14946/saikouchiku/
一本杉公園みどりの会ホームページ
http://www.tama-gv.org/ipponsugi/index.html
総務省統計局（2013.12.11）
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001116910
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001105789
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001085811
築山崇「世代間交流による相互扶助活動の活性化と福祉コミュニティ形成に関する実証的研究」 ニッセイ財団 (2010)
http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp/shiryoshitsu/index.html

TAMA UNIVERSITY 多摩大学 × KEIO

平成26年度地域プロジェクト発表祭配布資料

# 京王移動販売プロジェクト

多摩大学 経営情報学部
酒井麻衣子ゼミナール

## 目次

P.3 • 酒井麻衣子ゼミナールとは
P.4 • 京王移動販売とは
P.5 • 本プロジェクトの概要
P.6~ • 各班の研究テーマ
P.7～ • 各班の成果報告

# 酒井麻衣子ゼミナールとは

**酒井ゼミ**

- データ分析
- マーケティング

具体的な施策提案をおこなう

課題解決策 → 企業様

酒井ゼミでアンケート調査やインタビュー調査を行う。
得られたデータを基に解析ソフトを用いて分析を進める。
企業様に対して分析結果を元に、製品・サービスの企画立案や
戦略の提案を行う実践的なゼミナールである。



# 京王移動販売とは

**目的：対面販売を通じた地域とのコミュニケーション・御用聞き**

地権者自治会
多摩市

販売場所等 ↔ 京王ほっとネットワーク KEIO HOT NETWORK ↔ 商品供給

京王グループ
地場産品

食品物販
各種サービス提供 ↓

↑ 御用聞き・よろず相談

地域住民

**地域にとって・・・**
生活利便性・買い物の楽しさ・コミュニケーション

**事業者にとって・・・**
お客様ニーズの把握・サービス提供機会創出・地域活性化

| | 月曜日 | 火曜日 | 水曜日 | 木曜日 | 金曜日 |
|---|---|---|---|---|---|
| 10:10<br>~<br>10:45 | | 豊ヶ丘5丁目<br>1番住宅<br>(管理事務所横) | 多摩大学<br>(正門前) | | エステート<br>豊ヶ丘 |
| 11:20<br>~<br>11:55 | | 豊ヶ丘2丁目<br>1番住宅<br>(管理事務所横) | 連光寺老人<br>福祉館 | | 貝取商店街<br>(郵便局横) |
| 14:15<br>~<br>14:50 | ゆいま~る<br>中沢 | 松が谷団地商店街 | 貝取こぶし館<br>広場 | 松が谷団地商店街 | |
| 15:25<br>~<br>16:00 | | グリーンコープ<br>鹿島<br>(プレイロット公園) | | | |

# 本プロジェクトの概要

- 京王電鉄株式会社様の新事業である移動販売サービスは、**地域住民のニーズ充足**や**地域活性化**、**高齢化社会の課題解決**といったさまざまな使命をもった重要な事業である。
- 一方で、**一定の売り上げを確保**しなくてはならないという難しい課題も存在する。

**移動販売サービスに関して多角的な調査を行い、**

**その結果に基づいて課題解決のための**

**具体的なマーケティング施策の提案を行った**

酒井ゼミ所属の2年生11名・3年生13名・4年生3名の計27名5チームが
2014年度春学期 合同ゼミ「アンケート調査実践」の
課題プロジェクトとして取り組んだ

# プロジェクトの流れ

研究目的

移動販売サービスの課題解決のための具体的なマーケティング施策の提案

**STEP1**
- 4月　二次データ収集（業界理理解・サービス理解、競合理解 等）
- 4月末　キックオフ説明会・質問会（4/30実施）
- 6月中旬　研究計画書の提出

**STEP2**
- 7月~10月　各種フィールドワーク、定量調査、定性調査　等
- 9月~11月　調査結果まとめ

**STEP3**
- 11月初旬　成果報告会
- **12月 地域プロジェクト発表祭（12/13（土））** 本日

# 各班の研究テーマ

**A班：移動販売利用者の実態調査**

**B班：沿線住民の買い物実態調査**

**C班：移動販売による地域のつながりの強化**

**D班：移動販売の新規顧客獲得につながる広告宣伝**

**E班：イベント開催による移動販売の認知向上と新規顧客獲得**

以下に各班の研究概要と成果をまとめますが、
成果の具体的内容については本資料では
割愛させていただきます。
発表祭のプレゼンテーションにてご報告いたします。

# A班 「移動販売利用者の実態調査」研究概要

**【課題】**利用者実態を把握しきれていない。

**【目的】**販売員による印象やPOSデータの集計からだけでは分からない、利用者実態の定量データを取得し、移動販売の課題と魅力を明らかにする。

**【調査概要】**

調査場所：移動販売の全販売地点

調査対象：移動販売の利用者様

調査時期：2014年7月中旬～8月中旬

調査方法：対面式の質問紙調査

調査内容：1.移動販売に関して(交通手段･利用金額･よく買う品目など)

2.買い物に関して(食料品や日用品の購入頻度など)

3.情報収集に関して(移動販売を知ったきっかけなど)

回収数　：122部



# A班 「移動販売利用者の実態調査」研究成果

**1．移動販売利用者の利用実態を把握した**

おおむね販売スタッフの実感に沿った結果が得られたが、
それが定量的に測定されたことは、今後の業務改善等の意思決定に役立つものと考える。

**2．移動販売の魅力と課題を明らかにした**

調査結果の定量的分析により、以下を明らかにした。

- 移動販売に対する現状の評価（各サービス要素に対する満足度、総合満足度、再利用意図）
- 総合的満足・再利用意図に影響するサービス要素
- 移動販売の魅力と課題

# B班「沿線住民の買い物実態調査」研究概要

**【課題】**移動販売のメインの利用者である、多摩地域在住のシニア層の買い物の実態が把握できていない。

**【目的】**沿線在住のシニア層の買物に対する意識や現状・ニーズを把握する。

**【調査概要】**

調査場所：京王聖蹟桜ヶ丘駅・永山駅・多摩センター駅周辺

調査対象：多摩地域の京王線沿線住民

調査時期：2014年7月中旬～下旬

調査方法：街頭での対面式の質問紙調査

調査内容：1.買い物に関する意識（楽しさ、困難性など）

2.買い物の実態(スーパー・コンビニドラッグストア・百貨店・地域商店・通販／インターネットの利用状況)

3.京王移動販売について（認知、利用経験など）

回収数　：97部



# B班「沿線住民の買い物実態調査」研究成果

**1．京王線沿線の多摩地域在住シニアについて買い物に対する意識・利用実態、京王移動販売に対する認知・ニーズ等を把握した**

駅周辺を利用する多摩地域在住のシニア層が、

- 普段の買い物に対してどのようなニーズを持っているか
- どのような小売業態をどのように利用しているか
- 京王移動販売をどの程度認知しているか

といった、移動販売の非利用者を含めた買い物実態が把握ができた。

**2．シニア層が普段の買い物に求める要素から、移動販売で提供すべきコンセプトを抽出し、具体的な施策案を提案した**

# C班「移動販売による地域のつながりの強化」研究概要

**【課題】**京王グループは地域活性化のため、生活支援サービスの一環として移動販売を開始した。地域を活性化させるために、生活支援にとどまらない施策に取り組みたい。また近年、地域の人間関係の希薄化が問題視されている。

**【目的】**移動販売を活用して地域のつながりを強化する施策を検討する。

**【方法】**移動販売の実施場所の一つである多摩市連光寺福祉館をフィールドとして以下の3つの研究を行った。

① 地域に関する二次データ収集（連光寺の特徴把握）

② 連光寺福祉館のフィールドワーク（福祉館の現状・課題把握）

③ 連光寺福祉館利用者へのインタビュー調査（地域交流の現状・サークルの課題・移動販売へのニーズ把握）



# C班「移動販売による地域のつながりの強化」研究成果

**福祉館におけるサークル活動という地域の既存コミュニティと連携し、地域の人々が新しいつながりを作るきっかけを提供するイベント企画を提案した**

調査により以下の課題が明らかになった。

- 地域について：連光寺地域は昔からのつながりが強い一方、新たなつながり・交流が少ない。
- 福祉館のサークル活動について：新しい人とつながるきっかけがなく、サークルの加入者が増えにくい。

これらを解決する施策として、

既存のイベントに移動販売とサークル活動の発表会を新たに加え、地域住民との新たな交流のきっかけを提供するイベントを企画した。

# D班「移動販売の新規顧客獲得につながる広告宣伝」 研究概要

**【課題】** 新規顧客獲得においてポスティング広告の効果が持続しない。またより有効な広告方法・内容がどのようなものか明確になっていない。

**【目的】** 移動販売のメインターゲット（シニア層）とサブターゲット（子育て主婦層）について、広告に対する意識とともに、訴求すべき移動販売の魅力を明らかにし、有効な広告方法・内容を検討し、具体的な広告案を提案する。

**【調査概要】** 以下の3つの調査を行った。

調査①　移動販売利用者への定量調査（A班調査の一部として）

目的：移動販売利用者の広告に対する意識、移動販売の魅力を明らかにする

調査②　移動販売利用者へのインタビュー調査

目的：移動販売の認知経路、広告に対する意識を明らかにする

調査③　広告案の評価調査

目的：調査①②を経て作成したポスティング広告案について、沿線住民（移動販売非利用者）から評価を得、より有効な広告案を特定する。



# D班「移動販売の新規顧客獲得につながる広告宣伝」 研究成果

**メインターゲット（シニア層）とサブターゲット（子育て主婦層）に対し、**
**それぞれ「認知向上」と「利用意向喚起」を目的とした場合にもっとも有効と思われる広告案を提案した**

調査①②より明らかになった、各ターゲットに対する訴求ポイント（伝えるべき移動販売の魅力）を、有効と思われる4つの訴求方法で表現した全12の広告案を作成。

- 訴求ポイント（各ターゲットに伝えるべき移動販売の魅力）
- 訴求方法（有効な表現方法）

①イメージ（写真・イラスト）　②データ（数字）
③生の声（利用者の感想）　④解説（メリットの説明）

調査③により、「印象に残った」「関心を持った」「利用したいと思った」という3つの評価を定量的に測定し、各ターゲットについて、「認知向上」と「利用意向喚起」という目的に対してもっとも有効な広告案を特定した。

# E班「イベント開催による移動販売の認知向上と新規顧客獲得」 研究概要

**【課題】**現在の移動販売の利用者はリピーターが多く、新規顧客がなかなか増えない。その原因として、認知が十分に浸透していないことが考えられる。

**【目的】**新規顧客獲得を目指し、移動販売の認知を向上させトライアル利用につなげるためのイベントを企画する。

**【調査概要】**

調査目的：移動販売の魅力・利用者のイベントに対する意識を明らかにし、イベント案企画の参考にする

調査場所：移動販売の実施場所3か所

調査対象：移動販売の利用者様

調査時期：2014年9月上旬

調査方法：インタビュー調査

調査内容：1.移動販売に関して(利用頻度、利用したきっかけなど)

2.イベントに関して(イベントの参加頻度、関心のあるイベント内容など)

3.その他(余暇の過ごし方、趣味など)

回収数　：12部



# E班「イベント開催による移動販売の認知向上と新規顧客獲得」 研究概要

**調査によって明らかになった利用者のニーズや関心から、集客効果を見込める3つのイベント案を企画した。**

- 地場野菜・季節野菜の特別販売イベント
- 商店街と連携したスタンプラリーイベント
- 多摩市・多摩大学と連携した防災イベント

いずれも実現可能性を重視し、具体的な実施策を提案した。

# 障がい者就労支援と地域ネットワーク

東京経済大学
経営学部　3年　大泉政樹　関口弘美
鈴木翔子
2年　榎田大悟　清水美伶
棚沢公太
経済学部　2年　三上千明



## 目次

❶問題意識
❷既存研究
❸事例研究
❹結論
❺提言

# 目次

❶問題意識
❷既存研究
❸事例研究
❹結論
❺提言



# 障がい者雇用の現状

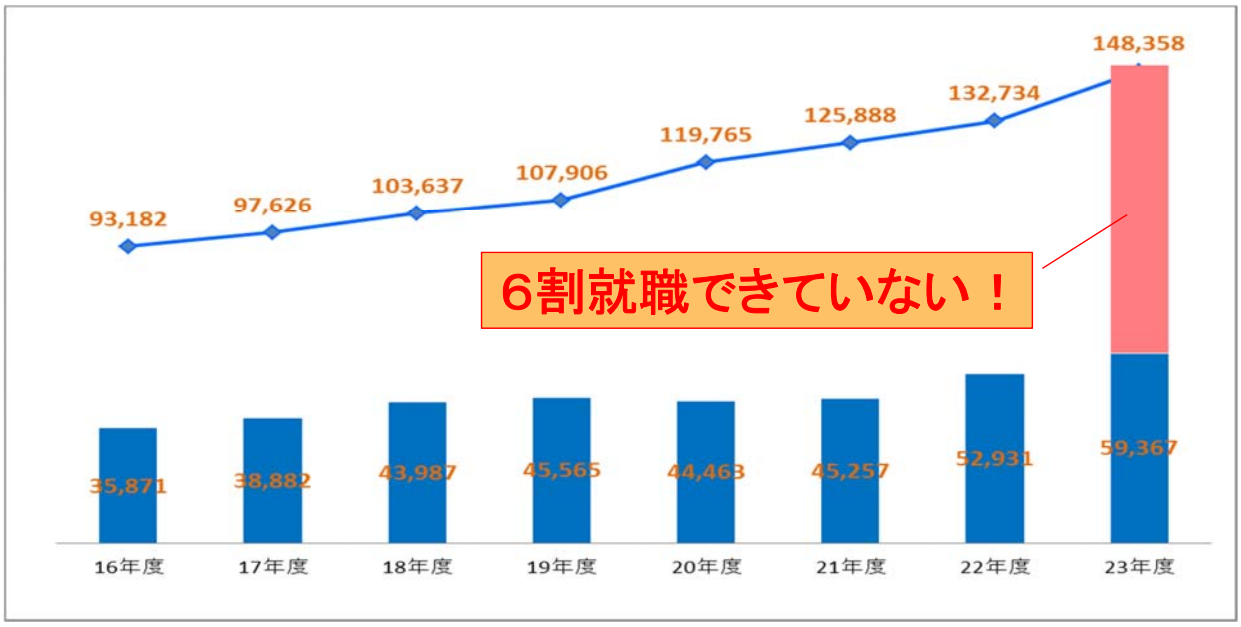
## 障害者雇用制度の法定雇用率の改定

| 事業主区分 | 法定雇用率 | |
|---|---|---|
| | 平成24年度まで | 平成25年度以降 |
| 民間企業 | 1.8% | 2.0% |
| 国・地方公共団体等 | 2.1% | 2.3% |
| 都道府県等の教育委員会 | 2.0% | 2.2% |

＼法定雇用率が上昇している！／

# 障がい者雇用の現状

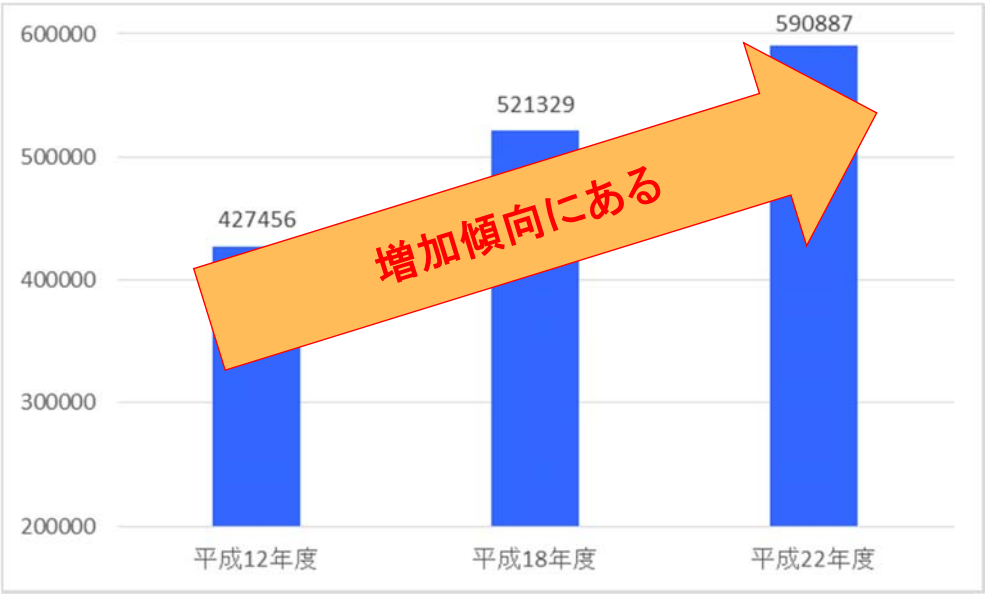
## 新規求職申込件数と就職数のグラフ






# 障がい者雇用の現状

## 東京都の障害者手帳保持者数推移



# 問題意識

❶障がい者雇用率が低いのはなぜか

❷どのように高くしていけばいいのか

＼考えていこうと思います／



# 目次

❶問題意識
❷既存研究
❸事例研究
❹結論
❺提言

# 既存研究

民間企業で

事業

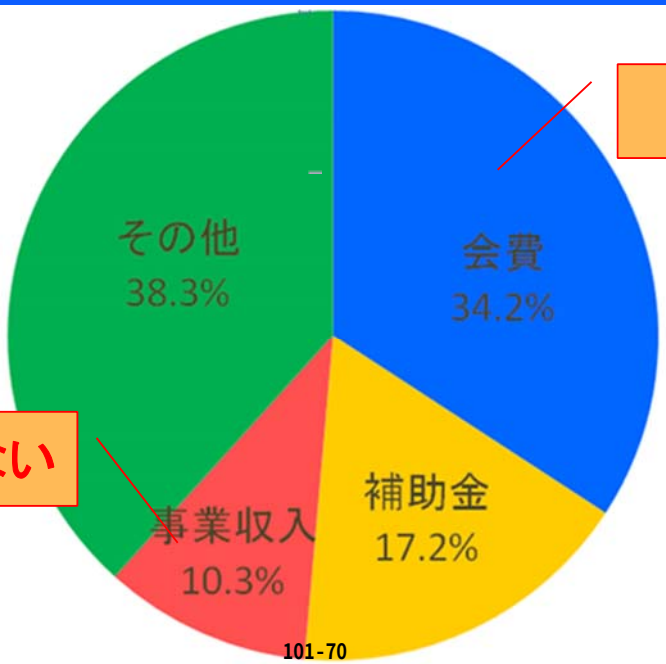
障がい

非営利組織に注目！



# 既存研究

一般的なNPO法人の収入内訳




会費多い

事業収入少ない

# 既存研究

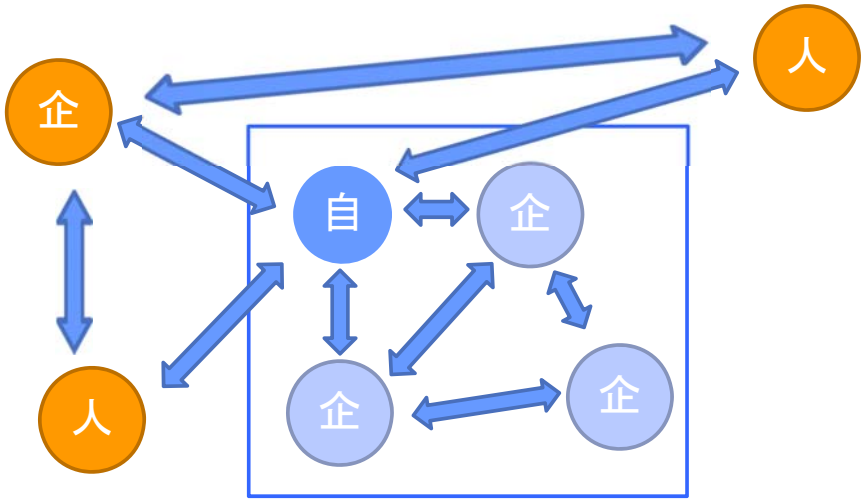
## 事業収入が良いNPO法人の特徴

❶企画力や組織マネジメント力を持っている
❷人的ネットワークを大切にしている
❸市場での特殊な位置づけを確保している
❹独自のネットワークをいかした流通経路を確保している



# 既存研究

## ネットワークについて（図式）



# 仮説

障がい者を対象とする非営利組織では、地域の**ネットワーク**を活かして高い事業収入を得ることで発展し、障がい者雇用率を高くすることができるのではないか

ネットワーク

↓

発展



# 目次

❶問題意識
❷既存研究
❸事例研究
❹結論
❺提言

# 事例の選択

❶多摩地域で活動をしている
❷非営利組織である
❸事業所を経営している
❹事業収入が高い
（平均の10%より多い）

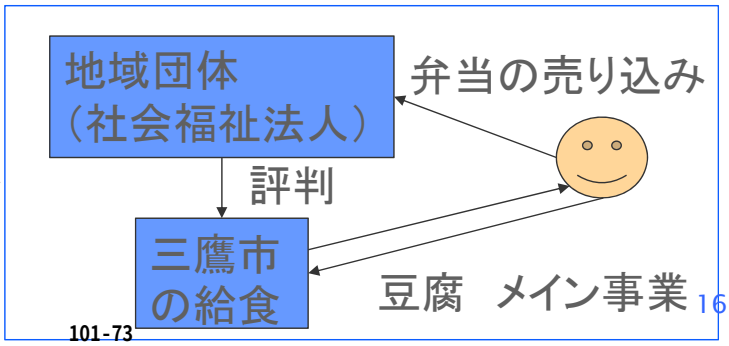


# 事例❶：社会福祉法人にじの会

## 就労支援：ワークショップハーモニー（三鷹市）

- 9月8日訪問
- 事業収入6162万円（H25年度）
  （全体の20．9%）

地域のネットワーク

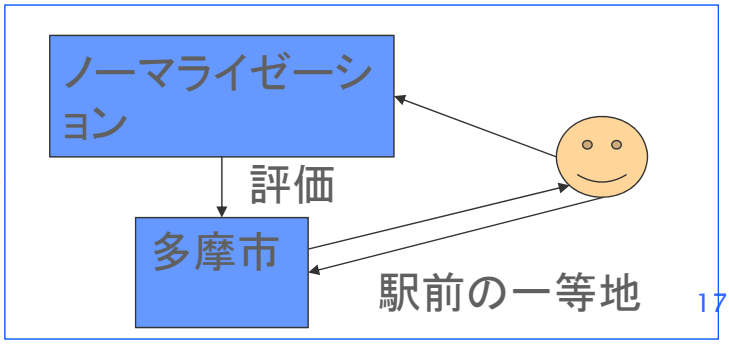


# 事例❷:NPO法人障害者自立支援センター多摩

## 就労支援:喫茶れすと(多摩市)

- 10月7日訪問
- 年商3600万円(平成20年)

地域のネットワーク



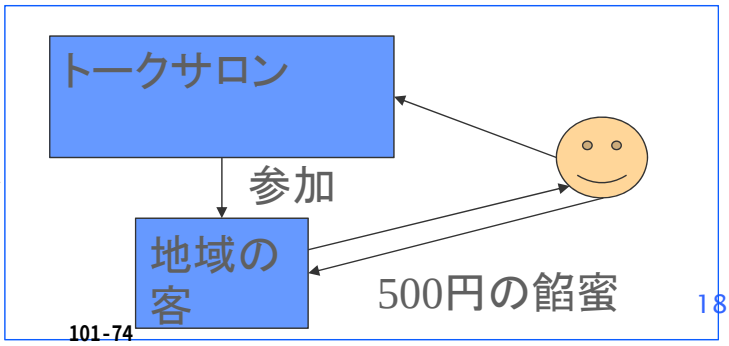



# 事例❸:NPO法人多摩草むらの会

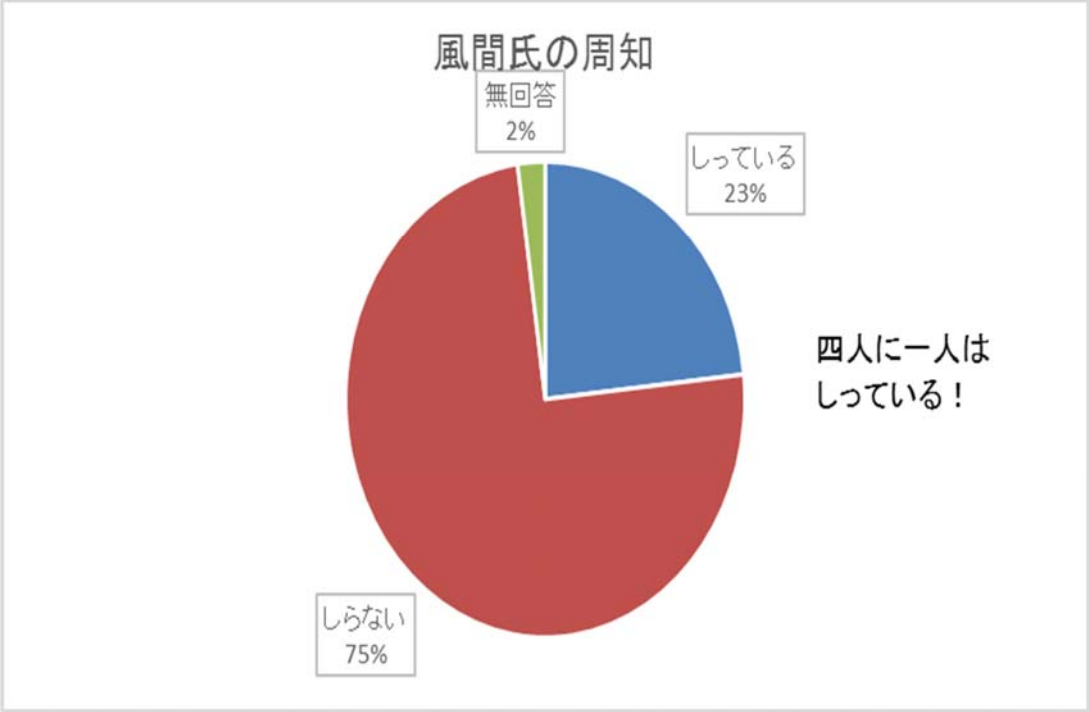
## 就労支援:寒天茶房「遊夢」(多摩市)

- 10月1日訪問
- 事業収入4億3800万円
  (全体の88.1%)

地域のネットワーク



# アンケート結果



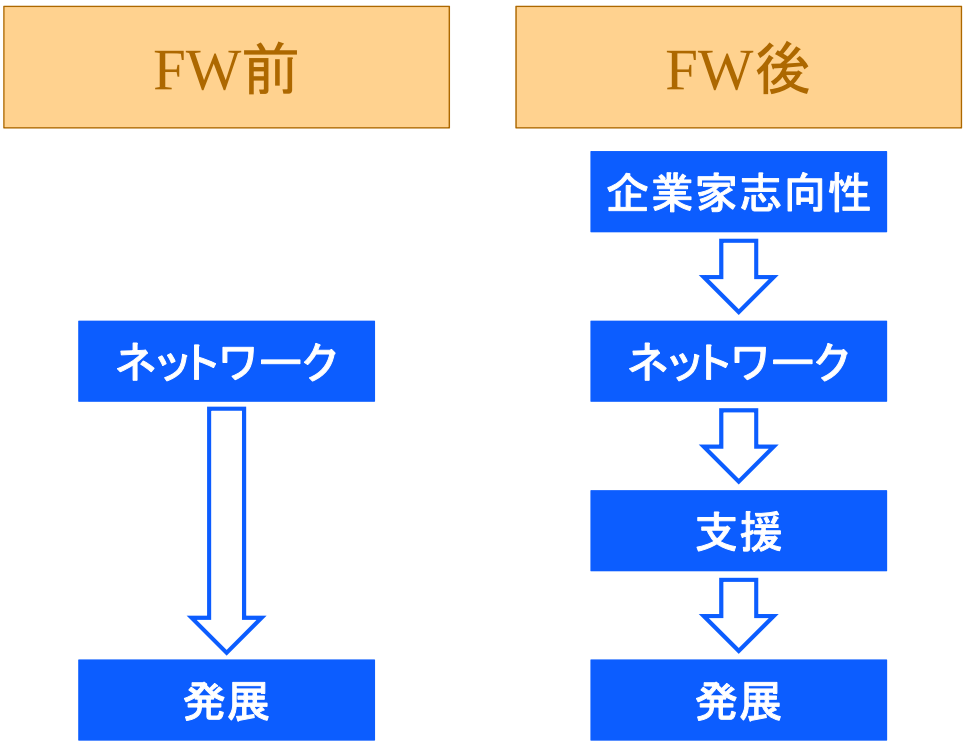



# 研究からわかったこと

## 企業家志向性（EO）

- 一般的に「先駆的・能動的な行動姿勢(Proactiveness)」「革新性(Innovativeness)」「リスク志向性(RiskTaking)」の三つがEOの構成要素としてとらえられている（山本、2014）

# 研究からわかったこと






# 目次

❶問題意識
❷既存研究
❸事例研究
❹結論
❺提言

## 結論

- 企業家志向性を持った経営者がネットワークを生み出し、様々な支援を得ることで高い事業収入を獲得できる
- 高い事業収入を基に発展し、障がい者雇用率を高くすることができる



## 目次

❶問題意識
❷既存研究
❸事例研究
❹結論
❺提言

# 提言

企業家志向性の構成要素である「先駆的・能動的な行動姿勢」「革新性」「リスク志向性」を高めるような活動をすれば高い事業収入が見込まれる

- 好きなことの知識をより深める
- きっかけを逃さない
- 人を集めて多面的な意見や相談をすることができる環境をつくる

先進的なNPO法人代表者によるメンター制と交流の場づくり



# 参考文献


- 「平成25年 障害者雇用状況の集計結果」〈http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000029691.html〉(2014/4/14)
- 「平成24年度・障害者の職業紹介状況等」〈http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/...att/2r98520000031oga.pd〉(2014/5/22)
- 多摩くさむらの会「http://kusamura.org/」(2014/5/8)
- 特定非営利活動法人多摩草むらの会(団体ID:1598528477)／団体情報｜CANPAN「http://fields.canpan.info/organization/detail/1598528477#finances」(2014/5/27)
- 高井良正司(2002)「長続きするNPOの設立と運営の実際」明日香出版社
- 「非営利組織の収入戦略と財務持続性」〈http://www.jstage.jst.go.jp/article/janpora/10/2/10_2.../_pdf〉(2014/6/5)
- 障害者雇用・就労推進連携プログラム 2012〈http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shougai/shougai_shisaku/shutotokyokodosengen/2012.files/2012_program.pdf〉(2014/11/5)

# 参考文献


- 坂本文武（2004）「NPOの経営　資金調達から運営まで」日本経済新聞社
- 社会福祉法人にじの会〈http://www1.parkcity.ne.jp/niji/〉（2014/8/5）
- 特定非営利活動法人コミュニティーネットワーク
  〈http://fields.canpan.info/organization/detail/1189869389〉（2014/6/26）
- 地域コミュニティとNPOの相互作用
〈http://www.daishodai.ac.jp/~soes49/kyotsu3.pdf#search=‘NPO+%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E6%80%A7‘〉（2014/7/2）
- 国内中小製造業の国際化プロセスにおける国際的企業家志向性（IEO）の形成と役割 ー海外企業との取引を志向・実現した中小製造業を事例としてー
  〈http://www.jfc.go.jp/n/findings/pdf/ronbun1405_04.pdf〉（2014/10/11）
- 社会的企業におけるネットワークの形成と展開
  〈https://www.jstage.jst.go.jp/article/janpora/13/2/13_59/_pdf〉（2014/9/10）
- ボランティア活動を知る〈www.ishikawa-npo.jp/volunteer/manual/1.pdf〉（2014/10/22）

# 世代間交流を
# 長期的に行うシステム


経済学部 12e0237 芦澤利幸
13e0568 大西 翔
経営学部 12b0548 吉和 匠
12b0280 高橋蘭奈
13b0281 下村早香
13b0035 小早川崇


## 目次

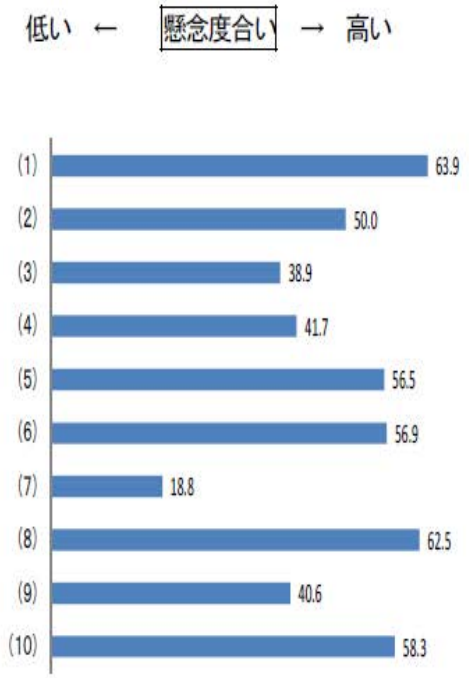

1. 問題意識
2. 既存研究
3. 問い
4. 仮説
5. 事例
6. 調査
7. 結論

# 1.問題意識　　多摩地域が抱える課題

<懸念度合いへの回答割合>

| | 懸念度合い | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 非常に懸念 | 懸念 | 若干懸念 | 関係ない |
| (1) 所得環境の悪化 | 20.8% | 50.0% | 29.2% | 0.0% |
| (2) 買い物難民の増加 | 0.0% | 54.2% | 41.7% | 4.2% |
| (3) 道路網・公共交通機関の未整備 | 12.5% | 12.5% | 54.2% | 20.8% |
| (4) 住環境が劣悪 | 8.3% | 20.8% | 58.3% | 12.5% |
| (5) 図書館・公民館等の不足・老朽化、遊休公共施設の増加 | 17.4% | 39.1% | 39.1% | 4.3% |
| (6) 道路、橋りょう、トンネル等のインフラの老朽化 | 20.8% | 33.3% | 41.7% | 4.2% |
| (7) 情報インフラの未整備、低い地域住民の情報リテラシー | 0.0% | 0.0% | 56.5% | 43.5% |
| (8) 地域コミュニティの崩壊・無縁社会の進行 | 25.0% | 37.5% | 37.5% | 0.0% |
| (9) 地域特有の文化・景観・自然環境の崩壊 | 0.0% | 30.4% | 60.9% | 8.7% |
| (10) 防災対策が不十分 | 8.3% | 66.7% | 16.7% | 8.3% |

<指数値>






出典：多摩地域「地方公共団体アンケート」調査

# 1.問題意識

地域コミュニティの衰退で発生する問題

『個人や家族単位では解決できない問題、例えば保育・しつけ、介護・看護、虐待、非行防止、貧困対策・社会的弱者支援、孤立・ひきこもり等、地域単位の共助、隣近所の相互扶助に支えられてきた生活共同体としてのメリットが喪失する。』

山内（2009）

# 1.問題意識

- 地域コミュニティの改善には

**世代間交流が必要**

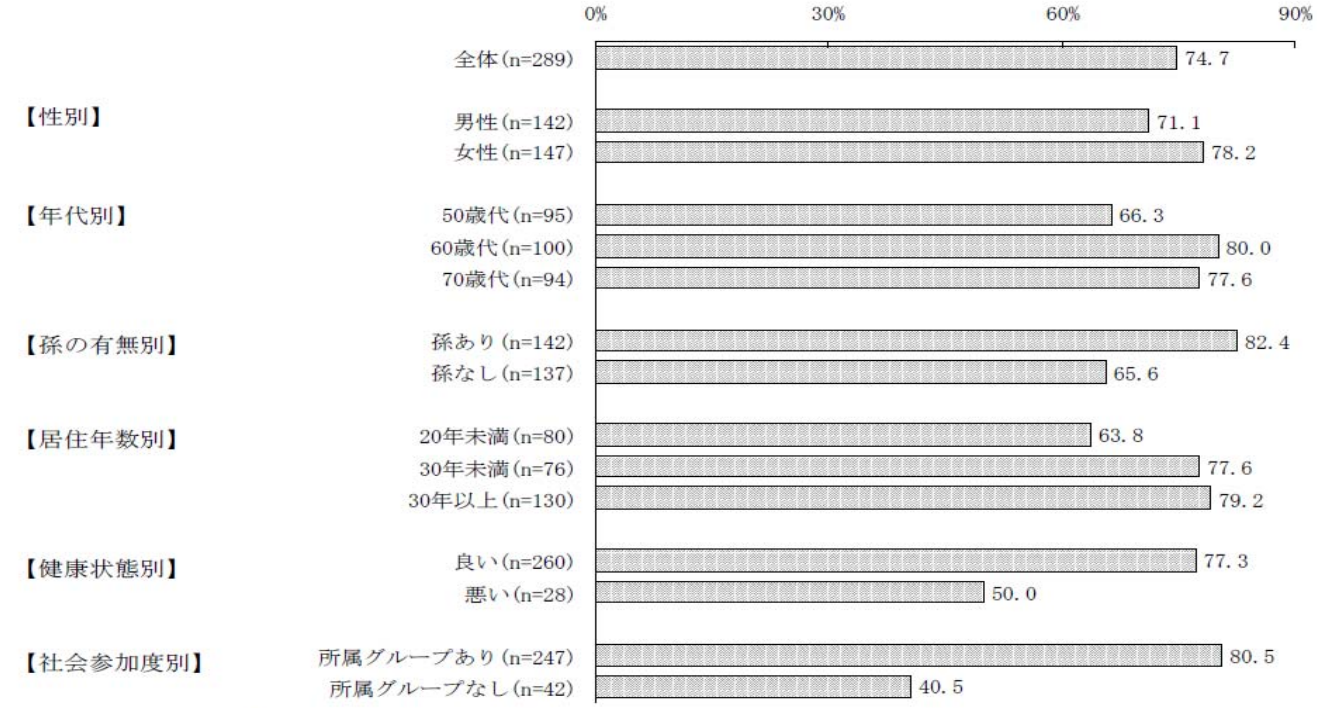
『世代間交流がコミュニティに果たす役目は・・（中略）・・コミュニティの崩壊（近隣での助け合いの弱体化）を食い止めるということである』

（築山　2010）



# 1.問題意識　子供との交流への関心

対象者：全国に居住する50～79歳の男女300名




注１：「関心がある」「どちらかといえば関心がある」と答えた人の合計
注２：調査票では「子ども（就学前の子ども、小中学生、高校生）」と表記している。
注３：「所属グループあり」とは、趣味や地域などを通じた何らかのグループ・団体に所属する人

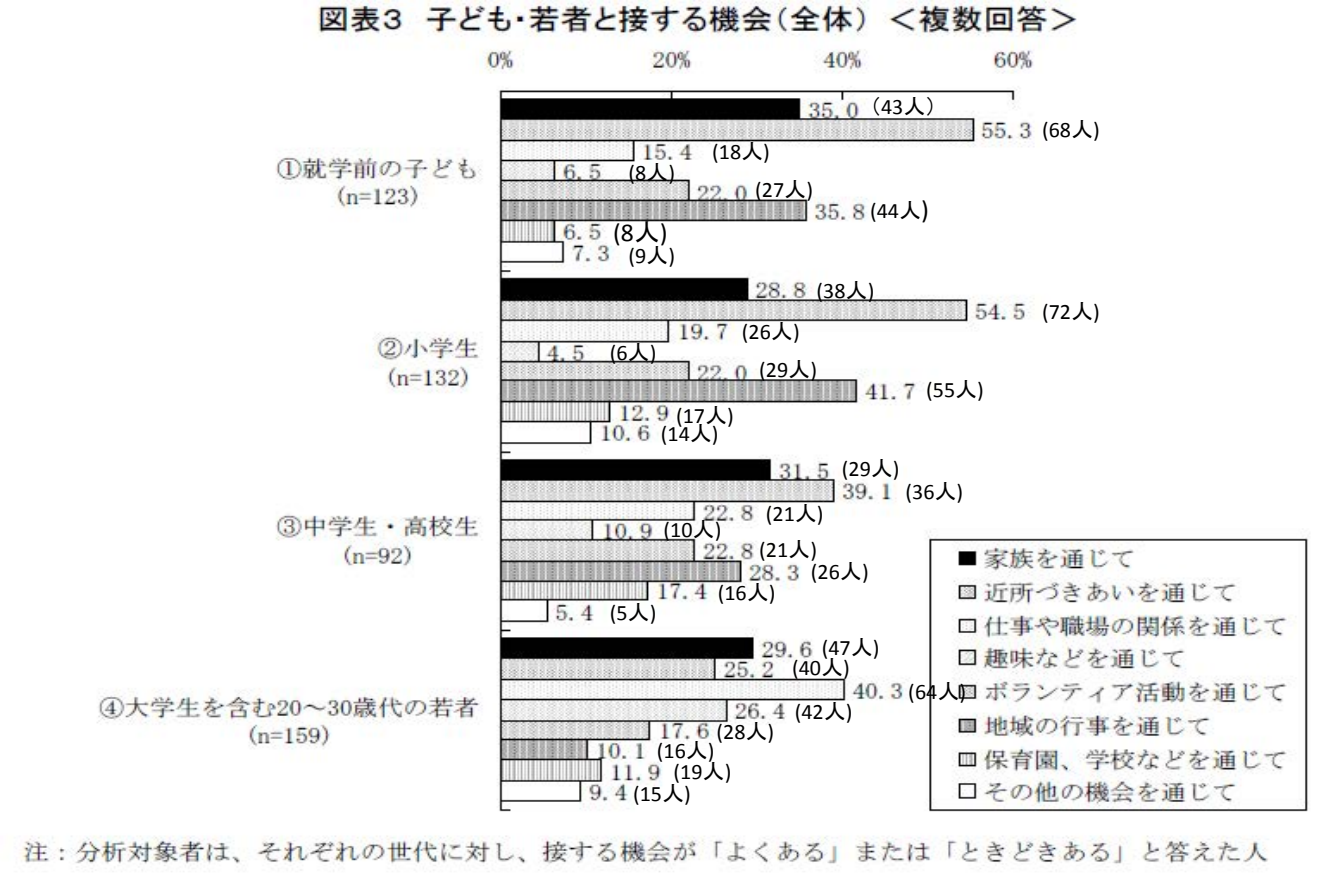
101-82



出典：世代間交流に関する調査

# 1.問題意識　接する機会がない

対象者：全国に居住する50～79歳の男女300名




出典：世代間交流に関する調査



# 1.問題意識

## グラフの解釈

シニア・シルバー世代の多くは
子供との交流に前向きであり
関心を持っているにもかかわらず
接する機会が少ないと言える

⇓

**世代間交流の希薄化**

## 2.既存研究

### 世代間交流とは

『世代間交流とは「子ども、青年、中・高年がお互いに自分たちのもっている能力や技術を出し合って、一人ひとりが活動の主役となること」である。』

草野（2005）



## 2.既存研究

### 世代間交流がもたらす影響

『幼児と高齢者の交流の利点は、幼児にとっては、「保護者が教えられないことを学べる」、「高齢者を大切にする」、「やさしさや温かさが身に付く」などであり、高齢者にとっては「生きがいになる」、「元気になる」などであった。』

林谷・本庄　（2012）

## 2.既存研究

### 世代間交流の課題

「これまでの世代間交流研究では、おおむね介入研究によりプログラムの効果が検証されてきた。・・（中略）・・そうした効果は数ヶ月という短期的なものである。」

「『世代間交流の長期的効果』についてみると、個人の持つ時間や文脈を考慮したうえで世代間交流の長期的な効果を検討する必要があろう。」

村山（2011）



## 3.問い

**どうすれば**
**世代間交流は長期的に**
**なるのだろう？**

# 4.仮説

## 現在の世代間交流

- 地域等のイベント
  ⇒短期的

Ex.「習字で交流を図ろう」
　聖ヶ丘商店街(多摩市)
冬休みの子どもの書き初めの宿題を
高齢者が指導



出典：多摩うどん「ぽんぽこ」・聖ヶ丘商店街の課題解決プロジェクト

# 4.仮説

## 世代間交流を長期的に行うには

『特別なことではなく、食事をする、おやつを食べる、遊ぶ、話をする、寝転ぶ、テレビを一緒にみるなど日々、生活の中でしているようなことをしながら高齢者と子どもが時間と場を共有し、くつろげるような交流が重要である』

林谷・本庄　（2012）

## 4.仮説

つまり・・・

長期的に世代間交流を行うには
日常的な交流をすることが
必要なのではないか

⇓

地域コミュニティ崩壊を食い止めることができる



## 4.仮説

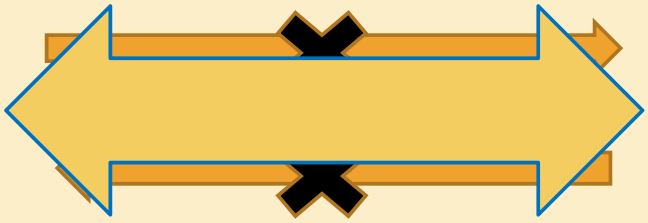
改善するには・・・

- 地域などで自然と交流が行える
  仕組み（システム）を見つければ
  日常的な世代間交流に繋がるのでは？

# 4.仮説

## 世代間交流のシステムの指標（定義）

・交流することで、一方ではなく双方にプラスになること



保護者では教えられないことを学べるetc..

生きがいになる etc..



# 5.事例（日野市）

## 日野市の活動

## ひのっち（2007年6月より始動）

- 世代間交流を推進している日野市では、放課後の子どもたちの安全で安心な居場所づくりを、地域の方々の協力を得て実施する市の事業。放課後、学校内の教室・校庭・体育館などに安全管理員（ひのっちパートナー）を配置し、見守りを行うことで、安全な遊び場環境を提供している。

事例として選んだ理由：高齢者と子どもが日常的な交流をしていること

# 5.事例(花時計)

≪運営団体≫ゆう[3](ゆうスリー)
≪設立≫ 2005年3月10日

三世代の昔ながらの家庭的雰囲気を大切にするため一軒家を改築し、定期的に様々な講座やイベントを開催する他、昼食を共にすることで日常的な交流を行っている。



事例として選んだ理由:高齢者と子どもが日常的な交流をしていること

# 6.調査(ひのっちインタビュー)

調査日8/12,10/30
対象　日野市役所職員,ひのっちスタッフ

| 特徴 | 効果 |
|---|---|
| ・登録制(名前や住所など)<br><br>・活動を円滑に進めるためのコーディネーターがおり、活動のカリキュラムを考える<br><br>・勉強や遊びを教える、共に行う<br><br>・毎日の活動には必然的に交流が生まれるような活動がある | ・多世代と関わることで子供の成長につながっている<br><br>・地域貢献の意識が高まる<br><br>・地域での交流にもつながり、コミュニティが形成される<br><br>・ひのっち外でも声を掛け合うようになる |

101-89

# 6.調査（ひのっちアンケート）

アンケート調査（別紙）より

「ひのっち」のような交流をすることで、

・地域の子どもへの関心
・地域での仲間づくりの意識
・地域活動への興味
・人脈

といったことが増加していると明らかになった。

→つまり、**地域コミュニティの形成**へとつながっている



# 6.調査（花時計インタビュー）

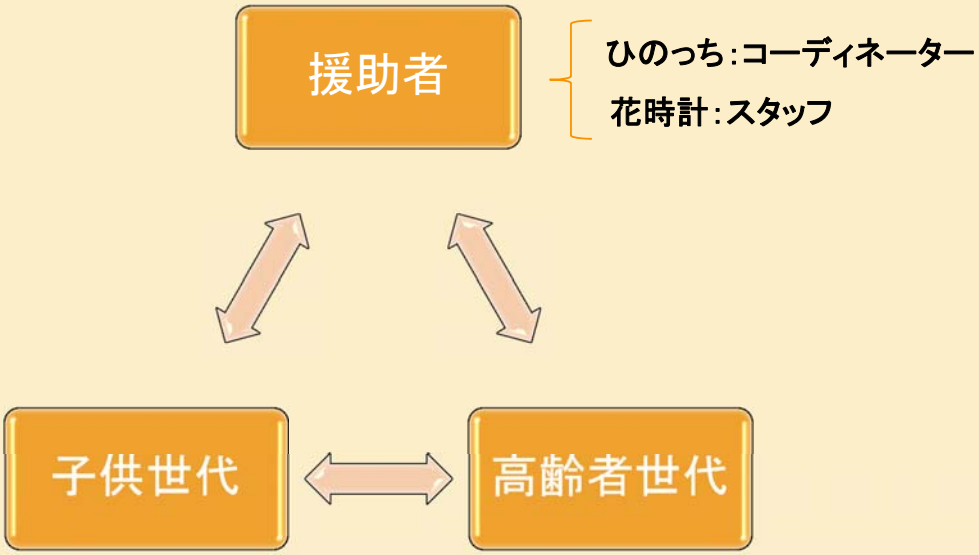
調査日2014/9/16

対象　施設長　石嶋和子　様

| 特徴 | 効果 |
| --- | --- |
| ・登録制（名前等の簡単な登録）<br><br>・スタッフが積極的な声かけで交流をサポート<br><br>・様々な講座を毎日行う<br><br>・多世代で一緒に昼食をとる | ・一人暮らしで外出しない高齢者が積極的に外出するようになった<br><br>・うつ状態から回復した人もいる<br><br>・地域で会ったときなど声をかけ、地域の情報交換も容易になる<br><br>・新たなコミュニティの形成 |

# 7.結論

## 共通点




『主役に据える高齢者と子どもの双方向の交流として捉えるのではなく、高齢者と子どもとの交流を企画する世代の三方向の交流として捉える必要がある。』

金森（2012）

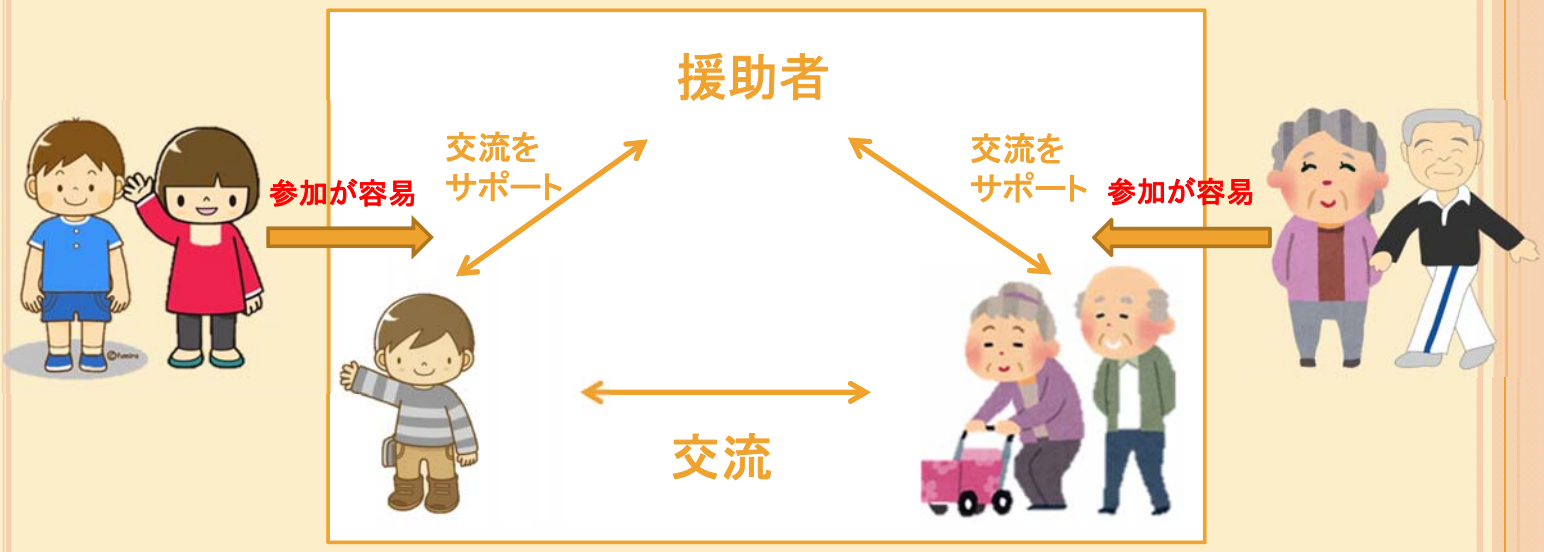


# 7.結論

| 共通点 |
| --- |
| ・交流の援助者がいる（援助者も地域住民） |
| ・地域住民が主体となった活動 |
| ・地域住民の生活に根付いた場所で行う |
| ・参加が容易である |
| ・会話をしなければ成立しない活動をしている（工作や講座etc…） |

# 7.結論

## 地域住民の生活に根付いた場所




・地域住民が主体である
・会話をしなければ成立しない活動をする
・参加が容易である

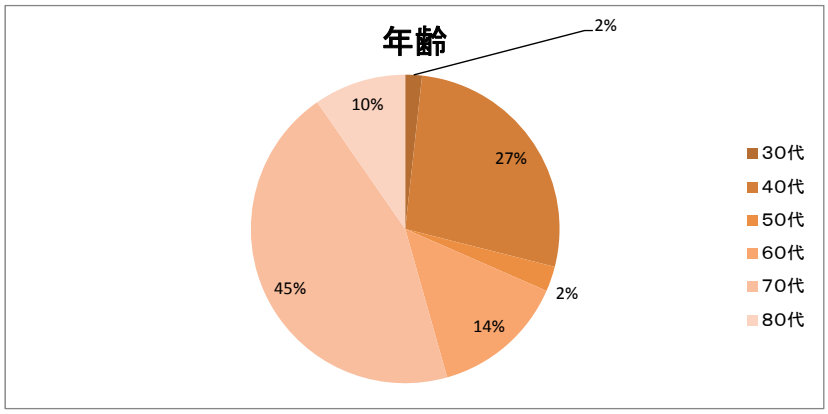


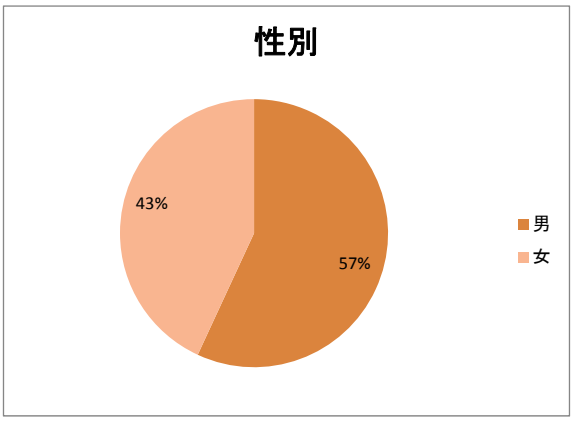
# 参考文献

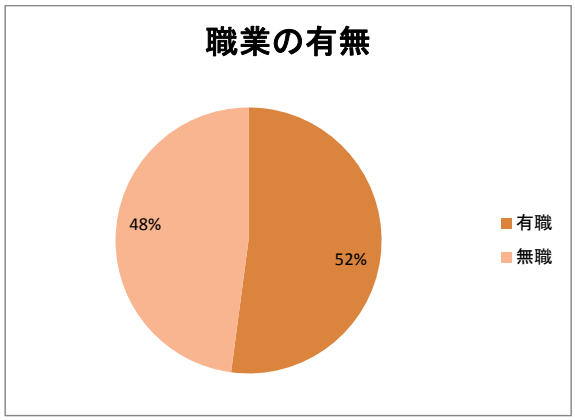

・多摩信用金庫（2013）　「多摩地域　地方公共団体アンケート調査」
・林谷啓美・本庄美香（2012）　「高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方」
・村山陽（2011）「世代間交流学の樹立に向けて」
・北村安樹子（2004）　「シニア・シルバー層の世代間交流の実態と意識」
・草野篤子（2005）「超高齢社会における世代間交流モデルの研究」
・日野市ホームページ
http://www.city.hino.lg.jp/index.cfm/196,112119,348,1998,html
・上野緑子（2009）「挨拶が上手にできることの重要性」
・金森由華（2012）「高齢者と子供の世代間交流 - 交流内容を中心に - 」
・公益財団法人長寿科学振興財団
http://www.tyojyu.or.jp/hp/menu000000100/hpg000000002.htm
・山内一宏（2009）　「少子高齢化時代におけるコミュニティの役割～地域コミュニティの再生～」
・築山崇（2010）「世代間交流による相互扶助活動の活性化と福祉コミュニティ形成に関する実証的研究」
・庄子峻浩・後藤孝輔・橋本祥希（2013）　年度多摩大学地域プロジェクト発表祭発表資料　多摩うどん「ぽんぽこ」・聖ヶ丘商店街の課題解決プロジェクト

# 【ひのっち】アンケート結果

東京経済大学



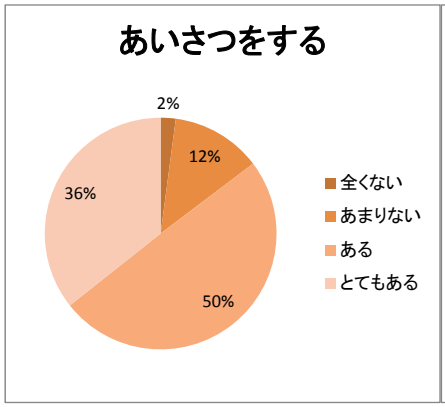



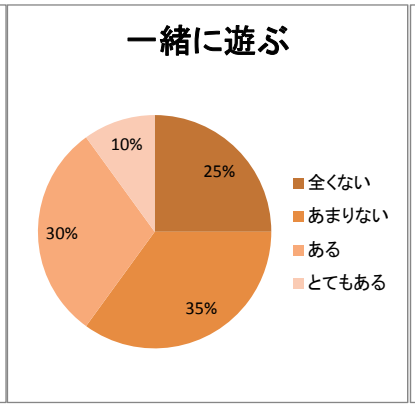

参加年数平均　5.1 年

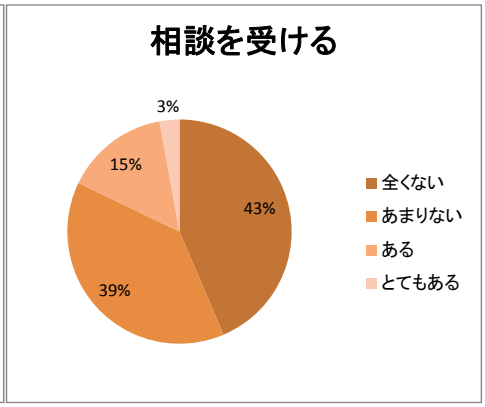
ひのっち以外の職業
〈例〉
・シルバー人材センター
・保育ボランティア
・管理人職
・事務
・パート



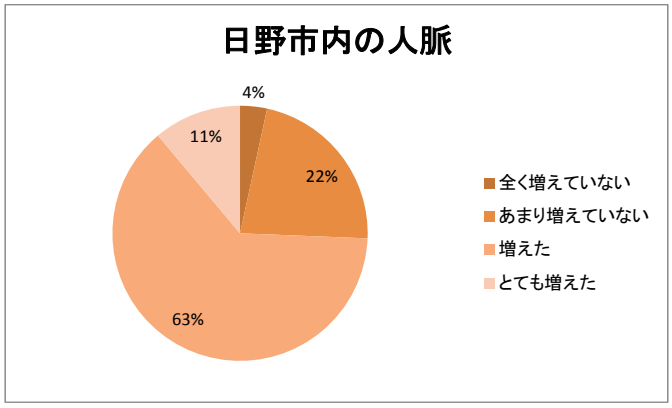
Q　地域の中で子供たちとの接触がどの程度ありますか



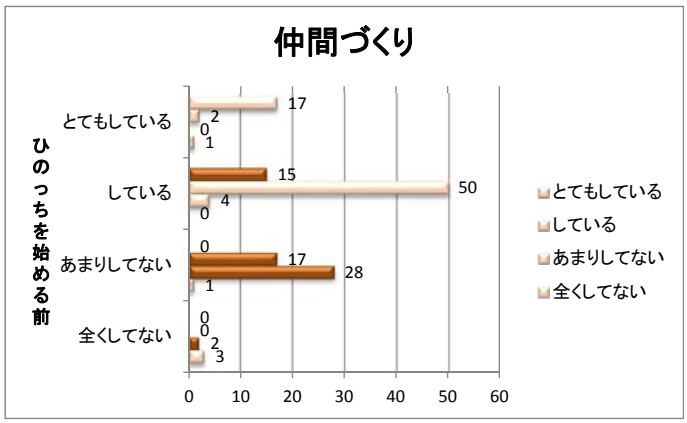




Q　ひのっちに参加して日野市内で新しい人脈は増えましたか

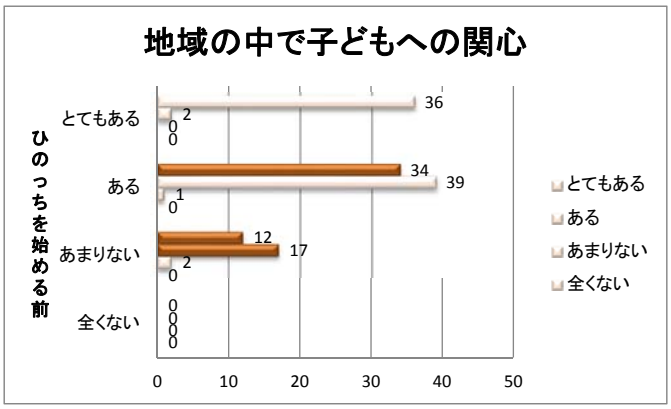



101-93

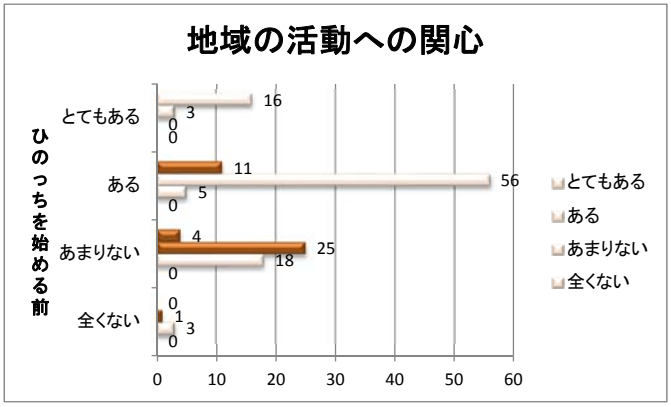
Q　ひのっちを始めたときと現在でどの程度重視していますか



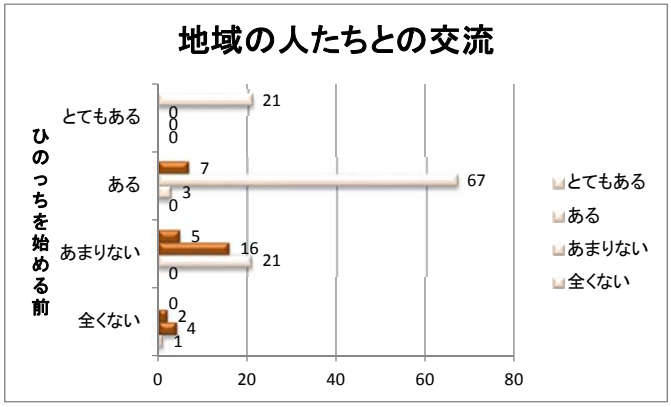

Q　地域の中で子供に対してどのくらい関心がありますか




Q　地域の活動への関心はありますか




Q　地域の人たちとの交流はありますか



# 天下の台所で「くいだおれ」

～様々な食べ物が食べられる街、大阪～

帝塚山大学経済学部　２年
松岡郁佳（発表者）・加藤優花・桑田圭・杉谷由貴

このまちづくりプランは 9 月 11 日（木）に大阪府咲洲庁舎で開催された、大学生観光まちづくりコンテスト 2014（主催：大学生観光まちづくりコンテスト運営協議会）西日本ステージ本選で発表したものです。コンテストの対象地域は大阪府全域、テーマは「訪日外国人向け観光まちづくりプラン」でした。

## 提案の概要

海外にはカナダのトロント市のように、各国の料理・文化が体験できるエスニックタウンを観光資源としている街があります。本プランは外国人観光客に鶴橋（大阪市生野区）の韓国料理、大正（大阪市大正区）の沖縄料理など、大阪にいながらにして味わえる各地の料理を楽しんでもらうことを目的としています。

鶴橋のコリアタウン

ターゲットは欧米からの旅行客です。彼らは東京→富士山→京都→大阪といういわゆる「ゴールデンルート」を通って、旅程の最後に大阪に来ると言われています。寿司などの日本料理にはすでに飽きているかもしれない滞在最後の日の夕食に韓国料理や日本各地の郷土料理を味わってもらい、また日本に来たいと感じてもらうことがこのプランの目的です。

欧米からの旅行客は日本へ来るのが初めてであるケースが半数を占めていますが（訪日外国人消費動向調査）、このプランによってリピーターを増やすことができるでしょう。

大正の沖縄料理店

## 実現計画

- ◆　鶴橋や大正など、各地域の店舗や商店街に協力を依頼する。
- ◆　旅行客に影響力のある人気ブロガーを海外から招待し、ブログを書いてもらう。
- ◆　２か国語でパンフレットを作成し、ホテル・成田空港・大阪駅、新大阪駅に置いてもらう。

といった方法で鶴橋・大正への外国人観光客を増やそうと考えています。

# 地域と連携して大学生が取り組むネットパトロール

帝塚山大学　経営情報学部　日置ゼミ４年　小林和希

## １．ネットパトロールとは

奈良県では、青少年を有害な環境から守るために「青少年を有害環境から守る奈良コンソーシアム」を組織し様々な活動を行っている。

> 参考：「青少年を有害環境から守る奈良コンソーシアム」趣旨
> （http://www.pref.nara.jp/6646.htm）
>
> 本会は、近年の急速な情報化により、青少年が犯罪被害に巻き込まれるなど、メディア上の有害情報をめぐる問題の深刻化を踏まえ、青少年がメディアを安全に安心して利用するための推進体制を整備するとともに、青少年指導者の意識やメディア対応能力のを向上することで、青少年を取り巻く有害環境対策の推進を図ることを目的としています。

その中の１つの活動がコンソーシアムと帝塚山大学が連携して行っている「ネットパトロール」であり、日置ゼミでコンピュータやネットワークなどを専門としている大学生がインターネット内をパトロールすることにより、奈良県の青少年（高校生以下）がネット上に書き込んだ以下のような投稿を検索、発見し、コンソーシアムに報告する。

・いじめなど誹謗中傷
・名前、学校名、学年、クラス、住所、連絡先などの個人情報
・喫煙、飲酒等の法律に触れる行為

## ２．活動

日置ゼミがネットパトロールを開始して今年で３年目となる。1 年目の 2012 年にはデコログなどの携帯サイト等で上記書き込みが見つかった。最近では青少年の活動の場が SNS に移動しているようである。わずか３年間であるが変化は非常に急速に進んでいるように感じる。

## ３．報告

これまでの経緯を踏まえ、発見された事例や最近の動向、そしてネットパトロール事業の全体像について報告したい。

なお、2014 年版「情報セキュリティ白書」（IPA 情報処理推進機構）の 115 ページに帝塚山大学のネットパトロール事業が紹介されている。

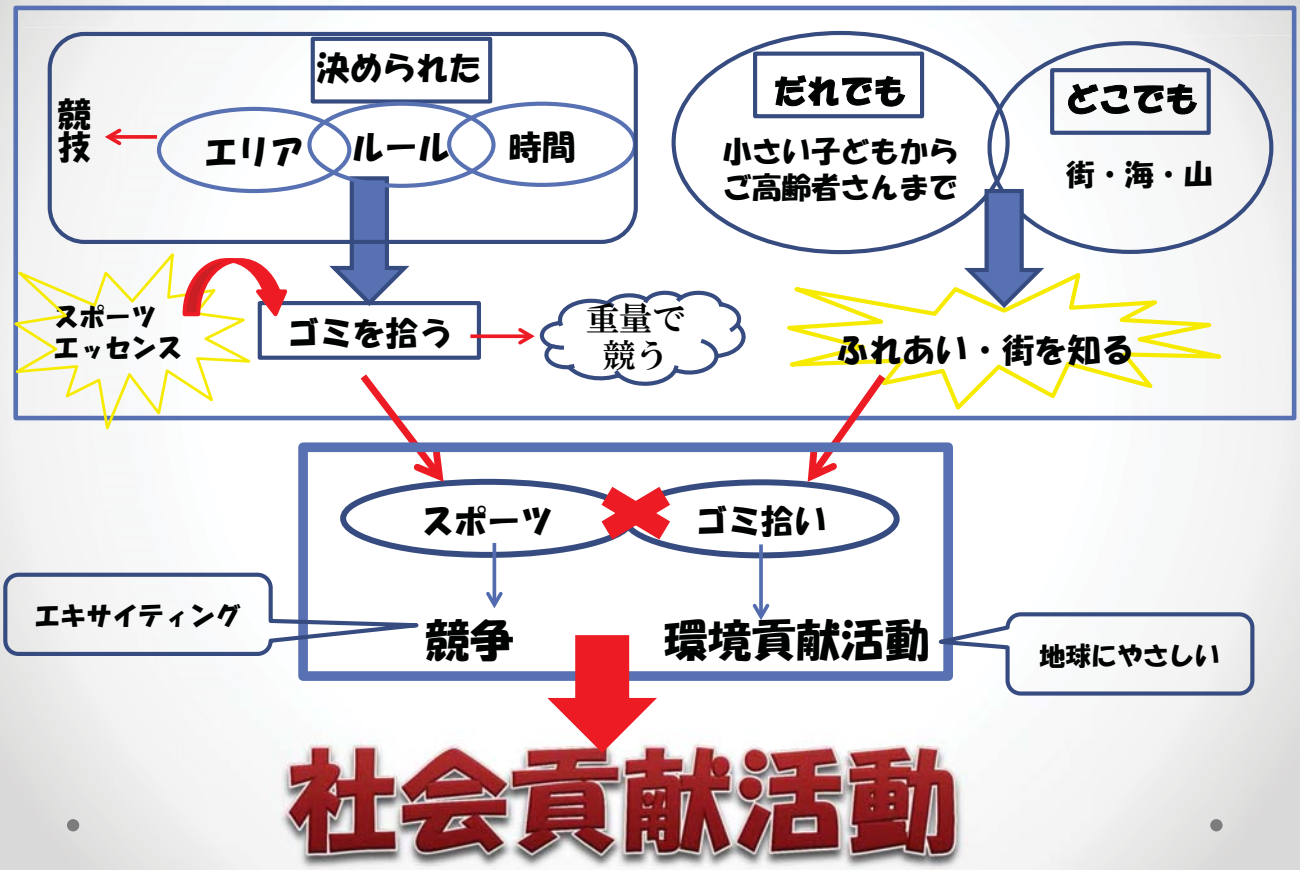
# スポーツGOMI拾い

久恒ゼミ

# 目次

- スポーツGOMI拾いとは？
ゴミ拾いの目的
ゴミ拾いのルール
順位の付け方
- なぜこの活動を選んだのか
- 今年の様子
- 学園祭での開催の流れ
- なぜ学園祭で？
- 開催当日
- 活動後の影響力
企画をしてみて
- これから普及させるには
- まとめ

# スポーツGOMI拾いとは・・？




# ゴミ拾いの目的

- 自然をゴミの汚染から守る
- リサイクル可能な資源回収
- ポイ捨てしにくい環境にする

結果 → **街の地域貢献**

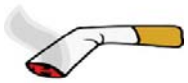
**ゴミ拾いをイベント化することで・・**

# スポーツGOMI拾いのルール

交通のルールを守る
走らない
チームはまとまって行動をする
粗大ゴミは拾わない
個人宅には入らない
ゴミを分別する

**走らないで！**との声が多かった

# いままでにない順位の付け方

| | | |
|---|---|---|
| ★ タバコの吸い殻 |  | 100g → 100ポイント |
| 燃えるごみ<br>コンビニ弁当等のトレーなども含む | | 100g → 10ポイント |
| 燃えないごみ<br>プラスチック・金属・ガラスなども含む | | 100g → 5ポイント |
| ビン・缶<br>中身は側溝に捨てる | | 100g → 10ポイント |
| ペットボトル<br>キャップをはずす　ラベルは燃えるごみへ | | 100g → 10ポイント |
| ペットボトルのキャップ | | 1個　→ 1ポイント |

# スポーツGOMI拾い in渋谷１

6月1日（日）

久恒ゼミチーム

# スポーツGOMI拾い in渋谷２

参加者145名

総重量 166.08kg

# 多摩祭開催までの流れ

スポーツGOMI拾いプロジェクト班

2年生７人
3年生２人計　９人

日本発祥の活動

馬見塚健一さん

日本スポーツ GOMI拾い連盟 Official Site
ゴミ拾いはスポーツだ

学園祭実行委員

・会場用意

# なぜ多摩祭で？

学校をきれいにする

**若い世代から普及させたい**

ボランティアの楽しさを知ってもらう

**多摩大学から**
**スポゴミを発信**

# 多摩祭の様子

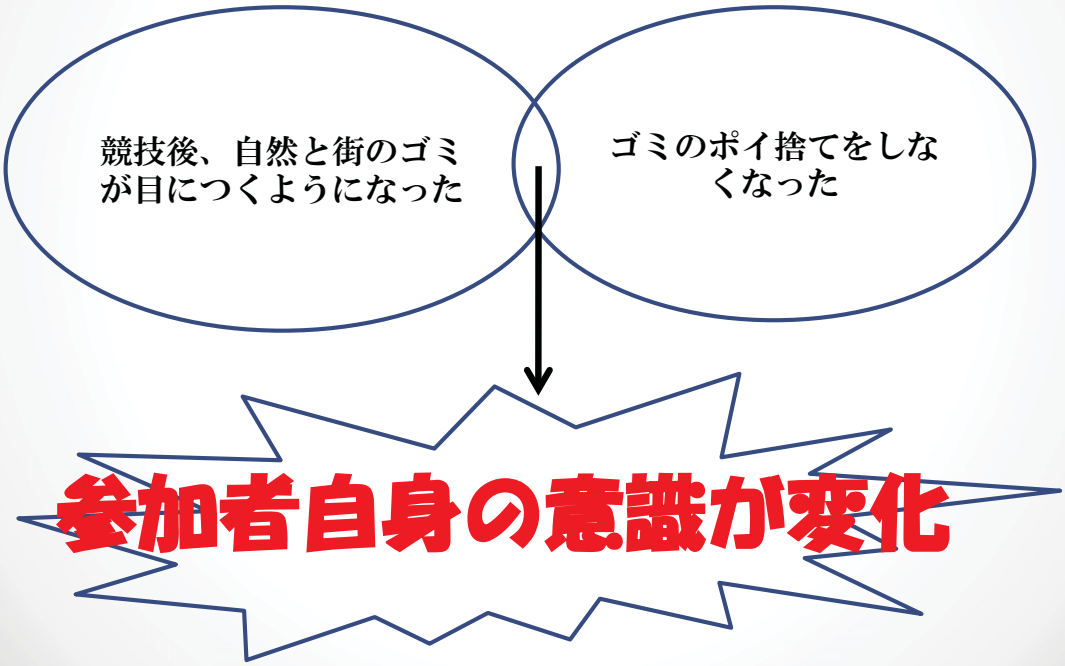
ゴミ拾い中・・・

# 多摩祭の様子その２

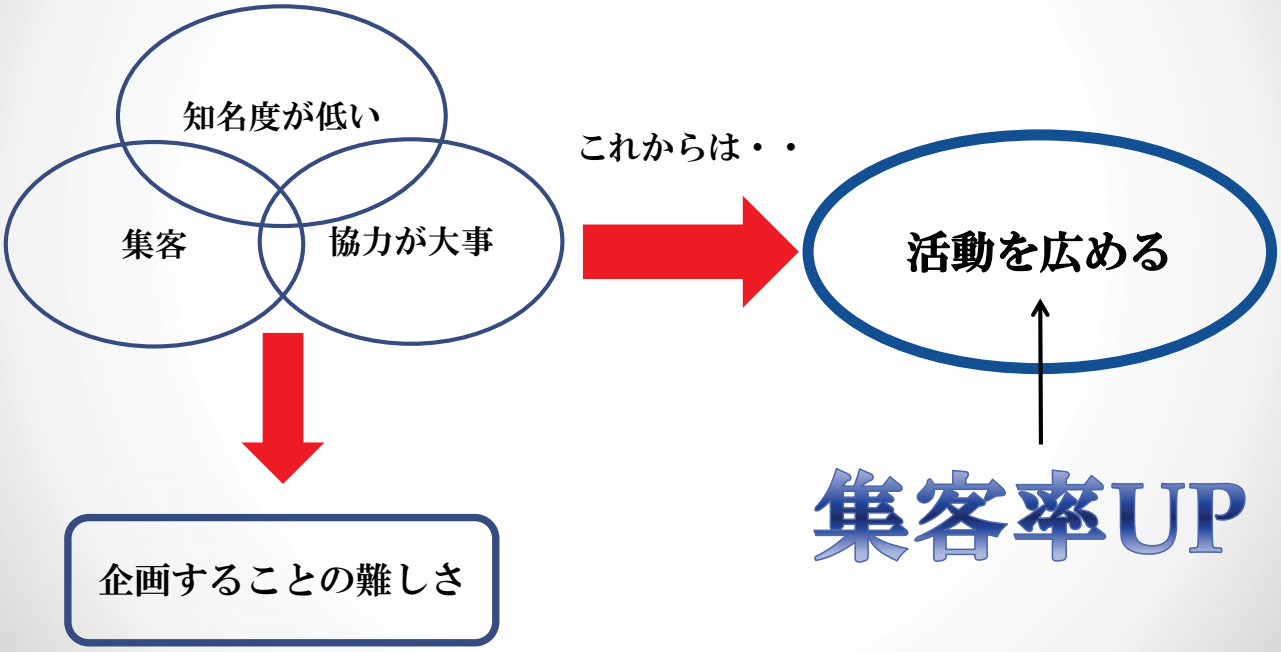
集まったゴミ

枝の間にもゴミが・・・

# 活動後の影響




# 企画してみて・・



# 活動を普及させるには・・

**SNS**

**他大学との連携**

・若者から呼びかける

**日本中に広める**

・４７都道府県で実施する

# まとめ

スポーツGOMI拾い

- 新感覚なスポーツ
- 意識の変化
- 街を知れる
- ふれあい

ご清聴ありがとうございました。

# スポーツGOMI拾い

久恒ゼミ

# 近隣交流七輪プロジェクト 2014 活動報告

多摩大学経営情報学部梅澤ゼミ
織田直樹、芝亮祐、芹澤誠（３年）
土屋建人、本吉健太、矢部雄太朗(２年)

## １、目的・経緯

近年、近隣交流、世代間交流をする機会が減少している。特に多摩市諏訪地区は、単身世帯が多く、域交流する機会が減少している。その一方で、昨年暮れに諏訪 2 丁目の建て替えが完成し、新たに居を構えた住民が増えた。

私たちは、近隣交流を目的とした「近隣交流七輪プロジェクト」を行っている。七輪の特徴を利用して交流の機会を提供する仕組みである。

七輪を使用する理由は、七輪自体が直径 30ｃｍと小さいため人と人との距離が自然と近くなるためである。また、食材に火が通るまでに時間がかかることを逆手にとり、食材が焼き上がるまで自然に会話の機会が生まれやすいということもポイントである。仲間同士は極力ばらけていただき、お客様同士で相席などをしていただくなど学生たちで場の設定をしている。初対面の人などはなかなか話しにくいと思うので、私たち学生が仲介役に入り、会話のきっかけづくりを行うなどいろいろと工夫している。

## ２、今年度の活動内容

### （１）諏訪名店街福島復興応援サマーセール　7 月 19 日（土）

今年度は梅澤ゼミの原点を確認し、「近隣交流」を目的とした活動を行った。昨年末に諏訪地域では諏訪二丁目の建て替えが完成したことが今年度の活動の主軸となる。諏訪に戻ってきた方々、新しく入居された方々をお迎えし、諏訪地域全体の様々な方々が交流できる場をつくることを目指し活動した。その結果、さまざまな交流できたと思う。

当日の店構え

### （２）ひじり館こども夏祭り　8 月 23 日(土)、24 日(日)

昨年度のひじり館こども夏祭りが大好評だったので、今年度も近隣交流七輪以外に他のプロジェクトメンバーに協力いただき、スタンプラリーを行った。

さらに梅澤ゼミグリーンライフ PJ も協力し、今年度もウッドクラフト教室も行った。

近隣交流七輪は、近隣交流をするだけではなく、ひじり館の課題である「こどもたちとお年寄りの方たちの世代間交流」を目指し活動をした。

今年度はアレルギー表示を徹底し、また、食材も国産、さらに質にもこだわって販売することにした。

ひじり館入口に設営

ウッドクラフト、スタンプラリーそれぞれの形でひじり館こども夏祭りを盛り上げられたと感じている。反省点もたくさん出てきたが、それをメンバーで話し合い、ひじり館まつりに向けて改善していった。

**（３）ひじり館祭り　１１月８日(土)・９日（日）**

今年度のひじり館まつりは、天候が悪く、近隣交流七輪は、１１月８日（土）だけの開催となった。急遽予定を変更し、仕入れた２日分の食材を初日 1 日で売り切ることにした。8 日の天候も芳しくなく不安であったが、近隣交流七輪は大盛況であり２日分を完売した。

ひじり館こども夏祭りの時に、今年度の新アイデアとしてステーキ串を少量販売したところ好評だったため、ひじり館祭りでは、仕入れ数を増やし本格的に販売した。こちらも好評で完売した。

ミニ・ウッドクラフト講座

ひじり館こども夏祭りの反省を生かして、交流しやすいよう七輪１台にゼミ生が一人付きファシリテータ役を積極的におこなった。
そのことでひじり館こども夏祭りより交流ができたとの声をたくさんいただいた。

**３、成果**

近隣交流七輪売上・来客数（）内はイベント開催期間

| | | | |
|---|---|---|---|
| 諏訪名店街サマーセール | （1 日） | 売上 11,700 円 | 来客数 42 人 |
| ひじり館こども夏まつり | （2 日） | 売上 20,800 円 | 来客数 49 人 |
| | スタンプラリー | （1 日） | 来客数 57 人 |
| ひじり館まつり | （1 日） | 売上 13,000 円 | 来客数 31 人 |

今年度は、小学生とお年寄りの方々が楽しそうに世代間交流している様子が見えた。昨年なかなか交流がしにくいとの意見をもらったため、七輪１つに付き一人の学生を置いて話しの仲介役をすることによって、８９昨年より交流できたとの声をたくさんいただいた。

今年度の活動にもいくつか新たな反省点が浮上してきたが、前年度の活動より意義のあるものにできたと感じている。来ていただいた方との交流もでき、お客さん同士でも交流ができていたので近隣交流七輪の目的である「世代間交流」と「地域内交流」を達成できたと思っている。
今年は、実行委員会の会議に毎回、複数で参加し情報を共有した点が、地域の皆様との連携がさらに深まった理由の一つであると考える。

**４、分析**

今年の活動では去年の反省点を改善して取り組んできた。しかし新たな反省点として、「呼び込みが弱く、学生らしさにかけていた」、「事前準備をもっと早く行動すればよかった」、「足の弱いお客様のためにテーブル席を用意するべきだった」、「オーダーミスが少なからずあった」などが挙げられた。昨年同様の反省点もあり、改善し来年に向けていきたいと考えている。

今年度は、他のプロジェクトを横断するかたちで梅澤ゼミと地域の方々のつがなりができていく実感を感じることが出来た。いつも七輪をご利用いただく諏訪小おやじの会のお父さんたちが諏訪小農園プ

ロジェクトのメンバーとつながり、次年度は新たな何かが生まれる兆しがある。

## ５、謝辞

**・多摩諏訪名店街東北復興応援＆サマーセール**

諏訪名店街会長様　あしたや共働企画様　まちづくり専門家様　諏訪五丁目自治会の皆様

**・ひじり館こども夏まつり・ひじり館まつり**

ひじり館運営協議会の皆様　聖ヶ丘連絡協議会様　一本杉炭焼き倶楽部様
多摩グリーンライブセンター森林会様
ひじり館こども夏祭り実行委員会の皆様　ひじり館まつり実行委員会の皆様

本年度の近隣交流七輪プロジェクトを運営するにあたって、私たちを支えてくださった上記の皆様はじめ、多くの方々に心より感謝申し上げます。

# 日本を元気にするIR
# 和風IR～対アジア・関西圏統合型リゾート構想～

インターゼミ（社会工学研究会）
サービス・エンターテインメント班

1年　田中優希/　佐藤朱音/　藤ノ木つぶら
2年　本田尚
3年　青柳利宏/　後藤大貴/　角野匡子/　田中信吾
4年　渡邊美憂/木下周
大学院　葛生/菊永/遠藤

# Presentation Outline

1. 研究調査の背景と目的

2. 関連分野の現況と動向
   (1) オリンピック班
   (2) IR班
   (3) おもてなし班

3. 和風IR導入に向けた具体的提案
   (1) メインコンセプトと概要
   (2)「3つの目的」を果たすための具体的提案

# 1. 研究の背景と目的

- 背景

2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致決定

我が国におけるIR導入についての国会審議（今年6月から）

**オリンピック後も持続的な訪日外国人の誘致を**

- 目的（研究成果）
  - 和風IR導入に向けた具体的提案（下記3つの目的を叶える）
    - (1) 日本文化を活用した国際競争力増加
    - (2) オリンピック後も持続的な外国人観光客増加
    - (3) サービス産業の高度化

# 2. 関連分野に関する現況・動向調査

## (1) オリンピック班

- 2020年東京オリンピック開催に関する具体的計画
  - ハード面　・ソフト面
- 背景となる観光政策（主にインバウンド促進に関する政策）
  - Visit Japan Campaign
  - 今後の政策の柱としてのMICE誘致促進計画

**ポスト・オリンピックの訪日マーケット拡大の促進戦略として「IR導入」は有効・重要**

# 2. 関連分野に関する現況・動向調査

## (2) IR班

- IR導入に関する先進事例（シンガポールほか）
- 我が国におけるIR導入の経緯と現況
  - 観光政策上の位置づけ（MICEおよびIR）
  - 法案に関する国会審議について
  - 我が国のIR導入の具体的計画事例：「お台場構想」（FW）

資料提供：フジテレビ資料

「“和”の文化」を核とした「ソフト重視」のIR導入が必要

# 2. 関連分野に関する現況・動向調査

## (3) おもてなし班

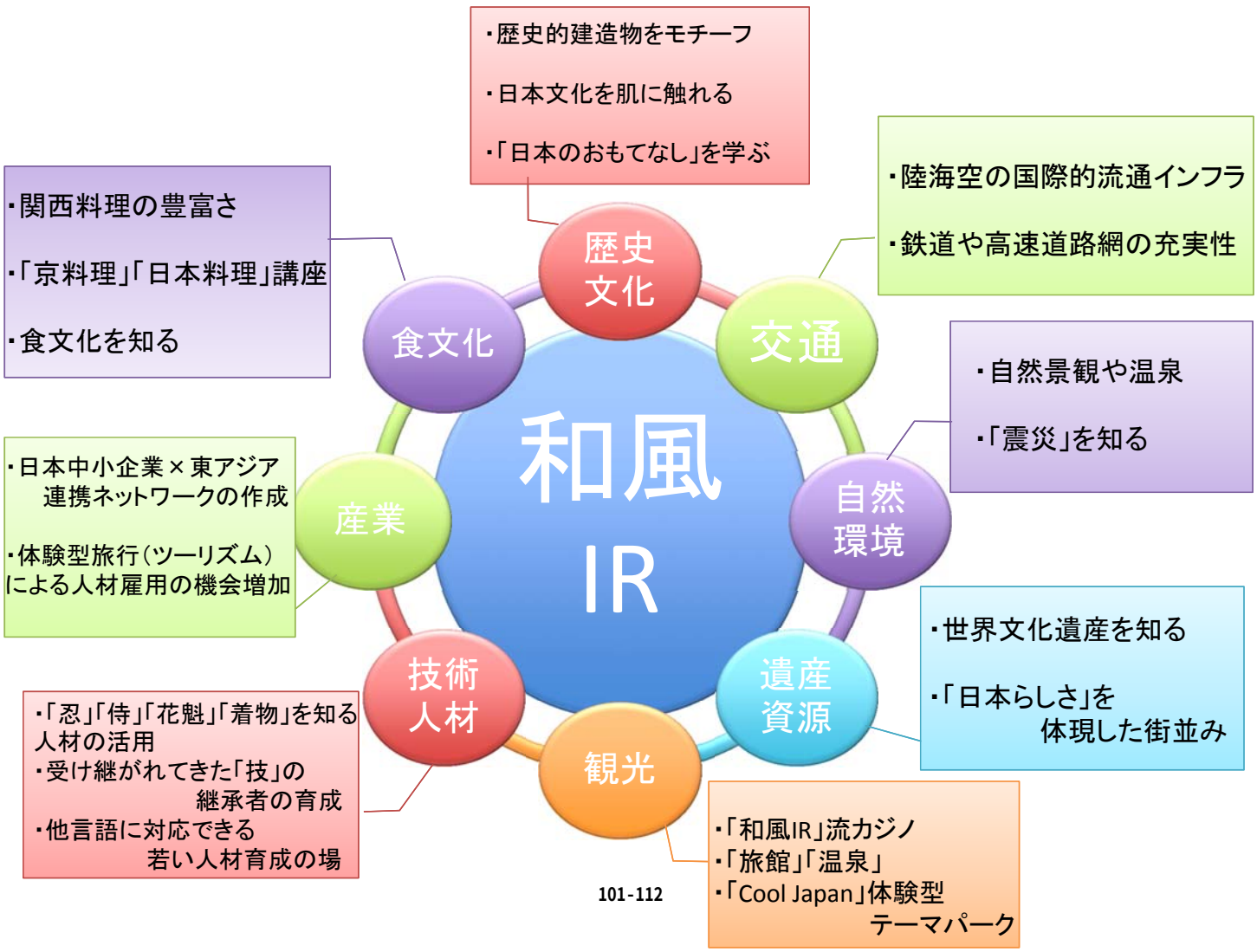
- 「お・も・て・な・し」の原点にあるものは何か？
- 「ホスピタリティ」「サービス」に関する西洋と日本の違い
- 外国人から見た日本の魅力（Cool Japanほか）
- 日本人が大切にしたい日本の魅力（「道」の精神ほか）

世界一級の「おもてなし」を日本の観光資源（ソフト面）としてPRすべき

# 和風IR導入に向けた具体的提案

## IRの定義

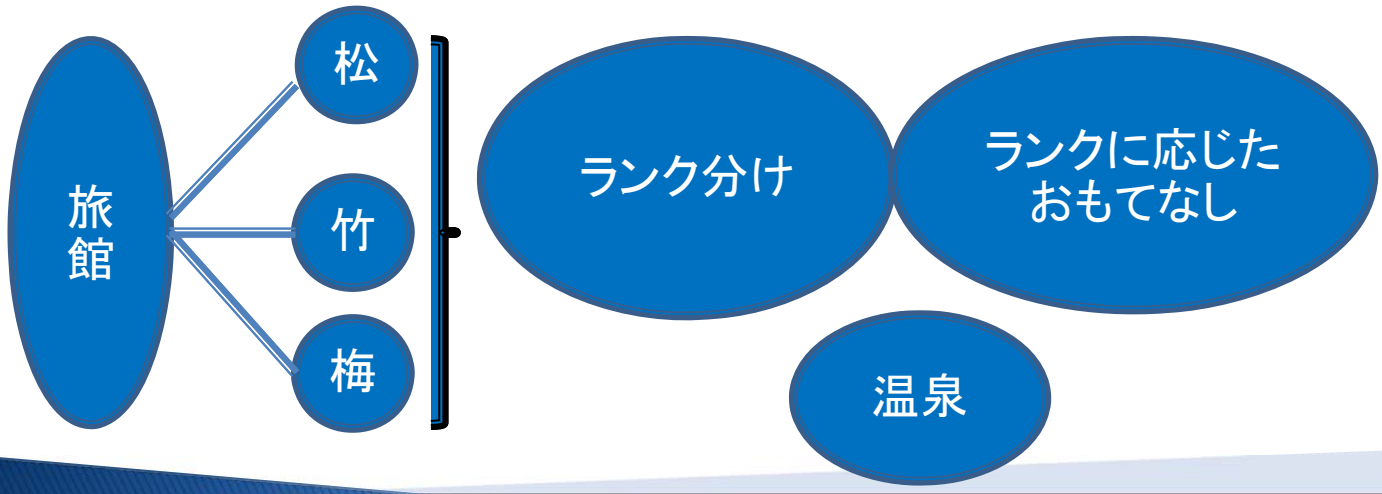
カジノのみならず、レジャー、ビジネス、エンターテインメントを包括的に含む施設を実現するために日本的エッセンスを加えたもの



関西
歴史文化
・歴史的建造物の宝庫
・能楽・顔見世などの伝統芸能
・「道」の歴史
交通
・陸海空の国際的流通インフラ
・鉄道や高速道路網の充実性
自然環境
・国立公園・国定公園の集積
・豊富な自然観光資源
・自然景観や温泉
遺産資源
・世界文化遺産の宝庫
・「日本らしさ」を体現した街並み
観光
・「過去」「未来」「現在」が混在している地方
・おもてなしを体現してるCS
技術人材
・各分野に特出した人材
・受け継がれてきた「技」の継承
産業
・先進性と創造性な中堅、中小企業
・ベンチャービジネスの豊富
・技術力の高い中小企業群
食文化
・関西料理の豊富さ
・「京料理」「大阪名物」など名物料理の豊富さ

宿泊施設
テーマパーク
統合型リゾート「和」
Shopping mall
カジノ

# 宿泊施設




# ショッピングモール

100円
ショップ

駄菓子屋

和服

電機屋

ドラッグストア

47都道府県の
アンテナショップ

http://www.aeonmall.com/business/article_36.html

# カジノ

店員が和装

お食事拠は屋台

内装は畳

パチンコ

花札

チョウハン

スゴロク

競馬

ジブリの千と千尋に出てくる
油屋のような外装

http://www.fsmaps.com/?p=962

# テーマパーク

温泉施設

お寺

舞子

江戸村

Traditional zone

アニメコーナー

茶道・武道体験

博物館

パレード
（祭）

J-pop zone

ご清聴ありがとうございました。

# 永山駅前まちびらき 40 周年プロジェクト

多摩大学永山４０周年プロジェクト
清水野乃子、小野寺友美、石渡ゆみ、金井沙樹
担当教員：多摩大学総合研究所
教授・副所長　松本祐一

## １．プロジェクトの背景

今年は、永山駅前のまちびらき 40 周年にあたり、グリナード永山を運営する新都市センター開発株式会社（永山営業・管理センター）は、多摩市、京王電鉄、小田急電鉄と連携し、地域住民の心に残る催事を行うことで、これまでの永山をふりかえり、未来の永山をつくっていこうとしている。また、末永く愛されるグリナードファン獲得を目指している。

「動員催事」として、ハローキティショーや芸人のライブなどを実施予定で、「文化的催事」として、グリナード永山の歴史展や、40 周年記念タイムカプセル、記念植樹、記念シンポジウムなど検討しているが、もっと住民主体で楽しく、おもしろい企画を近隣大学である多摩大学の学生に企画してほしいという依頼があった。

今回、このプロジェクトを実施するうえで、有志を募り、４名が手をあげてくれた。

## ２．プロジェクトの目的

多摩大の学生らしい斬新な発想で、これまでの 40 年の永山駅前の歴史をふりかえり、未来につながる住民参加型プロジェクトを企画運営する。

## ３．プロジェクト実施期間

永山フェスティバルがスタートする 9 月 20 日から 11 月末ぐらいをイメージ。多摩大の学祭が実施される 11 月 15、16 日を含む。

## ４．プロジェクトのアウトプットのイメージ

イベントというよりは、何かしらの制作物があるとよい（形に残る、いつでも見られる）。イメージはフォトモザイク。映像や画像などを利用できるとよい。



Copyright© 2014 Tama University Research Institute All rights reserved

## ５．企画案

学生のアイディアと新都市センター開発との打合せの結果、以下のような方向性に進めることが決定した。

### ■永山駅前の歴史展開催と記念ムービー制作の連動企画

【概要】

グリナード永山の２階正面入り口広場において、永山の歴史をふりかえる写真展を開催し、この写真展に訪れる住民の方々を対象に参加型の企画を実施する。例えば、昔懐かしい写真にコメントを書いていただく、巨大な地図を掲示して、思い出の場所やおすすめスポットにコメントや印をつける等、ただの写真展ではなく、住民が参加できる内容とする。また、時間を決めて会場に多摩大生が待機し､インタビューやムービー撮影を行い､それを記念ムービーとして編集する。

#### １）目的

これまでの永山の４０年をふりかえり、未来の永山について、考え行動する機会を得ることで永山への愛着をさらに深める。

#### ２）実施内容

企画は大きく以下の２つで構成される。

①歴史展の開催

・永山駅周辺の今昔の写真の展示

→写真は多摩市（パルテノン）や京王電鉄、小田急電鉄、ＵＲ等から展示用に加工されたものを借りる。

・写真に対するコメントの添付

→ただ、写真を眺めるだけでなく、みている住民がコメント等の何かしらのアクションが起こせるような仕掛けをつける。

・永山周辺地図の展示

→写真の場所がどこかがわかるような地図を掲示。また、その地図にも住民が何かしらのアクションが起こせるような仕掛けをつくる。

②ムービーの制作

・住民へのインタビューを撮影し、編集、１０～１５分のムービーとして制作する。

→写真展や他イベントに来場する住民に対して撮影許可を得て実施。インタビュー内容は要検



Copyright© 2014 Tama University Research Institute All rights reserved

討。例えば、永山のおすすめスポット、好きなところ、自分の夢、未来のまちのイメージ、変わってほしくないところ等。

・ＯＰはドラマ「仁」のような昔と今の同じ風景を重ね合わせるようなイメージ。

・永どんを使って撮影(バラエティ番組の知っとこ風)

・制作したムービーは４０周年記念時期を過ぎても公開できるようにする。

## ６．スケジュール

■7 月　7/17　オリエンテーション

■8 月　企画案検討

■9 月　前半　企画確定～準備

9/20.21　永山フェスティバル

9/20　ミニ歴史展にてインタビューの試行

9/22～上記を踏まえ、本番企画の調整と準備

■10 月

10/3～12　写真展　インタビュー実施

終了後、ムービー制作

■12 月

12/13　地域プロジェクト発表祭でお披露目

以上



Copyright© 2014 Tama University Research Institute All rights reserved

# 地域ビジネス構想プロジェクト

奥山ゼミ（地域産業・中小企業研究室）
（発表：野菜販売プロジェクト　２年、大貫、村木、宮崎、石川、山浦）

## １．地域ビジネス構想プロジェクトについて

「多摩グローカル人材」の育成のためには、知識の付与に加えて、地域課題を一体化した「プロジェクト型地域学習」が重要である。

そこで、地域課題解決を図る新事業のアイディアをビジネスとして実践することや、ビジネスプランに落とし込み、それをビジネスプランコンテストの場を通じて発表することで、地域課題の発見から事業アイディアの発出、起業マネジメントまでの一連の事業創出プロセスを実践的に学習する「プロジェクト型地域学習」を実施する。

ビジネスの実践は、地域ビジネスをすでに運営している企業と連携して実施する。また、自分たちが企画したビジネスプランについては、ビジネスプランコンテストへのエントリを行い、プレゼンテーション機会の獲得を目指す。

今回の発表は、そのうち、ビジネス実践プロジェクトとして実施した、野菜販売プロジェクトについてである。

## ２．今年度の取組

今年度は、京王電鉄株式会社が地域貢献の一環として実施している移動販売車の認知度向上を目的として、京王電鉄移動販売車と同時間帯に、東北野菜（庄内野菜）を学生自身の手で販売し、生きたマーケティング、経営を学ぶとともに、移動販売のにぎやかさを演出するための東北・庄内野菜販売を実施した。庄内野菜の仕入れルートの確保およびマネジメント指導は株式会社 MNH に協力を仰いだ。

学生は販売戦略を練り、販売前日、庄内に直接、仕入発注を行う。当日は値付け、POP 作成、宅配便で到着する仕入品の受取、商品陳列、販売を実施した。

野菜販売は、夏休みの期間、計 4 回実施した。これは、単発ではＰＤＣＡサイクルを回すことができず、学生の経営能力の向上につながらないからであり、複数回を繰り返し、徐々に進歩していくことをねらいとしているからである。

## ３．今年度の成果と課題

本プロジェクトは、商品の仕入・販売という、経営の最も基本的なスタイルに

おける一連の運営プロセスを学生自身の戦略と意思決定によって実施することで、実践的な経営学を学ぶ場として高い効果があった。学生としては、参加したことにより、「売れ行きや売れ筋商品が天候に大きく左右されることを理解した」「他店の価格動向に留意することが重要だとわかった」「商品説明をしっかりとできることが重要」「品物をきちんと、わかりやすく陳列する」など、店舗運営の基礎の重要性を理解できた。

経営成果も、各回の野菜はすべて完売し、一定の利益を捻出できたことから、十分であったといえる。

一方、移動販売の認知度を高めるという目的は、十分な効果があったとはいえない。今後は、品揃えの工夫などにより、より多くの集客を図り、移動販売の認知度を高めていくことが重要である。

野菜販売の様子

プロジェクトゼミ
集客施設のマーケティング「サンリオピューロランドの課題解決」
地域発表祭　配布資料

2014 年 12 月 13 日

■目次

１・サンリオピューロランドゼミとは・・・
２・５年間の歩み
３・今年度の目的
４・今年度のテーマ
５・企画の経緯
１）多摩地域の大学生対象アンケート調査（７月～８月）
２）サンリオピューロランドの出口調査（７月）
３）プロモーション事例調査（10 月）
６・企画内容・今後の予定

**■１・サンリオピューロランドゼミとは・・・**

サンリオピューロランドの「もっと大学生の来場者数を増やしたい」という課題に対してプロジェクトを通して解決していくゼミ。これまでの５年間はその手段としてイベント運営・企画で解決してきた。

**■２・５年間の歩み**

平成 21 年度
SANTAMA ロマンティックナイト
～夜のピューロで仮装パーティ～

| | |
|---|---|
| ターゲット | 多摩地域在住の大学生 |
| コンテンツ | 観覧型クリスマス仮装ショー |
| コンセプト | 卒業生がサンリオピューロランドに行きたくなる |
| 集客 | 131 名 |
| 売上 | 26 万円＋協賛金　　黒字 |

平成 22 年度
SANTAMA お宝探さナイト

| | |
|---|---|
| ターゲット | 多摩ニュータウンに関わる学生 |
| コンテンツ | サンリオピューロランド回遊型宝探しイベント |

コンセプト　顧客：GOODMEMORY を残す
SANTAMA:サンリオピューロランドの魅力を伝える
集客　119 名
売上　17 万８千円＋協賛金　　黒字

平成２３年度
SANTAMA Christmas Party
～今だからこそ考える　人と人の繋がり～

ターゲット　多摩市に関わる学生
コンテンツ　多摩センター回遊型クリスマスイベント
コンセプト　『交流』　学生×留学生×地域
集客　88 名
売上　17 万６千円＋協賛金　　黒字

平成２４年度
さんたま夢物語
～こどもの国をめぐろう☆～

ターゲット　大学生・専門学生・短大生
コンテンツ　参加型回帰イベント
コンセプト　学生が童心に帰れる時間

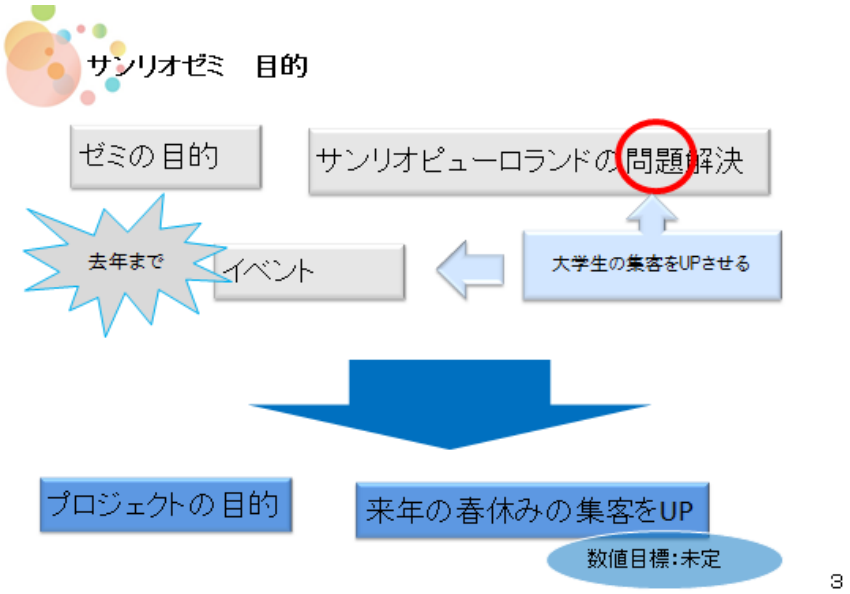
平成 25 年度
「OUR　STORY～執事からの手紙～」

ターゲット　大学生・専門学生・短大生
コンセプト　メルヘンな世界でいつもと違う自分になれる
集客　61 名
売上　約 10 万円＋協賛金

全体的な成果：全てのイベントが黒字。満足度が８０パーセント以上。
課題：これらのイベントを通してサンリオピューロランドの課題が
解決できたか定かではない。

**☆イベント運営・企画の限界☆**

■サンリオゼミ　　今年度の目的




■サンリオゼミ　　今年度のテーマ

『乙女系男子』というコンセプトでプロモーション企画

乙女系男子とは？？

爪のお手入れが行き届いている・肌の手入れをしっかりしている・可愛いものが大好き・カフェ巡りが好き・甘いもの、スイーツが大好き・お菓子作りや料理がすき etc・・・

■企画の経緯

１）多摩地域の大学生対象アンケート調査

目的：サンリオピューロランドに大学生の集客を増やす為、多摩地域の大学生の実態やピューロランドの利用実態・意向を把握することにより、２，３月に行う企画につなげること

調査結果

・学生はバイトや、サークル活動により平日・休日共に忙しい。

・休日に比べ、平日のほうが学校帰りということもあり、遊ぶ・ご飯といった目的のときは多摩センターに向かう傾向がある。

・通学が長距離の人が多かったので休日やアルバイトをしている時は多摩センターにはいないことがわかる。

忙しい平日に安くなっても行くことが困難

２）サンリオピューロランドの出口調査

目的：サンリオピューロランドに来場する学生は、サンリオピューロランドにどんなことを期待していたのか、実際に何を感じていたのか、今後どのような事を求めているのかということの情報を収集していき２、３月の企画立案に必要な情報を集めること

調査結果

・来場前は、カワイイ・キャラクターに会えるイメージが多かったが、狭い、つまらなそう、子どもっぽいとマイナスイメージの印象が多め。来場後はかわいい・ショーやパレードが本格的というのに続いて、楽しい、大人でも楽しめる、内装が綺麗とプラスイメージが多くなった。

サンリオピューロランドに行けば楽しむことができる為、行くきっかけを作る必要がある

４）プロモーションの事例調査

事例：フラッシュモブ・SNS 広告（はなまるうどんのエイプリルフールの企画『まるごとダイオウイカ展』・グリコの『ポッキー＆プリッツの日』)、〇〇系男子（佐川急便の『佐川男子』、本屋さんにいるイケメン『書店男子』、）

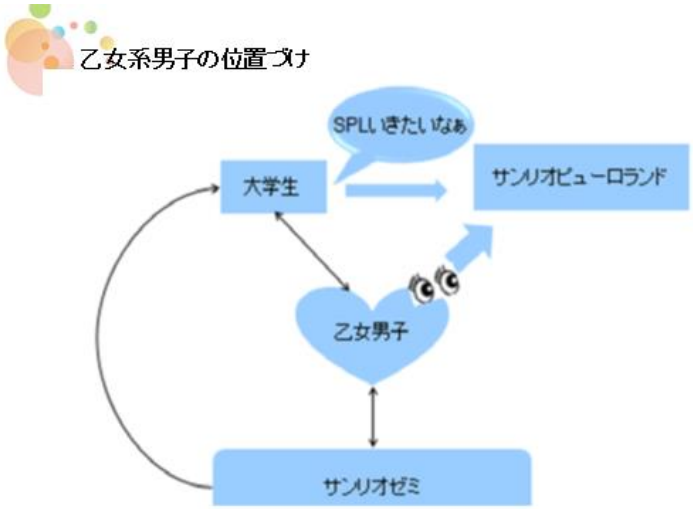
**☆プロモーションといっても何か個性がないと興味を惹くことができない・・・**

サンリオ＝女の子
を
サンリオ＝男の子

逆転の
発想

乙女系男子

●乙女系男子の位置づけ




■企画内容、今後の予定

Project1　　紙芝居方式で乙女男子の考えるデートプランや、乙女系男子 VS ゴリゴリ系男子を掲載していく。

例）

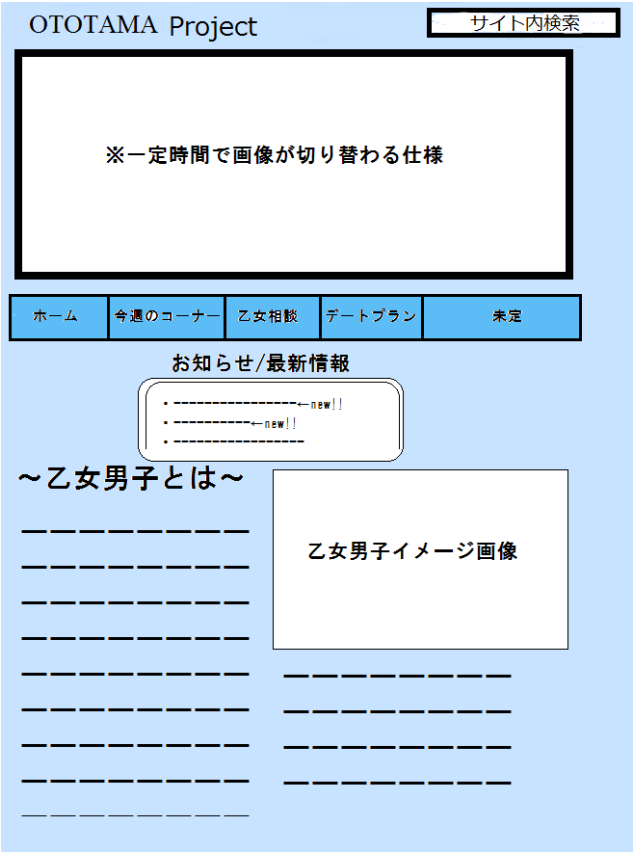
今後の予定：掲載内容の詳細を決める。

Project2　　乙女男子の検定を実施。（サンリオの HP 内で行う予定）

今後の予定：検定の内容の詳細を決める。

HP　　具体的な HP のデザインを社員さんに提案

例）



多摩大学　地域活性化マネジメントセンター

〒206-0022 東京都多摩市聖ケ丘４－１－１

TEL:042-337-1111

FAX:042-337-7100